
蒼い星 3rd Story

らんらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い星 3rd Story

【Z-コード】

Z9503E

【作者名】

らんらじ

【あらすじ】

シン力を慕う年上の秘書官コーディン。彼女と二人っきりでの研修旅行が決まって、シンカは複雑な心境です。さらに向かつた先の惑星セトアイラスでは、様々な冒険が待ち受けていて。新たな出会い、そして別れ。「蒼い星」シリーズ第三弾、です。

1・散歩（前書き）

この作品は「蒼い星」の続編です。単体でも楽しめますが、人物の過去など影響してきますので、「蒼い星」から読まれることを推奨します。

1・散步

1・散步

まだ、肌寒い早朝の風に吹かれて、青年の髪が揺れる。

並木の小さな新芽がまだ白い空にかすかに色を添える。巨大なビルが林立するこの地球一大の都市。灰色の町並みが続く。その中にひときわ黒々とそびえる中央政府ビルの正面にある、枯れた芝が敷き詰められた公園をシンカは歩いていた。傍らに美しい年上の女性と愛犬の二キを伴っている。

早朝のためか空を走る自家用飛行艇はまばらで、その陰が時折一人の上を流れる。日差しは白く一人を照らし、シンカの白い肌がますます透き通る。

蒼い大きな瞳が微笑むと、愛嬌のある美しい表情になる。

彼の傍らを供に歩けることにユージンは喜びを覚えていた。太陽帝國皇帝付主任秘書官である彼女は傍らの若き皇帝に特別な感情を抱いていた。

決して実ることはないだろうその想いを抱えつつも、ユージン・ロートシルトは自分の立場を幸せに感じる。

シンカは政府庁舎内の女性、特に秘書官たちには距離を置いていた。それはユージンも同様であり、彼女の密かな悩みでもあつたが、今ここにこうしていることは多少なりとも距離が近づいたと感じられる。白い息を吐く秘書官は頬を上気させ皇帝とその飼い犬について歩く。

運動不足に悩む彼女に「じゃあ、一緒に散歩でもするか?」と言つたのはシンカからだつた。

本来の犬の飼い主、シンカの幼馴染で恋人のミンクは大学生になってはじめての試験を控え、忙しくなり散歩ができなくなつたのだ。代行するシンカは予想以上にその散歩が楽しいらしく、身分を伏せ

る軽い変装もやめ、時折スクープされることも厭わなかつた。遠巻きに親衛隊が目を光らせているものの何があるまでは半径五メートル以内に近づかないことを約束させていた。

早朝に公園を散歩する人々は彼の正体を知つても、毎日顔を合わせるうちに仲間のような意識が芽生えるのか、特別扱いしない。そこがまた、シンカにとつては面白い発見だつた。

「おはようございます！」

向こうから走つてきた、若い女性が、軽く手を振りながら、すれ違う。

「おはようー！」

にっこり笑い返すシンカ。

ヨージンはジョギング中の女性を振り返りながら、少し息を弾ませた。

「ヨージン、疲れたのか？」

「いえ、そんなことは、ないのですが。」

隠そうとして慌てて平気な振りをする秘書にシンカは笑つた。

「いつもスースツ姿だから不思議だな。髪を下ろしているのも似合つよ。」

「陛下。」

少し照れる。

「若く見える。」

「あら、失礼ですわ！」

つんと怒る女性にシンカはいたずらっぽい視線を投げかける。確かに、十九歳のシンカから比べれば一十七歳のヨージンはかなり年上だろうが、その年齢で主任秘書官を務めているという事実は世の女性からすれば十分な成功談になる。美しい皇帝付き秘書官は憧れのセレブリティーとして有名なのだ。

「でも、俺はそのほうが好きだな。レクトが見たら喜びそうだな。レクトが嘆いてたぞ、いつも完璧でつまらないって。」とシンカはついでにレクトのスポーツウェア姿を想像し、変な顔になる。

「では、こんな姿、軍務官にはお見せできませんね。」

「どうして？」

「陛下にだけ、特別です。」

軽くウインクするコーディンの視線にシンカは少し戸惑う。

「陛下、軍務官は陛下と同じくらい女性たちの憧れなのです。軍務官は自身もそれをご存知で、よく秘書官たちをからかいいます。ですが陛下は、そのようなことはなさいません。秘書官を大切にしてくださいます。彼女たちにしてみれば、軍務官のようにからかって親しく接してくださることがうれしいことなのでしょうけど、一步距離をおいて接してくださる陛下の方が、私には思いやりがあるように思えます。」

実際、コーディンは軍務官と関係を持つた秘書官を何人も知っている。知名度や容姿、あの態度で迫られれば嫌といえる女性のほうが少ないだろう。たとえ同意の上、大人の付き合いだと割り切っても結局後悔するのは女性のほうなのだ。軍務官はするいと思う。

「不器用なだけだよ。」

シンカは笑った。シンカにはミンクと言ひ、ただ一人と決めた女性がいる。

「それでも陛下は、私にこうして接してくださっている。とても、嬉しく思つております。」

秘書官の視線をさせて、シンカは萌えはじめている木々を見上げる。

それは、彼女が単純に喜ぶような理由ではなかった。

先日、軍務官であるレクトがシンカに会いに来た。軍務官とは太陽帝国軍と情報部を掌握する大臣であり、また、彼はシンカの遺伝子上の父親もある。

レクトの報告では、コーディンが密かにシンカの身辺の情報を集め、大臣の一人に取り入り、行過ぎた行動をとっているというのだ。昨秋の仏心街での事件の時に、彼女が誰も知るはずのないシンカの居場所を知りえたのもそのためだつたらしい。

情報部にもその動きは察知されていて、コーディングがもし太陽帝国に、皇帝に悪影響の出る行動を起こした場合には即逮捕できるだけの証拠をそろえているというのだ。

レクトは言った。

「これが、ただ単にシンカ。お前のことを思つあまりの行動だとしたら、常軌を逸しているとしか思えん。」と。

具体的には教えてもらえたが、既にシンカはもちろんレクトの出生から、ミンクの生い立ちまで調べつくされているという。それはまだ何の影響もないが、彼女がもし情報を他に漏らしたり利用しようとすれば、多大な影響が及ぶだろうという。

時折、彼女の完璧な美しい笑みに圧倒される何かを感じたのはそのためだろうか。どちらにしろ最近の彼女の行動は秘書官という立場で正当化されているものの、そうでなければストーキングと言つていいほどだった。

シンカがなるべく個人的な話をしないでいたのもそのためだ。

しかし、コーディングは関係なく立ち入つてくる。いつだつたか、シンカはコーディングが自らの感情のために皇帝のスケジュールを操作していると感じたことがあった。

「ミンク様のご学友を、ご招待されることはかまいませんが、陛下。ただでさえお忙しいのですから、あまりご無理をなさらないよう。」
「大丈夫だよ。俺は時間が合えば、彼らと話すけど、そうでなければ挨拶程度だからさ。」
「はい。」

そいつって笑っていたけれど、ミンクが友達を呼ぶといった日には、しっかりと重要な会合を設定されていた。補佐官たちの都合の結果だというが、シンカがミンクをなだめるのにどれだけ大変だったか。

プライベートな時間と皇帝としての時間の区別を自分でしたいと考えているのだが、しばしばそれは有能すぎる秘書官に阻まれてしまう。

特に最近、その傾向は強い。シンカが息苦しく感じるほどに。シンカはそのことをコーディンと話さなくてはならないと考えていた。だから、散歩に誘ったのだ。

「陛下、陛下はいつか、ミンクさまと一緒に結婚なさるのでしょうか？」不意の質問にシンカは傍らの犬、ニキを蹴りそうになる。コーディンとシンカは同じくらいの身長で、間にニキがいる。一人をかわるがわる見上げながら、きちんと歩調を合わせている。賢い犬だ。

「え、それはまだ、考えたことなかつたけど……」

「そうですか。そうですね、まだ、お若いですものね。」

納得したように頷く秘書官を見つめる。

「だけど、コーディン。俺は、一人の女性に恋ぐすタイプだからね。多分、一生ミンクだけだ。」

「……ですが陛下、陛下は軍務官の血を引いておられます。一人だけでは、満足なさらないはずです。」

不意にシンカは立ち止まつた。

レクトが遺伝子上のシンカの父親であることは伏せられている。知つているものも大臣以上の数人のみだ。秘書官が知つていていいことではなかつた。

シンカの視線に気付き、慌てて言葉を付け足さうとする。

「私は、陛下はもつと……。」

「コーディン。」

シンカの表情は厳しい。時折会議場などで見せるシンカの強い表情は、見るものを黙らせる迫力がある。それこそ軍務官ゆずりのだが、本人は気付いていない。

「立ち入りすぎだ。」

「……失礼しました。」

氣まずい空氣に一キガクンと鳴いた。再び黙つてシンカは歩き出した。一步遅れて、コージンもついていく。その瞳は、じつと皇帝陛下の後姿を見詰めている。

「コージン、俺のために氣も時間も使いすぎなんだ。もつと、自分のために時間を使うべきだよ。週末もほとんど出勤してるだろ？
俺が遊んでるのに、あなたが仕事ばかりしていると、なんだか落ち着かないよ。」

「陛下がお気になさることではありません。」

「いや、だから、もつと、普通に友達と遊んだり、恋人と会つたり、家族で過ごしたりしないと。」

「普通でなくともかまいませんもの。私も、陛下と同じで心に決めた一人の方を想い続けます。」

視線を足元に落とし、微笑む彼女は自虐とも取れる小さなため息をついている。シンカは前を向いたまま立ち止まり、ぎゅっと手をつぶつた。

「私の愛しい方は、決して私と結婚できませんの。」

若い皇帝は振り向いて亜麻色の女性を見つめる。その想いが自分に向けられていることを、青年は気付いている。気付いてはいるが。

「コージン。」

「陛下、そんな哀しそうに見ないでください。」

美しく微笑む。

「だけど」

シンカは足元の犬に視線を逃がす。

「陛下。太陽帝国を治める皇帝ともあろう方が、一人の女の想いなど、気になさつていてはいけませんよ。陛下、陛下に恋する女性がこの銀河にどれだけいることか。それこそ、星の数ほど、ですよ。」

それは告白に、聞こえる。

シンカは拳を握り締める。

シンカの気持ちが分かるのか、犬がそつとなめる。

「コーディン。俺は、あなたには幸せでいて欲しい。あなたが、苦しんでいるのを間近で見るのはつらいんだ。」

その蒼い瞳は、まっすぐにコーディンを見つめた。

寒さが和らいた朝の風はかすかに前髪を揺らす。

「俺が即位したときには秘書官はいなかつた。アシラに頼まれて秘書官を置いたけど、変わらないと思うんだ。以前のように俺のスケジュールは自分で管理するよ。秘書官を五人も抱える必要はないんだ。皇帝付の秘書官全員を解任するつもりだ。コーディン、あなたも。

コーディンの細い腕が、シンカの両腕にかかる。その瞳の驚愕と涙があふれてこぼれる。

「ごめん。」

「いやです、陛下。私を、どうか、おそばに置いてください…どうか！」

抱きしめられ、シンカはようける。ふわりと甘い香りがする。ニキがシンカの後ろに回つて見上げている。

「コーディン、あなたが、皇帝付きの秘書官でなくとも、大切な友人であることには変わりはないんだ。」

「いやです。陛下。私は、おそばに、いつも、……。」

シンカはそつと、泣いているコーディンの肩に手を回した。柔らかな亞麻色の髪が触れる。

「正式には、後日、辞令がおりると思つから。」

ずっと、考えていたことだつた。見返りを求める女性に、どういったら離れてもらえるのか。嫌いだといつても、会いたくないといつても、彼女がこの職にある限り、状況は変わらないのだ。

「いやです。」

強く、はつきりとそう口にすると、コーディンは顔を上げた。その思いつめた表情は、シンカをそくりとさせた。

「陛下、出勤の時間ですので。」

硬い表情で、そう言ってコーディンは、政府ビルの方向に早足で歩き

始めた。

「ユージン！」

シンカの声にも、振り返らなかつた。

くうん。

ニキのなぐさめるような鳴き声に、シンカは泣きたい気分になつた。
しゃがんで、犬を抱きしめる。

一日の仕事の始まりに、シンカは主任秘書官と文政官アシラとの報告を受ける。

その後ヨージンの示したスケジュールで行動するのだ。

朝の姿とは全然違う服装で、ヨージンはいつもと変わらないきりつとした笑顔だ。皇帝陛下に朝の挨拶をする。

早朝振り絞った勇気は意味を成していない。胸を張つて誇り高い秘書官を見せ付ける彼女の維持のようなものを感じ取る。辞めさせたりしない、そんな態度にシンカは淋しくなる。

伝えたいことの一つも、彼女に伝えられない。

一通りの報告を済ませてから、文政官アシラが皇帝に話し掛けた。「陛下、明後日からのセトアイラスの研修旅行の件ですが。」

「なんだ？」

「同行する予定の惑星環境省の補佐官が、惑星探査機関との重要な会議があると言つことで、行けなくなりまして。代わりにヨージン女史がお供いいたします。」

「あ、ああ。」

シンカは、ヨージンを見つめた。にこやかに、完璧な笑みを浮かべている。アシラと、ヨージンは仲がよいことは聞いていたが。まさか、人事にまで影響力はないだろうと思いつつも、穩かならぬ想いがよぎる。

皇帝には最終的な人事権はない。参考程度の意見を述べるだけだ。アシラのような大臣十二人と、帝国に所属する惑星政府元首とに、それぞれの部下の人事を任せてある。秘書官の人事は文政官アシラが握っている。

それは、シンカが即位するときに自分で決めた。人事権をシンカが握ってしまえば、保身のためにシンカを取り入ろうとしたり出世に

利用したりするものが出る。そんなことに時間と能力を費やして欲しいのだ。だから、大臣たちは一定の身分保障がなされている。彼らには、本来の彼らがすべきことをしてもらう。代わりに、シンカの政治に意見する権限は大きい。極論で言えば、政治を企画し実行するのは、誰でもいい。結果的に何ができるかなのだ。シンカは、そこに重点を置いている。

結果が伴わないのであれば、大臣を、いや、皇帝自身を代えてでも行うべきことはある。

「陛下、」旅行中、どうぞおそばに置いてくださいね。」

そう言ひつゝ、コージンの笑顔は、シンカの背筋を寒くさせた。

皇帝が研修旅行などは通常ありえない。故に猛反対する親衛隊たちを「正式な公務ではないから」という理由で追い払い、シンカはごく少数の側近とともに惑星セトアイラスへと向かうのだ。先秋取得した、帝国医師免許を有効なものにするために必要な研修がある。それを惑星セトアイラスの大学病院で受けなければならないのだ。通常の学生は、免許取得と同時に研修に入り、卒業までの二年間を研修医として勤務しつゝ勉強を続けるのだ。シンカにはそれが不可能なため、社会人など、一般向けの短気研修に参加する予定だ。それでも一ヶ月ある。実際に病院に勤務しながら研修、定期的な試験と単位取得が科せられている。皇帝としての業務を行いつつの研修はかなり厳しいものになりそうだった。

その間、密かにセトアイラス政府が提供してくれた公邸で暮らすことになる。そこで執務もする。秘書官のほかには、ミストレイアから派遣される警備員が数人。彼らはミストレイアのセトアイラス基地からの派遣となる。

つまり、一ヶ月、コージンと二人きりで暮らす状態になる。

初めての研修に心躍らせていたシンカは小さくため息をついた。友人のシキが家族でセトアイラスに滞在する予定があると言っていた。半分くらいそちらに行こうか……。

普段は怖いものナシの性格（時に無鉄砲）だといわれるシンカだが、どうにもコーディンの様な年上の女性、しかもこちらに特別な感情があることが分かっている女性と同行するのはどうにも気が重くなる。

翌日の朝はこの時期にしては珍しく、朝もやがブループールを覆つた。

息が少し白くなるほど冷えている。

シンカはベージュの羊皮のコートと黒いアルパカのマフラー、パンツは黒い牛皮で暖かい。実はあまり寒いのは得意でないので、つい、着すぎてしまう。歩いているうちに頬が火照つてくる。少し後悔する。

「おはようございます。」

並木のわき道から姿を現した女性に、シンカは立ち止まりニキはわうと小さく鳴いた。コーディン・ロートシルトだ。今日は来ないと思っていたのに。

「……おはよう。」

それでもこじやかな彼女に、シンカも笑顔で挨拶を返す。

今日は長い亞麻色の髪を一つに結つて、その髪が肩にゆれている。

「今日は、来ないかと思ったよ。」

シンカはそう言つてみた。

「いいえ。せつかく陛下と一人で過ごせる時間ですのです。」

隣といつほど近くもなく、一步分斜め後ろを歩くコーディンの視線を感じながらシンカは視線を前方に向かた。いつものこじやかな笑顔だ。

「ゴージン、今回の研修、一ヶ月も時間をとつてくれて助かったよ。」

「いいえ、陛下がせっかく取得なさった医師免許ですもの、必要な時間を」と用意するのは当然です。陛下のお役に立てる」と嬉しく思っています。」

「ミンクが、期間中に一週間ほど来たいと云っているんだ。忙しいと思うけど、せめて三日くらい、ミンクに会わせられる時間が取れるかな。」

秘書官は美しく弧を描く眉をひそませ、小さくため息をついた。

「考えてはみますが。」

予想通りの反応。シンカは立ち止まって振り向く。にっこりと、笑顔でけん制。

「あのや、今回のスケジュールのなかで、俺のプライベートな時間は、どのくらいあるのかな？ その時間を充てるよ。」

主任秘書官は常に手元に端末を持っている。いつでもスケジュールの確認ができる。ゴージンの白い手のひらに小さなホログラムが開くのが見える。

「はい。今回のセトアイラスでの一ヶ月間では、百時間は用意しております。」

「百時間、か。セトアイラスで、最も美しいと呼ばれる山岳地帯の景色を見せてやりたいんだ。俺は、以前視察で見たことがあるから。」

「その山々は白く輝き、セトアイラスの薄いグリーンの空に映える。二キを連れて、広い草原で寝転んだりしたい。」

「ラングランド山地ですね。申し訳ありませんが、そこへ行くのには一日以上かかります。陛下、それだけのまとまったお時間はありません。」

シンカはため息をついた。

「セトアイラスは一日が一十一時間だ。そのうち七時間が必要最低

限の生活時間だよな。研修と公務以外で、俺に残されている時間つてどれだけあるんだ？」

「まる一日の休暇が三回、半日の休暇が六回、三時間の休暇が何回かです。」

それを、ミンクとの時間に費やせば、シンカが休む時間は寝る時間以外にほとんどない。

「……わかったよ、ミンクにはあきらめのつゝて。俺自身、こなせるかどうか。」

「申し訳ございません。」

シンカには、そのスケジュールにどの程度コーポラスの意思が働いているのか分からぬ。ミンクやシキ、友人の誘いを断つておいて、突然、当田空きができたりする。それは、彼女のせいではないのかもしれない。

ただこんな風に疑うようになってしまったことに、シンカは限界を感じる。コーポラスを信頼したいと思う。その能力はすばらしいと思う。だが。

解任はシンカにとつてもつらい判断だ。

だから、昨日勇気を出して伝えたのに。シンカに人事権がないから余裕なのだろうか。既にこのことはアシラ文政官にも話してあるのに。コーポラスは何事もなかつたかのように、いつもどおり。

「コーポラス。君の今後のことだけ。」

「はい。」

にこやかだ。

「希望があれば、その部署に推薦することもできるんだ。」

「今以上に、希望に沿つた部署はございません。」

余裕の笑みなのか。確かに直接の人事権はない。

「昨日、散歩のときに。俺、言つただろ？ あなたを解任したいって

……」

「ええ。ダメですよ、そんなことおっしゃつては。私以上に陛下の

ことを理解している秘書官はおりませんもの。それは、文政官も「承知です。」

そう言って、ヨージンはシンカの犬の鎖をもつ手を握った。

「…」

「こんな幸せを私からお取り上げになるのですか。」

あくまでもにこやかな、笑みにシンカはぞくつとした。

「陛下、ミンク様のお顔、メディアに知られてしまつてもいいのですか？」

「！ヨージン、それは。」

脅しているのか！

「ミンク様かわいらしいですから、きっと、すごく人気者になりますよ。」

シンカは、手を握ったままの女性をにらみつけた。

「陛下には、私が必要です。どうか、お忘れなきよう。」

シンカは、頬に触れようとするヨージンの手を払つた。

「帰るよ。」

「私も」一緒にします。」

無言のまま、秘書官に手を握られようとそれも無視して、歩く。中央政府ビルのエントランスの前で、ヨージンの手が離れるまで、どれほど、長く感じられたことか。

シンカは、執務室のソファーに座ると、電話を取り出した。携帯用のそれは、シンカ個人のために、レクトが用意してくれたものだ。そうでもしなければ、シンカの通話はすべて、ヨージンに知れてしまふからだ。

太陽帝国、軍務官を呼び出す。
が、忙しいのか、応答はない。
俺、失敗した。

シンカは、ヨージンに、解任の旨を伝えたことを、後悔していた。明らかに彼女は逆上しているし、まさか、脅してまでそばにいよう

とするなど、予想できなかつた。そんなことにして、俺に嫌われても
かまわないのだろうか。それとも、そこまで考えが及ばないのだろうか。どちらにしろ、今日の夕刻、出発までに、レクトに相談して
おきたかった。

このまま、あのユーリンと二人、セトアイラスに行くのではどうな
つてしまつことか。

「女を怒らせると怖いからな、気をつけろよお前も。」友人のシキ
がからかつていつた言葉を思い出す。

「常軌を逸している。」レクトの言つとおり、確かにそうなのかも
しれない。

2・パート・ロティ

2・パート・ロティ

その頃、太陽帝国軍務官はブルブルのホテルにいた。

いつも利用している定宿だ。そこそこ、きちんとしたところがいいのだと彼は思っている。過剰でもないサービス、老舗のそこは調度品が気持ちのよいアンティークだ。たまに一人でも利用する。

決まって用意される部屋は、五十一階の海に面した窓のある部屋だ。一日中美しい眺めが堪能できる。ここは部下には知らせていない。彼のプライベートな空間なのだ。

今日は雑誌社の若き女性社長と過¹していた。

少し遅い朝食を取り、午後からの出張にあわせてゆっくり出勤する予定だ。

「レクトさん。」

シャワーを浴びている彼に、女が声をかける。

「軍務官、お電話ですわよ。」

「後にしろ。」

「はいはい。」

そう言って女性は手に持ったレクトの電話をちらりと眺める。

番号表示のみだ。誰だろう。

この電話は、彼の親しい人間しかかけてこないのだと聞いた。親しいのに、名前を登録していない。

先日、部下のジンロからかかってきたときには、キッチンと名前も、顔も表示された。

女性はそっと、その番号を指のリングに仕込んだカメラで写した。

職業柄だろつ、得らられる情報はすべて記憶しておぐ。

ぬれた髪を拭きながら上半身裸のまま、レクトはまず煙草に火をついた。

リビングルームでソファーに座り、コーヒーを飲んでいた女性の横に座る。肩の盛り上がった筋肉が美しいと彼女は思う。栗色の髪の男は女性の肩に腕をまわし、くわえ煙草のまま電話を確認した。

その表情が、少しだけ変わったことに女性は気付いた。

「私も浴びてこよづかな。」そつと席を外す。
気を利かせたというより、相手どんな会話をするのか聞きたいのだ。だから、彼が気兼ねなく電話をかけなおせるように図った。女性は鋭い観察眼で「」まで上ってきたといつてもいい。

女性の動きにこぢらも密かに気を配りながら、レクトは電話をかけなおした。相手は太陽帝国皇帝だ。

「どうした。」

まだ、吸い始めたばかりの煙草をもみ消す。

「ばかだな。アシラには、俺から探しを入れる。お前はとにかく、予定通りセトアイラスに行くんだな。なにを心配している。俺がお前の立場なら喜んで相手してるぞ。」

女性が髪を拭きながら、そつと鏡越しにその様子を見ていた。レクトは驚くほど、やさしげな表情だ。彼のそんな顔はベッドの中でも見たことがない。

相手はどんな女なのだろうか。
少し、妬ける。

「ああ、じゃあな。」

電話を切った軍務官にすねた視線を向けながら、一十代にして雑誌社を立ち上げるほどの力量の持ち主は、自然と情報を整理する。

太陽帝国軍務官レクトにあれほどやせしげな表情をさせる存在で、近いうちに惑星セトアイラスに行く予定。文政官アシラとも面識のある人物。

「レザイア、君に頼みがあるんだ。」

レザイアはそつと伺つていたつもりだったところに声をかけられて、すこし、慌てる。

「皇帝陛下のが、近いうちにセトアイラスにいくんだ。」

電話をちらと掲げながら話すその笑みはやけにやさしい。

「あら、それは初耳だわ。それは、何か、うちにもいい情報になるのかしら？」

「セトアイラスにシンカが行くこと自体、今は伏せられているんだ。それを君に言った時点で、少しばかり察して欲しいんだが。」

この人は皇帝陛下を呼び捨てにする。女性はそれを、以前から不思議に思つていた。それだけ親しいということなのかしら。

「電話は、皇帝陛下からの？」

「それが、君には重要なことなのかな？」

「……そうね、いいスクープより、女としては貴方があんなやさしい顔する相手が誰なのか気になるわ。」

「……ふん。やさしくなんかないさ。面白いだけだ。君にこの情報をリークするのは、君の記事と眼を信じているからだ。下手な週刊誌なんかにかきつけられるより、ましだと思つていい。」

「あら、お褒めの言葉かしら。」

「一つだけ、条件がある。」

「なあに？」レザイアは指にはめたリングをそつとなでる。先ほど

撮影したこれは、皇帝陛下への直通の番号なのだ。どんなスクープより、面白い情報だ。なぜ、レクトがあんな表情をするのか、いつか、つきとめてみたい。

「一つ調べて記事にしてほしことがある。」

「？陛下のことではなくて？」

「ああ、文政官のことだ。」

レザイアは、ニヤリと笑う。美しい顔に似合はず、冷やうとする表情だ。そこが、レクトは気に入っているのだ。

「彼、いろいろわざがあるわよね。」

「……さすがだな。」

「ふふ、どの程度暴露するかは、あなたのお望みに合はせるわ。」

レザイアはウインクする。レクトが抱きしめる。唇を合はせるその隙に、女性の指先からリングを抜き取った。

「！それ。」

「いたずらは許さん。」

ぞつとする表情で睨まれると、レザイアは反論をあきらめた。

元情報部将校、凄腕の彼に逆らっても無駄だ。

適度なところで好奇心を抑えておかないと、そばにはいられない。どんなスクープより、この男のそばにいられる」とのほうが重要なのだ。例え、皇帝陛下にするような、やせしい顔で見つめられなんても。

惑星セトアイラスは、グラツール星系の第六惑星だ。

気温の低いこの惑星は、惑星の半分が氷で覆われている。地軸の傾きのために惑星の居住可能地域の季節は一年を通じてほとんど変化がなく、気温摂氏マイナス十度から一十五度までの幅しかない。この気象条件は地球人に好まれ、このグラツール星系でもっとも多くの移民が住んでいる。そのほとんどが研究都市セトアイラスに住み、政府機関の研究室や大学、民間の研究所などに勤めている。

太陽帝国内でもっとも優れた学者を生み出すと言われるその都市は、白い建物に統一されている。植物と呼ばれるものは排除され、区画ごとに空気調整装置を備え、都市全体がまるで病院の無菌室のようだ。たくさんの環境の違つ惑星からの動植物を扱う研究機関はそれぞれが、隔離されその対応する惑星の条件を備えるために、このようになつていつた。

シンカが学ぶコート・ロティ大学はセトアイラス政府が運営する、もつとも有名な大学だ。その大学病院には宇宙中の患者が運ばれてくる。

宇宙一たくさんの症例を集めることができることは、当然のように最も進んだ医学を実践している。

医学部の学生は、五千人。大学病院の医師として働くことができるのは百一十人。

彼らは、大学の助教授以上の地位を有し、医療関係者の憧れの的である。医師の下で医師に準じて直接治療に当たるのは準医師（学内では講師である）、研究医、準研究医、研究員、研究生という順にランクがある。大学を卒業する前の学生は医師免許を取得すると一

年以上研究生として医療に従事する。たいていは研究生を修了し卒業、それぞれの惑星に赴任。ということとなる。研究員から始めて大学病院に残ることができるものはわずかだ。

シンカは短期の研究生として、わずかな枠の募集に入れてもらつた。皇帝としての仕事の都合もあつたため、他の選抜試験を経て参加する人々とは違う、大学の推薦枠で入つたのだ。だからこそ実力が問われる。もちろん、皇帝としての身分を明かすことはない。この期間中は、髪を栗色に染め、瞳にも常にカラーレンズを入れる。これは大学側からの要望だ。

セトアイラス政府から借りた公邸の広すぎるリビングで、シンカはソファーに横になった。

すっかり支度を整え、時間まで少し間がある。大きく息を吸う。天井を見上げる。

「陛下、緊張なさっているのですか。」

微笑む秘書官がシンカの顔を覗き込む。

「いや、なんだかわくわくするよ。」

寝転んだまま笑う。そのいつもと違う瞳の色に、コーディンは何度か瞬きし、見つめ返してくる。

「コーディン？」

覆いかぶさるように頬に手を当てられてシンカは眉をひそめる。起き上がりうとした。

肩を押さえられそうになるのを手で制して、シンカは視線をそらす。

「触るな。」

小さくつぶやくと、立ち上がった。

早く大学病院へ行きたい。これから病院にいる間だけは、彼女のそばを離れられる。

ユージンの態度は相変わらずだ。あの日以来、脅すようなことは言わないが行動はエスカレートするばかりだ。

地球を旅立つてから今日まで、気を抜けば手を握られたり、頬に触れたり。眠っている間にキスされたときには思わず「わあーー」と声を上げてしまった。それでもくすくすと余裕の笑みで返されたのだ。

腹立たしいが、気にしては眠れない。三四四五にはあきらめることにした。

どうこうつもりでそんなことができるのかと、一度尋ねた。「とも、愛しいのです」などと答えられ、もう理由を尋ねたり理解しようとすると氣もうせた。

考えれば考えるほどつらくなるばかりだつた。レクトは、俺なら喜んで相手するなどとふざけていたが、シンカにとつてはちつとも嬉しくなんなかつた。

来訪者の存在を告げるベルが鳴つた。迎えの車だらう。

ほつとする。

病院の管理棟にある会議室で総合オリエンテーションが行われた。全部で五十人程の年齢も様々な男女が、みな一様に白衣姿で説明を待つ。女性同士はすぐ仲良くなるらしく所々で小さな話し声がする。

「お前、試験のときにはなかつたよな。」

シンカの隣に座つた、三十代くらいの男性がボソッと言つた。

「はい、僕、推薦をいただきました。」

「ふうん。」

同時に周りからの視線を受ける。

「やっぱりそななんだ、こんな田立つのに試験で記憶になかつたか

ら

目立つだろうか？

立ち上がりて話し込んでいた女性たちの一人が笑いかける。

「推薦つて、コート・ロティ大学からの？」

「はい。」

「すごい！若いわね。いくつ？」

興味津々の様子で女性たちはシンカの周りに集まりだす。

試験のときに皆、知り合いになつたのだろう、人種も年齢もさまざままだ。

様々とはいえ、確かにシンカと同年代に見える人はいない。それで目立つのだ。

「十九歳です。」

「すごい！今まで大学の推薦枠つて、有名な大学で実績を見込まれた卒業生の編入とか、有名企業の研究員とか、そんなのばかりだつたのに。十代だなんて初めて聞くわ。」

「大学はどこ？」

「いえ、独学で。医師免許の試験だけは、ここで受けました。」

ざわざわとした話し声が波紋のように広がる。独学は、まずかつたか。

隣の男性はつまらなそうにそっぽを向いた。

「地球上でしょ？きっと、お金持ちなのよ。帝国政府の大臣の子供とかじゃないの？」

右横の年上の女性が少し大きめの声で言った。いやみな感じだ。シンカは、どう答えようか迷う。

「両親はいません。」

「じゃあ、大臣の孫とか。」

「違いますよ。それに僕は未開惑星のリユード出身で、地球の研究所で学んだんです。」微笑む。惑星リユードの名はある分野の研究者にはとても興味深いものだが、それ以外の人々にとつては知らない遠い星で済まされる。正式な惑星政府として惑星同盟で認められ

ていない未開惑星は、田舎の発展途上の星とだけ認識されるのだ。

「未開惑星。じゃあ、もしかして、カストロワ大公の援助を受けているとか？」

「……そんな感じです。」

適當などひで話を濁した。

このセトアイラスの政府代表は、レイス・カストロワ。大公と呼ばれ、その豊富な資金で有望な若者を支援していると言う。レクトから聞いていた。その支援者は宇宙中で活躍していて、レイス・カストロワの政治的力にもなっていると言つた。

「すごいわね。カストロワ大公の支援を受けられるって言つことは、認められているってことだものね。それは、推薦も受けられるわよ。」

「シンカの正面に立つた二十代後半の女性は、にっこり笑つて言つた。
「私、ミオ・コウサカ。あなたは？」

「ファルム・シ・デアストル。ルーフて呼ばれています。よろしく。」

「金髪の巻き毛を短くした女性が自己紹介すると、先ほどの黒髪の女性もその横の女性も、自己紹介してくれた。

「ライバルだけど、一緒にがんばりましょうね。」

ミオが丸い瞳をくりくりさせて言つた。小柄な体格が、少しミンクに似ている。シンカは微笑んだ。

「はい。」

「私、第一診療科が外科よ。第一診療科が、救急救命室なの。ルーは？」

左横の男性の冷ややかな視線を浴びながら、シンカは答えた。

「僕、第一診療科は免疫治療科で、第一は同じ救急救命室です。よろしく。」

「あら、うれしいな。免疫治療科は彼女、ケイナ・ドマネスと同じ

ね。彼女、私と同じ大学なの。」

右隣の少しきつい態度の女性を指す。シンカが小さく首を傾げて微笑んでみたがケイナと呼ばれた女性は目をそらす。なんだか、歓迎されていない。

そこで担当者が入室してきた。
慌ててミオは自分の席に戻った。小さいウインクを残して。

大まかな日程の説明を受け、研究生たちはそれぞれの第一診療科へと移動していった。シンカは同じ免疫治療科に勤務する予定のケイナ・ドマネスとエレベーターに乗った。ケイナはふわふわと広がるくせつ毛を後ろに一つに縛っている。地味な感じだ。視線が合つて、シンカがよろしくと微笑むと、ケイナ・ドマネスがそばかすの残る顔をしかめてシンカにボソリと言つた。

「私だつて両親を亡くして、一人でがんばつてここまできたの。あなたのように恵まれていないし、絶対に負けないわ。」

「じゃあ、勝負だね。」

そう言つて笑い返すシンカにドマネスは少し面食らつたようだつた。

二十八歳のドマネスは働きながら大学に通い、昨年医師免許を取得了。このセトアイラスの惑星元首であるカストロワ大公の支援を受けられるような、こんな若者に負けるわけにはいかなかつた。しかも、この若者は惑星リュードの出身といった。

惑星リュードは免疫治療科にとっては優位な生まれだ。あの、ユニラについて、知識があるということだ。一時期この分野で話題となり、今も帝国研究所では研究中の成分だ。未開惑星の、しかも絶滅に瀕している植物だというから、めつたに手に入らない。研究できる機関は地球とこのセトアイラスにそれぞれ一箇所しかない。貴重な知識だ。

それは他の惑星出身者では得られない知識。ドマネスはあせつていた。

各診療科で研究生は一人から三人が研修し、その中から一名だけが研究員になるための試験を受ける資格を得られる。彼女にとつて、シンカはライバルだ。この試験を受けられなくては研究員にはならない。

もともと、シンカは、職業として医者となるわけには行かないため、そのあたりのライバル意識は薄い。

そこがまた、ドマネスにとつては余裕に思えて、腹立たしいのだ。つんと、背を向けるドマネスに、シンカは、小さくため息をつく。

シンカは免疫治療科でコントラの研究に役立たせるための基礎知識を得たいと考えている。実際に行われている治療の様子を知りたい。そこにどうコントラを生かせるのか。コントラの成分の研究はブルブルの帝国研究所でも続けられている。

その定期的な報告を受け、シンカもある程度はコントラが役立ちそうだとは思っている。しかし、その現実問題としての成分そのものの量産が可能なのかどうか。もしコントラの効果が重要であり量産が必要であると判断されれば、シンカも皇帝として動かないわけには行かない。

自分の体内の成分についても研究材料として提供する必要があるだろう。

自分自身を研究材料とすることには抵抗があった。帝国政府の研究者たちも本来なら、シンカの体内の成分を研究したいのだろうが。

それについては今のところ、固く禁じられている。シンカの髪一筋

でさえ、採取することを禁じている。シンカのDNAの抽出を禁止されているのだ。

片側が前面強化ガラスのエレベーターから、白いセトアイラスの町を見下ろす。

その栗色の髪はやわらかに額に落ち、白い肌に映える。黒い瞳は大きく魅力的だ。十九歳にしては少し幼い容貌の青年は、整った顔立ちで、笑うと人懐こく愛らしい。女性が群がるのも分かる。そう言った意味でもドマネスは嫉妬を覚えた。そばかすだらけの顔、くせの強い茶色の髪、小さなアーモンドのような瞳。

異性にもてた記憶はない。友達もあまりいない。

「私は絶対に医師になりたいの。」の「ポート・ロティの、ね。」

ドマネスの言葉にシンカは微笑んだ。

「僕は医師になるより、研究したいことがあるんです。あなたの邪魔をするわけじゃありません。」

「あなた、そんな理由で研究生になつたの。」

苛立つ彼女をなだめようと思つていつた言葉はかえつて逆効果だった。ケイトは憤慨した様子だ。

「皆が皆、医師になるために医学を学ぶわけじゃないでしょ？僕は助けたい人がいるから、学ぶんだ。」

やさしい表情できつちり否定するシンカに、ドマネスはむつとした。自分より十歳も下の青年にたしなめられたようで我慢できない。

「君に、そんな風に言わることないわ。」

「すみません。」

それでもシンカは笑みを崩さない。

ドマネスはブイと横を向いた。

そう、シンカはコンイラの中毒になつてこむシンクを治したい。治

らなくても、せめて、もう少し長く生きられるようだ。

ミンクは惑星リュードでシンカと一緒に育つた。その街、デイラの住人は皆、コニイラの精製のために中毒になっていた。寿命も長くて四十歳までと短い。シンカは母親にミンクのような人々を救うための研究で作られた。遺伝子にコニイラといつ植物のDNAを組み込まれて。

だから、彼は少し他の人とは違っている。何の病氣にもかからない。怪我もレーザーで撃ち抜かれた傷ですら、数分でふさがる。

その体内の特殊な成分を、いつかコニイラの中毒になつたものに使用したいと、母はシンカを生み出した。まさか、その本人が皇帝として太陽帝国を治める存在になろうとは想像もできなかつただろう。その母親はデイラとともに滅びた。

今シンカのそばにいるミンクだけが、同じ記憶を所有している。彼らが生きた十七年間の惑星リュードの記憶。シンカにとつてミンクの存在そのものが故郷でもあるのだ。

免疫治療科で二人は担当の研究医を紹介された。彼は三十代後半のセダ星人で、名をローデスと言つた。

大柄で少し緑色の勝つた肌の色をしている。金色の瞳は、セダ星人特有のもので、不思議な雰囲気をかもし出している。平均寿命二百歳という、宇宙で最も長生きな人種であるセダ星人は、運動能力は低いとされるがそのどちらかと言うと小さ目の頭部に収まる頭脳はどの惑星人より優れているとされる。セトアイラスのカストロワ大公もセダ星人だ。

二人が自己紹介すると、せっかちな感じのローデスは白衣を翻し、早足で歩きながらフロアの説明をし始める。一人は慌てて、小走りについていく。

「ここには免疫症候群を患つた様々な惑星の患者たちが入院している。入院患者のカルテには自己免疫疾患、アレルギー疾患、原発性免疫不全症、続発性及びその他が色の違う印で区別されている。ドマネス、君は大学ではなにを研究していた?」

病棟の廊下を進みながらローデスは二人を振り返る。

「はい。私はマクロファージ・樹状細胞のC型レクチンのリガンド分子について、研究しました。」

「ふん。デアストルは?」

「僕は大学ではないですが、ウンイラ因子が続発性免疫不全症に及ぼす影響について、興味を持つています。」

「研究したとはいえない。」

「大学を出ていないのか?」

「怪訝そうな顔のローデス。」

「帝国の研究所で教育を受けたものですから。」

そこは本当だが。

「ふん。まあいい。お前は、辺境惑星から来たと聞いたからな。大學などなかつたんだろ？。」

あきらかに馬鹿にしたような表情の医師にシンカは微笑んだ。

「ええ。」

惑星リコードには大学など存在しない。発電すらできないのだ。文明の違いとはそう言うものだ。だからといってどちらが優れているともいえない。職業柄たくさんある惑星の状況を知るシンカには、セトアイラスや地球の進んだ文明が必ずしも人々を幸せにしているとは思えなかつた。

歩きながら、ふと病室からこちらをのぞく少女と目が合つた。髪を二つに縛つて大きな茶色い瞳が可愛らしい。六歳くらいか。シンカが手を小さく振ると、微笑んでかえしてくる。入院患者なのか白いパジャマ姿だ。

「デアストル、聞いているのか？」

「あ、ハイ。」

慌てて一人に追いつこうと振り向いたとき、隣の部屋から出てきた誰かに突き当たつた。

「おつと」

「うわ、すみません」

長身の白衣姿の男性にぶつかった。

慌ててローデスが駆け寄る。男性が落とした書類を拾つた。

「大丈夫ですか、ゲーリントン教授。」

「ああ、大丈夫だ。」

「君はやる気があるのかーデアストル。これだから、若い研究生は。

シンカはローデスに小言を言われながら、ゲーリントン教授を見上げた。シンカより少し高い身長、リドラ星人なのか褐色が勝つた肌、

彫りの深い高い鼻、黒く鋭い瞳、とがった印象の容貌。短くした白っぽい金髪。年齢は三十と聞いている。天才と呼ばれる一人だ。その漆黒の瞳と目が合つた。

「君が、ファルム・シ・デアストルか。
肩に手を置かれた。

「はい。」

シンカは黒く色を変えた瞳で見つめ返した。

「君には、期待しているよ。」

「……ありがとうございます。」

どうしてそんなことを言つんだろう、と不思議に思いながらもシンカは微笑み返す。自分の正体は学長しか知らないはず。後ろでローデスとドマネスが苦い表情をしている。

不意に小さなコール音がなる。ローデスの胸に付けた呼び出し専用の小さな装置からだ。医師及び研究医は皆、それをつけている。

「おい、二人ともついて来い。」

ローデスは教授に小さく一礼するとさらに早足で病棟の奥に向かう。シンカたちも真似た。

「末期の患者だ。十九歳男性。もっとも進行の早い地球型のウイルス性免疫不全症だ。こちらに来てからまだ一週間なんだが、もう遅すぎた。黄熱病を併発している。最初から少しハードだとは思うが覚悟しろよ。」

歩きながらそう話すと、ローデスは集中治療室に入る。傍らの3Dモニターには患者のカルテデータが表示されている。無菌状態にするためのそこには、透明なやわらかいカーテンがかけられている。その前に一人もローデスに習つて、殺菌のためのエアカーテンを通

り抜ける。使い捨ての薄い防護エプロンを白衣の上から身に付けた。青いどろりとした液体に腕を肘までつけ、抜き取るとそれが薄くぴつたりした手袋になる。

そうしている間に傍らの看護師が一人の頭に白いフードを被せた。眼だけが出ているその上から透明なぴつたりしたゴーグルをつけてくれる。

完全防備。免疫不全症候群を引き起こすウイルスには、空気感染するものはない。しかし、接触感染はある。しかもこの患者は黄熱病まで患っている。通常、こういった患者は隔離病棟に移されるのだが、日が浅いことと重症なことでこの普通病棟の無菌室に入っているのだろう。

患者は地球人だ。

白い肌に赤褐色の斑紋が出ている。力ない手は細く痩せ赤くただれている。

黄熱病の末期症状。免疫不全の状態で、ここまで生き残らえていただけでもすごいことだ。高熱、嘔吐、神経障害を引き起こすこの病気で、斑紋が出るまで生きていらされることのほうが少ない。通常は神経障害で呼吸困難を起こし死亡する。

シンカはこの病院の治療技術の高さを感じながら、こうなるまで生かしておこうとの残酷さも同時に思わずにいられない。

「これは、赤褐色斑からすると、黄熱病ですね。」

ドマネスがローデスに確認する。ローデスは大きくうなづく。

シンカはローデスが助細動装置を準備するための補助をはじめいた。

「テアストル、必要と思つか?」

ローデスは装置を起動させつつ、尋ねる。

「ここまで進行した症例を見ることは初めてです。黄熱病ウイルスが末期の状態で神経細胞にどの程度侵食しているのかは、研究者なら興味あるところでしょうね。僕が患者なら延命拒否を訴えるでしょうけど。」

「ふん。レベル3だ。」にやりと笑って、ローデスは延命治療の指示を続ける。

「はい。」

心停止の小さな警報が鳴り続く。装置の噴、ローデスの明確な指示の声。

昼の時間でわざわざ病棟に、それなりにまぎれていった。

3・くまと「ココアと女難の相

3・くまと「ココアと女難の相

遅い昼食を職員用のカフェテラスで取る。シンカが一人でサラダをつついでいると、隣にミオが座った。

「どうだつた？」

「最初から、一人見送りました。」

「うわ、ハーデね。」

「末期の黄熱病で、なかなかすごかつたです。」

「そう言いながら、牛肉をほお張る青年にミオは呆れ顔だ。
「よくそれで、そんなに食欲あるわね。」

「変かな。一応、育ち盛りなんです。」

少し顔を赤くして照れるシンカ。

（ああ、まだ、十代なんだ。）

ミオは思つ。

ルーの視線が、ミオのトレーの一辺に注がれていた。

「これ、ほしいの？」

ジュースで食べ物を喉に流そうとしているシンカが眼で頷いた。

「どうぞ。」

「やつたあ。好きなんだ。」

ミオのくれたレンエの実を嬉しそうに受け取る。その表情はまだまだ子供だ。

「でも僕、黄熱病ウイルスの因子が残った樹状細胞の培養が上手くいかなくて。ドクター・ローデスが教えてくれたんだけど、すごかつたよ。成長因子のGM-CSFがウイルスの因子と減退反応を示すみたいで特別な成長因子を作るんだ。やつぱりここはすごいね。それだけの研究成果を持っていて、でもちゃんと患者にやさしいんだから。」

「ふうん。」

ミオは青年を観察した。シンカは無邪気に楽しそうに話す。他の研究生とは対照的だった。表面上は仲がよく見えてもライバル。落し入れようとするえげつない人もいれば、あからさまに敵対心を表す人もいる。こんなふうに自然に接するシンカは若いからなのかとミオは想つ。

そこにまた一人、ルーに声をかける。

シンカの笑顔は人を安心させるなにかがあるように思えた。ミオはシンカと同じ時期に研修できることを嬉しく思つた。

昼食後から約九時間の間、シンカは免疫治療科の診察補助と病棟巡回などの実習をした。

病棟では先ほどの少女と話すこともできた。

少女はアイリスといつた。

「こんにちは。お兄さん、何ていうの。」

「僕はファルム。ルーって呼んでくれ。」

「うん。でも、ルーって私のね、くませんと同じ名前だよ。」

少女は笑つた。

「ちょっと、右の耳が取れかけてるの。アイリスと一緒にね。病気なの。」

「じゃあ今度、くまのルーにも会わせてね。一緒に入院すればいいよ。」

六歳の彼女は母親からのウィルス感染による免疫不全症で入院していた。

白い肌、痩せた体。カルテにはあまりいいことは書かれていない。入院も一ヶ月に及ぶ。

ベッドの傍らで膝をついて横たわる少女に微笑む。ローデスの巡回についてきているのだが、彼は隣の老人に話し掛けている。患者とのこうした接触は十分なされるよう配慮されている。シンカも「また、明日遊ぼう」と少女に約束し、病室を後にした。

予定では明日は田中、IJの免疫治療科の勤務になつてゐる。

「十一時。一日が二十一時間のIJの星ではちよつて翌日になる時間。シンカは公邸の執務室で報告書の決裁と会議用の資料に田を通していた。

ふとアイリスを思い出す。くまのルーを治すには、糸と針が必要かな。

まさか手術用を使用するわけにもいかない。

小さなコールの音とともにコーディンが飲み物のトレーを持って入室してきた。

「陛下、そろそろお休みになりますと。初日でお疲れでしょうし、明日は宿直ですし。」

「ああ。ありがとうございます。」

シンカは美しい秘書官を見上げて言った。

「コーディン。糸と針つてあるかな。」

「糸と針ですか？あの、縫い物に使う？」

トレーを脇に持ち、コーディンは不思議そうな表情だ。

「ああ、患者の小さな女の子のね、ぬいぐるみを直してあげたいんだ。」

コーディンは、少し照れながら話す皇帝に微笑みかけた。

「私のものでよろしければ、お使いください。」

「え？コーディン、そういうのできるの？」

「あら、心外ですわ。私、細かいことは得意ですよ。」

温かいココアを味わいながらシンカは秘書官を見つめる。こうしていると楽しいのにな。

「陛下？」

「ああ、ごめん。じゃあ、明日借りるよ。みん」

シンカは立ち上がる。

秘書官もシンカの後について執務室を出る。リビングの奥の寝室まで見送つて、ユージンはおやすみなさい、と言つた。

「おやすみ。」

「ココアのカップを持つたままのシンカが挨拶したときだつた。目の前に、女性の顔。

あわててよけよけとして、ココアをこぼしかける。

軽いキスは、一瞬で終わった。

小さくため息をつくシンカを、せつなそうに見つめるユージン。亞麻色の髪を下ろして、今はそんなに年上にも感じない。視線を逸らして、寝室に入る。

ドアが閉まるのを背後に聞き、シンカは再びため息をついた。

レクトが言つ、相手をするのは簡単なことだ。それで彼女がまともになるなら、だ。だが結果は田に見えている。さらにエスカレートし、手がつけられなくなるだらう。だからそういう事態だけは避けたい。ユージンが美しく、魅力的であることは十分承知だ。たいていの男なら二つ返事でシンカの立場と代わってくれるかもしねり。

飲む気の失せたカップを、テーブルに置いた。

3・くまとロコトと女難の相2

セトアイラスの朝は冷たい。

薄いグリーンの空に太陽の光があふれる時間になつても、シンカは肩にかけるアルパカのショールを手放せずにいる。そのまま、朝食を食べる。

少し眠い眼をこすりながら、ニュースを報じるネットワークTVを見つめる。ブループールは、桜が咲き始めたらしい。今年は、見られずに終わりそうだ。

ミンクは無事試験を終えただろうか。

ニキの散歩は、ちゃんと行つていいのかな。ぼんやりとそんなことを考えている。

温かいパンとスープ、とろりとしたオムレツ、デザートのオレンジを平らげる頃には、シンカの頭もはつきりしてくる。
「コーディン、今日、俺宿直でいないけど、一人で大丈夫か?どこか行く予定はあるのか?」

メイドの女性と、キッキンで話をしている秘書官に声をかけた。

「はい。陛下、私は明日のカストロワ大公との会食の下見を兼ねて、こちらの政府のかたがたとお食事の予定です。」

「そうか。気を付けていつて来いよ。」

ほっとする。半分仕事なのが残念だが、シンカ以外の人と遊んでくれることは歓迎する。

「陛下、本日の午後、コート・ロティの学長がお時間を作つてください。」

「ああ、わかつた。まだ、挨拶してないからな。」

シンカは、そう言ってコーヒーを飲む。

「いひして、朝からお話していますと、まるで夫婦のようですね。」

「

シンカはむせた。

「お兄ちゃん、大丈夫?」

免疫治療科、第二病棟。アイリスは一いつに縛つた髪を揺らして、首をかしげる。そのしぐさはとても、可愛らしい。病室の小さな椅子に座つて、シンカは少女のぬいぐるみを繕つ。

「あら、とても器用なのね。」

アイリスの母親が、コーヒーを持つてきてくれた。

シンカは、縫い終えた糸をくるくると結んで、切り離す。

「さ、できた。」

「すごい。」

「昔ね、漁師の手伝いをしたことがあるんだ。」

「漁師?」

「海で、魚を獲つている人たちのことだよ。」

シンカは、少女に話す。

「漁師は網を使うんだ。でも、よく破れてね。これとは少し違つけど、やつぱり針で繕うんだ。」

「ふうん。お兄ちゃんはお魚獲ったの?」

「ああ。十七歳のときだ。一度、こんな大きな魚が僕の網にかかってね。青い色できらきらしていて、初めてそんな大きな魚を捕まえたから、すごく嬉しくて。でも、重すぎた。船に引き上げる途中で逃がしちゃつたんだ。」

「ふうん。」

「悔しくてね。でも、漁師が言つたんだ。あの魚は、海に必要な一匹だった。だから、誰が獲るうとしても、きっと同じだつたんだつてね。貴重なその姿を見られたんだから、お前は幸運だつた。慰めだとは思つけど、でも、なんだか嬉しかつたな。」

少女も、その母親も、目の前の、栗色の髪の青年を見つめた。その美しい黒い瞳は笑うと吸い込まれるようだ。

「僕は、その漁師に出会えたことも、その魚と同じで、すぐ幸運だつたと思うんだ。それ以来、どんな人や物事に出会つても、たとえばそれが、喧嘩別れに終わつてしまつ出合いでも、それは幸運だつたんだって、思うようになつた。」

「アイリスと会つたのも？」

少女が問う。

「もちろん。」

微笑み返す青年。

アイリスの母親が、そつと目頭を抑えた。

シンカは、午後、培養中の樹状細胞の様子を確認すると、培養室にこもるふりをして、そつと学長室のある最上階へ向かつた。今回の配慮に対して、礼を述べておかなくては。

最上階にエレベーターが止まると、正面に秘書らしき女性が座つている。

「お約束はござりますでしょうか。」

にこやかに問われ、シンカは、頷いた。

「はい。ファルム・シ・デアストルが来たと伝えていただければ、お分かりになると思います。」

「少々お待ちください。」

秘書が学長に確認している。

「デアストル、こんなところで何をしている？」

振り向くと、ゲーリントン教授だつた。ちよつと、入れ替わりに、学長室から出てきたらしい。

「教授。僕、学長に呼ばれまして。」

「お前が、カストロワ大公の援助を受けていると言つるのは本当だつたのか。」

シンカはにっこり笑うだけで、答えない。

「大公も好き者だな。」

「教授も、大公に見込まれていると伺いましたよ。」

穏かに笑う青年に、若干三十歳の教授はピクリと眉をしかめた。

「僕は、援助を受けるつもりはありません。失礼します。」

礼儀正しくお辞儀をして、シンカは学長の部屋のある廊下の奥に向かう。それを、見送るゲーリントン教授。若干三十歳、この大学において三十代で教授まで上り詰めるのは、通常ではありえない。エドアス・ゲーリントン、彼は天才と呼ばれ、二十五歳でこの大学の研究医となつた。その影には、カストロワ大公の援助があつたと言う。

だが、ゲーリントンは、知つてゐる。カストロワは、金は出すが口は出さない。才能があるものに資金提供のみするのだ。それは、彼のこだわりでもある。自分で道を選び成功するものにだけ、協力する。カストロワは、そういう若者のこと親愛の情を込めてこう呼ぶ。『私のコレクションたち』と。

ファルム・シ・デアストルにしたような、研修生となるための推薦枠に口添えするなど、ありえない。カストロワに目をかけられ、期待されてきたゲーリントンだからこそ、分かる違ひだつた。彼には確信があつた。

ファルム・シ・デアストル、あいつは、カストロワの『コレクション』ではない。それなのに、カストロワの口添えで、特別枠に推薦してもらつた。

つまり、特別なのだ。

青年の姿が見えなくなるまで、見送ると、若い教授は、口元に神経質な笑みを浮べる。

3・くまとマコトと女難の相3

コート・ロティ大学病院は、通常、紹介状があるか、特殊な症例かもしくは資産があるものしか診察を受けられない。しかし、この救命室だけは違っていた。

救急医療を専門に行つこの診療科は、あらゆる症状の患者が、運ばれてくる。この有名な大学病院で受診したいと考える患者は多いため、ここは常に忙しい。

シンカが、ここに勤務し始めたのが、その日の夜になつてからだ。宿直なのだ。

担当する研究医は、マクマスという女性医師だつた。四十代前半の彼女は、黒い髪をきりりと結い上げ、シンカと同じく初めて勤務するミオに簡単にそこのルールを説明する。

外科を目指すミオは、外科医の担当医に、免疫治療科のシンカは内科医のマクマスにつく。

「いい？ ここでは、自分の専攻してきたものとは違つ治療をしなくてはいけないことがある。研究生なんだから、なんでも挑戦して欲しいわね。でも、相手は一刻を争う患者なのよ。無理をしないこと。できなくてあたりまえとは言いたくないけど、最近の学生は自信ばかりあつて無茶をしそぎる傾向があるの。何事も慎重にお願いね。」

「はい。」

一人の返事がそろう。

「今日は、初日だからそれぞれの担当医に従つて。次回からは、自分でできそうなことはどんどん、自主的にやってね。」

「はい。」と、一人。

「じゃあ、ルーは私についてきて。ミオは、三番で治療に当たつている担当医のところへ。」

シンカはミオに小さく手で挨拶して、マクマスについていく。早足で歩きながら、マクマスが説明する。

「患者は胸部銃創の十六歳よ。アッセームなの。言葉は大丈夫?」

「はい。」

アッセームとは、このセトアイラスの原住民のことだ。彼らは、小柄で深い体毛を有し、共通語はほとんど話さない。この惑星で、もつとも貧しい人々だ。太陽帝国の進んだ文明が入り込んだことで、受けた恩恵と被つた被害は、容易には比較できないほど大きな変化を彼らの生活にもたらした。

治安が悪い下町の住人はほとんどがアッセームで、シンカもそこには立ち入らないようにと注意されている。

そこから、この十六歳の少年は運ばれてきていた。

看護師が患者の状態を読み上げる。

シンカは、マクマスの指示で患者の気道を確保する。「大丈夫、呼吸が楽になるようにするからね。」そう、少年に話しかけると、呼吸用のチューブを喉にはめる。

「いいわね。」

マクマスの視線を受けながら、少し緊張しながら酸素マスクを固定すると、作業を終える。

肺に傷を負つたのか、呼吸が安定しない。

「ドクター・マクマス、胸部外傷のために血胸になつてていると思われますが、胸部穿刺しますか。」

「どうして、そう判断するの?」

問われて、シンカは言った。

「呼吸音の乱れ、酸素飽和度の低下。胸部CTに液体の影が見えます。」

マクマスは表情を緩める。

「正解。」(褒美に、君にやらせてあげるわ。やつてみなさい。)「はい。」

肺気圧を下げるために、マクマスの指示で、肺に小さな穴をあける。入り込んだ血液を排出する。

少年の顔色は少しましになつた。呼吸が、戻る。

少年は手術のために、外科病棟の手術室に送られていく。

はあ。緊張から解き放たれて、シンカは小さく息をつく。マスクとキャップを外して、はがした手袋とともにダストボックスに捨てる。

心地よい緊張感と充実感。シンカの瞳は、輝いている。

「ルー、次よ。二番に、裂傷の患者がいるわ。消毒と縫合ね。」

「はい。」

シンカが、新しいエプロンを取り出し、縫合キットを機材棚から取り出したときだった。

きやー！

悲鳴が上がる。

ミオの声のようだ。

隣の三番処置室で、確かに担当医と交通事故の患者を診ていたはずだった。シンカは、縫合セットを持ったまま、二番に向かう。シンカの患者は、一番のベッドから飛び出して、廊下に出ていく。患者と医師と看護師が三番の前にたむろする。

「ダンリーさんですね。部屋にもどれとは言いませんから、これ、持つていてください。」

患者に縫合キットを持たせると、シンカは三番の部屋に入る。止めようと、看護師たちがシンカの服を引っ張つたが、気にしない。

処置室は簡単なスクリーンで仕切られている。三番処置室の入り口に設置されたエアカーテンをくぐる。半透明の防護シートには、四人の人影がある。

ベッドにある患者らしい影、白衣のミオと医師。それから、銃を構えて立つているらしい、男の黒い姿。

シンカはかまわず、半透明のスクリーンをくぐった。

「ルー！」

ミオが叫んだ。

目の前の、銃を構えた男が、銃をシンカに向けて放つた。それは外れて、壁代わりのスクリーンに穴をあけた。ダンリーさん、廊下に出ていてよかつたな。そんなことを考えながら、シンカは銃を持つ中年の男を睨みつけた。

「なんだ、お前、殺すぞ！」

男の表情は思いつめていて、尋常ではない。

「落ち着いてください。あなたが、どうしてその患者を襲うのか分かりませんが、患者としてここに来た人を、目の前で殺されるのを見過しますことはできません。」

「うるさい！」「こいつは、自分の母親を殺したんだ！」「この暴走のために、一緒に乗つてた母親は、あいつは、・・さつき死んだんだ！医者なら、あいつを助けるべきだったんだ！こんな、馬鹿息子じやなくて、あいつを。」

男の声は震えている。

ミオの後ろで、まるでミオを盾にしているかのような、若者は、大きく見開いた瞳で、髭の男を見つめている。

「死んだのか・・母さん。」

その、声は苦しそうだ。彼自身も、重傷を負っている。あふれる涙。ミオも切ない。

担当医は、ただ、二人を見比べている。

「彼を殺したら、あなた一人だけが、残ってしまいますよ。」

シンカは、穏かに言った。その瞳は、やさしげに男を見ている。

「俺も死ぬ。」

「あなたが、死んでもだれも生き返らない。今、生きていたくても、生きていけない患者がいます。まだ小さな子供です。彼女に、あなたの命をあげてください。」

「なに？」

「彼女は、生きていけない。かわりに、あなたが救われて、生きづけるのだと知つたら、きっと喜んでくれます。」

ミオも、担当医も、廊下で様子をうかがう野次馬もざわつく。

「彼女のために、あなたの残りの人生を生きてください。そして、君は。」

泣いている若者に向かつてシンカは微笑んだ。

「君は、お母さんのために。」

男は、銃を持った手で涙を拭いた。

「ばか、俺がなんで見ず知らずの子供のために生きるんだよ。」

「愛する女性の子供、彼のためにでも、いいんですよ。それでも、生きていけるんだから。」

シンカは、そつと、男の銃を取り上げる。

「なんだよ、お前は！」

男がつかみかかる。

シンカは、さらりとかわして、男の手をとり、後ろ手に締め上げた。

「すみません。僕、言い過ぎましたか。でも、あなたの悲しみは、あなた自身で解決しなくては。」

男の表情は、冷静になっていた。

「わかった、いてえよ、はなせ。」

「すみません。」

シンカは、男から離れると、ミオを盾にする若者の手をほどく。若者は、ただ、泣いていた。ミオを助け起す。

「ルー。」

ミオは少し震えていた。シンカは、手をぎゅっとにぎりつた。
「さ、治療を続けよう。あなた、お父さんなんだから、そばにいていてあげてください。」

男の肩を、軽くたたいて、シンカは銃を持ったまま、処置室を出る。そこに、警備兵が駆けつけた。素早く銃を腰に隠すと、シンカは二人の警備兵を引きとめる。

「何があつたんですか？」

「なにって、銃を持って男が暴れているって。」

「ああ、間違いですよ。彼は銃なんて持つていませんから。」

野次馬たちを見回す。

「そうでしょ、みんな。」

ダンリーさんが、縫合キットを持ったまま笑った。

「そうだな。俺たちは、あの親子があんまり悲しそうだったんで、つい気になっちゃって。いやだね、野次馬は。」

「そうだな。」

看護師も、患者も、みな、警備兵から目をそらし、そそくさとそれぞの場所に戻つていいく。

「君は？」

「僕、研究生のデアストルといいます。」

「通報したのは君か？」

「いいえ。いたずらですよ、きっと。」

微笑む彼の表情は、愛らしく、警備兵は見とれる。

「ダンリーさん、や、傷を見せてください。」

「おうよ。待ちくたびれたぜ。」

二人は一番処置室へ入つていった。

途方にくれて、顔を見合わせている警備兵。

「お前、面白いな。」

ダンリーさんが、腕の傷を縫われながら笑う。

「動くと痛いですよ。」

笑いながら、シンカが答える。

「ねえ、次は私の傷、縫つてくださいな。」

振り向くと、背の高い女性が、傷を負った片足を浮かせて立つている。

すそに長いスリットの入ったスカートから、細くてきれいな足首がのぞく。

「お、いいねえ。ここに座るかい。」

ダンリーさんが、喜ぶ。

「どうぞ、受付は済ましたか？」

シンカがダンリーの傷に、保護テープを張りながら言った。

「ええ。もちろん。私、レザイア・ヴァローナ。」

「はい。ダンリーさん、できました。」

「おいおい、俺だけ追い出すのかよ。」

「ふふふ。」

レザイアといった女性は、華やかに笑いながらダンリーにせよならと手を振る。

「ふん。」

「あ、ダンリーさん。一週間後に消毒しますから、来てくださいね。」

声をかけるシンカに、ダンリーは笑って手を上げた。

「君、若いわね。お医者さまなの？」

シンカの正面で傷のある左足を、右ひざに組んでみせる。その色っぽいしぐさは、少しどきりとさせる。が、毎日コーディングの毒氣と戦っている彼には、あまりいい印象は与えない。

「動かさないでください。僕、研究生なんです。」

「あら、そう。」

「もし、研究生がいやなら言つてくださいね。ドクターを呼びますから。」

「君がいいの。」

女性は、腕を組んで首をかしげる。シンカの表情を覗き込むよつこ。

「・・・」シンカは、傷を消毒しながら、女性を見上げた。

長い金髪。派手な顔。大きな薄い青の瞳は、強い印象を受ける。普通の女性ではなさそうだ。

「だめですよ。せっかくのきれいな足を、自分で切りつけるなんて。」

縫いながら、シンカはレザイアに微笑みかける。

「鋭いわね。」

「なかなか、ここまで、できるものじゃないですよ。ためらい傷一つないなんて。」

「ふふ。君に会いたかったから。」

「え？」

「私、地球で雑誌社を経営しているの。『ラ・クース』って、雑誌、知らない？」

聞いたことがある。

確かに、経済から政治、ファッショングまで、あらゆるジャンルの記事を掲載している。ターゲットは若い女性だが、記事の内容はしつかりしていると聞いた。コーディングが読んでいたのを知っている。

「色を変えたくらいで、記者の田はごまかせないでしょ？」

「！」

3・くまとロボット女難の相4

「ふふふ。安心して、邪魔はしないわ。黙つていてあげる。でも、ねえ、一つ聞きたいんだけど。」

シンカは、レザイアを見つめた。皇帝だと、ばれてい。

「レクトと、どういう関係なの？」

「へ？」

拍子抜けする。

「だって、あの人つたら、君のことすく可愛がつているんだもの。気になるでしょ。」

「レクトの、恋人？」

「そんな風に、言つてもらつたの初めてだわ。」

嬉しそうにしている女性は、無邪気な印象だ。

「レクトは、友達だよ。」

「ねえ、そうして、栗色の髪にしていると、少し似ているわね。」

女性の手が、シンカの額の髪に触れる。

「ルー。」

不意にマクマスが入ってきた。

「あら、どちらさま？」

レザイアは不適な笑みを浮かべて、年上の女医を睨みつける。

「ドクターです。申し訳ありませんが、受付を通していただけますか。ルーも、カルテもないのに治療しないの…」

「すみません。」

ちょうど、保護テープを張り終えていた。

「ありがとう！じゃあね。また、来るわ。」

シンカにウインクを一つ残して、派手な女性はさつさと出て行く。

「ルー。」

腰に手を当て、レザイアを見送りながら、ため息をつくマクマス。

「すみません。」

「患者と親しくするのはここことだけど、相手を選ぶことね。」

「はあ。」

「さつきまでの『元気はどう』に行つたの？聞いたわよ。皆が感心して

たわ。」

先ほどの、親子のことなのだから。

「すみません。」

「なんで謝るの？」

「いい子ぶつて。そうね、あなたに怪我がなかつたから良かつたけ

ど。無茶は駄目よ。」

「はい。あの、親子はどうしました？」

「外科病棟に入院したわ。父親は、カウンセリングを受けてるわ。

でも、大丈夫。あなたは、いいことをしたわ。」

「よかつた。これ、様子見てカウンセラーから返してもうつたほうがいいですね。」

腰のレーザー銃をそつと見せる。

「あらあら。私から渡しておくれ。」

銃を手渡すと、シンカは縫合キットを片付けて立ち上がる。

シンカの身長は、マクマスより少し高い。今は百七十五センチ。ここ最近はあまりのびていない。目標のシキと同じ百九十は遠い。

「あなた、独学だそうね。どんな、勉強をしてきたのか、今度じつ

くり聞いてみたいわね。」

「僕、女難の相が出てるかも。」

「ルー。」

軽く睨んで、マクマスはシンカの腕をつねつた。

「痛いですよ。ひどいな。」

笑うシンカ。

4・熟成されたワイン、友人、コレクション

枕もとに置いた、小さな電話からのホール音で、眠りを妨げられる。シンカは、いつたん毛布をかぶるが、この電話の存在をコーディンに知られてはいけないことを思い出し、電話をつかむと毛布にもぐりこんだ。

レクトからだ。

「はい。」

「遅いぞお前。なんだ、寝てたのか。」

あぐびしてたのが分かつたらしい。

「ごめん、夜勤明けなんだ。」

「ふん。まあ、せいぜいがんばれ。俺はお前が医者になろうと関係ないからな。」

「・・じゃあ、なんであんなの、けしかけるんだよ。」

「何のことだ？」

シンカは、あの派手な女性を思い出す。

「ラ・クースの、レザイアとか言う人。」

「会ったのか。いい女だろう。」

寝転んだまま、シンカは顔をしかめる。

「あなたの趣味はともかく。俺のこと、ばらしたんだろ？」

「ああ。レザイアならいい記事を書くからな。他のゴシップ記者にすることないことかかれる前に、手を打つたまでだ。」

「そう。いいけどさ、それより、コーディンはどうするんだよ。」

「ああ、アシラには、少し勉強してもらつた。大丈夫だ、お前の希望どおり、秘書官はみな解任されるさ。四月には、異動があるだろう。」

「・・今、困つてゐるんだ。」

「そんなんに、おかしいのか？」

「仕事はいつもどおりだけ、俺、何回迫られたことか。」

「うりやましいな。」

「レクトー!冗談じゃないぞ、俺はあんたと違つんだ。」

つい、声が大きくなる。

「陛下?」

「うわ、しまつた。

毛布から顔を出すと、田の前に覗き込むコージン。

「あ、えつと。」

「それ、陛下のお電話ですか?」

厳しい表情で、とりあげる。

「コージン!やめろよ!」

電話を持つたまま、秘書官は部屋の隅に飛びのき、勝手に話す。
「軍務官。こんな、時間に困ります。陛下はお忙しいのですから。」

「おい、コージン、」

レクトが反論するまもなく、電話を切られた。

「・・いくらなんでも、やりすぎだよ、コージン。」

さすがに、シンカは怒らずにいられない。

「出てつくれよ!俺を自由にしてくれ。」

「できません。陛下には、プライベートなんて存在しないのです。

すべて、私が管理します。」

「じゃあ、俺が出てくよ!」

立ち上がり、寝室を出ようとする。

「陛下、だめです。」

扉の前に立ちふさがる。その表情は、薄明かりで恐ろしくさえある。

「いいのですか?陛下、病院のものに、陛下の正体を教えてしまつ

ても。」

「!」

「せっかくの研修が、できなくなるでしょうね。」

シンカは、天を仰いだ。怒りで震える拳を握り締める。

「コージン、あなたを、逮捕したくないんだ。だから、そんな脅迫、やめろよ。」

「私は、陛下のお体を心配しているのです。陛下のすべてを存じ上げているのは、私だけです。陛下がどんなにお忙しく、がんばつていらっしゃるのか。だから、なにも知らずに陛下に氣を使わせるすべてが、私は憎らしい。」

「コーディン。」

ため息をつくシンカ。それは、おかしいよ。その考えは。抱きついてくる秘書官にかまわず、シンカは深いため息を、もう一つ吐き出した。

「陛下。」

コーディンは、泣いているようだ。

肩に手を置いた。

「・・分かったから、脅迫は止めるんだ。あなたが強行に事を運べば、俺だって、反論しなきやならない。あなたの思うとおりになんか、俺はなれない。それだけは、分かつてほしいよ。」

コーディンが小さくうなづいたようだ。背中に回された腕に、力が入る。

「陛下、どうか。」

「だめだ。」

耳元にささやき、首に口づけるコーディン。顔を逸らし、シンカはぎゅっと目をつぶる。

「陛下、甘に香りがします。」

「・・・ミンクもそう言った。」

「…」

皇帝を突き放して、女性は睨みつけた。

「コーディン、もう、起きなきやいけない時間だ。昼食の手配を頼めるかな。」

「あ。はい。」

拍子抜けするくらい素直に、秘書官の顔に戻ったコーディンは、部屋を出て行つた。

口づけられた首筋をなでて、シンカはまた、ため息をつく。

4・熟成されたワイン、友人、コレクション2

シンカは午前の執務を終え、午後から救急救命室に出勤した。

昨日のシンカのことが広まつたらしく、受付の女性イランが派手な化粧をさらに目立たせてシンカに笑いかけた。

「聞いたわよ。ミオを助けたんですってね！なかなかやるじゃない。

」
ワインクしてみせる彼女の隣に、コーディネーターのクリフトが並ぶ。二人は気が会つらしく、よく受付で冗談を言い合っていた。

「いやいや、ルー。あのマクマスが感心したってんだから、すごいことだぜ。」といいながらドクターマクマスの少しつり気味の目を真似てみせる。

「別に、何もたいしたことしてないよ。」笑うシンカ。

「おはよう！」

ミオが出勤してきた。

「ね、今夜食事でもどう？」

巻き毛の金髪を揺らして、微笑むミオは可愛らしい。「あら、歓迎会でもする？」

受付の女性が一人の会話に割り込んだ。驚いてそちらを睨むミオに、シンカは言った。

「ごめん、今日は約束があるんだ。」

「残念。」

これまた受付の女性。ミオは何か言ったそうにシンカを見つめたが、シンカは黙つて微笑むと自分の担当する患者のカルテを持ってロッカールームに向かつ。

「 もう、 イランさんつてば、 邪魔ばっかりして！」

「 あの子はきっとだめよ、 ミオ。 可愛い彼女がいるのよ。 そういう顔してる。 」

少しばかりシリアスな表情を見せるイラン。 ミオは眉をひそめた。

「 わかんないでしょ、 そんなこと。 」

「 わかるの。 」

いつの間にとったのか、 イランはシンカの白衣につけたネームプレートをちらつかせる。 裏に、 銀色の髪、 赤い瞳の可愛らしい少女が白い大型犬と笑う写真が入っていた。

「 ほんとだ。 」

少女の髪の色、 瞳の色が通常でないことに、 医師の卵は気付く。

病気なのだろうか。

ミオはシンカの後姿を田で追いながら、 その心の中に浮かんでいるもの想う。

「 ミオ、 あなたも可愛いし、 若いんだから。 落ち込まないでね。 」

イランの派手な化粧の下の生真面目な顔が、 ミオに笑いかける。 隣

でコーディネーターもにこにこしている。 温かい人たちだ。

「 あの、 僕、 プレート忘れていかなかつた？ 」

慌てた様子でかけてくるシンカに、 コーディネーターが噴出す。

「 ルーつたら、 大切なものを忘れてくんだから。 それに、 ここでは俺じゃなくて、 僕でしょ。 」

笑って、 ミオはプレートをルーに渡した。

少し顔を赤くしている青年に、 ほろ苦い思いを飲み込む。

「 ルー、 一番の患者さん、 待ってるわよ！ 」

ドクター・マクマスの厳しい声が和やかな受付の風景に突き刺さる。

「はい！」

シンカの夕食の約束、それは公務だった。

セトアイラスの政府代表、レイス・カストロワ大公との会食だ。その日ばかりは、シンカも髪を元に戻しレンズも外していく。明日がオフなのでちょうどよかつた。このあたりはコーディンの配慮なのだ。

セトアイラスの政府が選んだ会場は、郊外のレストランだった。美しいセトアイラス市の夜景が見える。小高い丘の上にあった。

ここには、植物があつた。市街の白い風景になっていたシンカにはかえつて新鮮に美しく見える。

「こここの敷地には、完全に検疫を済ませた地球の植物が植えられているんですよ。」

穏かに、カストロワ大公が微笑んだ。

「美しいですね。プールプールを思い出します。」

「陛下。いかがですか、大学のほうは。」

「ええ、勉強不足ですが何とか。やはりレベルの高さを感じます。素晴らしいです。」

シンカの素直な言葉に、白い髪を蓄えた薄緑色の肌の大公は目を細める。

レイス・カストロワ。見かけの年齢は五十歳くらいに見える。セダ星人の彼は実際は百歳を越えていいると言う。その長寿だからこそ、コレクションを育てて見守る時間があるのだろう。短命な人種では、そうはいかない。

背が高く、その割りに小さな頭が少しアンバランスに見える。きつ

ちつした白い礼服を身に着け、肩からかけられている金糸で織られたマントが、長身によく似合つ。

シンカは黒い丈の長い上着に黒いパンツ。絞られたシルエットのそれは、白衣姿よりさらに細く見せる。少し見上げる感じになるシンカは手に飲み物のグラスを持って、窓際に立っている。店は貸切で、室内には一人のほかに誰もいない。

秘書官や従者を伴つた会食は終わり、彼らは控えの間に移つていて

「おうわさはかねがね伺つていましたが、陛下。率直に言わせていただけば」

大公がソファに腰掛け、シンカを見つめる。

「とても、前皇帝の血を引くとは思えませんな。」

「どう、とつていいのですか。それは。」

微笑んで、シンカは窓を背にもたれかかる。

「前皇帝リトード五世はことじとく私と対立していました。あの男は、何事も意のままに操ろうとした。あなたはまったく違つ。」「いひして、大公とお話ししていますからね。」

前皇帝はカストロワ大公と対立していた。同じ会議には出席しなかつたほどだ。だがシンカは違つ。

「私は大公のなさつている政治に、学ぶべきことが多いと思つています。ただ一つ、アッセームの扱いを除いては、ですが。」

「あれらはどうしようもないのだ。」

「居住区を完全に分けてはビリです？彼らにも、代表者を立たせては。」

大公は首を横に振つた。

「だめですな。彼らは、学ぼうとしない。惑星に入植がはじまつて

もう一百年になると云つのに、未だに大学を出たものが一人もいないのですよ。」

シンカは、大公の隣に座つた。飲み物をテーブルに置く。

「ダメなのでしょうか。」

「医学的に、アッセームは他の惑星人と同じだけの知能を持てないと分かつています。無駄でしうな。向学心がある惑星人は、未開惑星でもどんどん、ここに来て学んでいます。陛下、陛下のご出身の惑星リュードでも、過去に一人、ここで学んだものがあります。」

過去に、惑星リュードで。それは一人しか浮かばない。

「あの、その人は、……ロスタネスでは？」

シンカは知らなかつた。母がこのセトアイラスに来ていたなど。もちろん、それは彼のうまれる前の話だ。

ただ、レクトが昔話を嫌うために、シンカは母の昔の話をほとんど知らない。

「ええ。ご存知ですか。」

こちらは何もかも知つていたかのような落ち着きよつで、大公は微笑んだ。

「母です。」少し悔しい氣がする。

「そうですか。そう言えれば、面影がありますな。素晴らしい女性だつたと、当時の教授が申していました。」

「そうですか。」

「例の、改革の年に、亡くなつたとか。」

「はい。」

改革の年とはリトード五世が逝去し、シンカが皇帝になつた年のことだ。太陽帝国の歴史上はそう言つ呼び方をしている。

うつむくシンカに大公は微笑んだ。

「親子でここに学ぶとは、感慨深いでしょうな。」

大公は棚から、ワインのボトルを取り出した。

「IJのワインは、ちょうど、ロスタネスがこの大学を卒業した年のものです。まだ、あなたは生まれていなかつた。」

ビロードのように揺れる赤い液体をグラスに注ぐと、大公は一つをシンカに持たせた。

「ロスタネスに。」

グラスを少し持ち上げ、乾杯のしぐさ。

おいしそうに口に含む大公をシンカは見つめた。

きっと、大公は知っているのだ。シンカの出生のことも、母のこと、そして、レクトのことも。ここでアルコールを勧めるのも、シンカがまったく飲めないことを知つていてなのだろう。高価なワインを母のためにと開けられては、断りにくい。

迷う。

「IJのワインは、地球でもっとも希少な葡萄から作られておりましてな。醸造元はドメーヌ・デヴァアイエ・レスゴーといいます。」

「聞いたことがあります。」

以前、シキが言つていたのを思い出す。一度飲んでみないと。とても、高価で、一杯で飛行艇が買えるという。それすら調査済みなのだろうか。ますます、断りにくくなつた。老獴だな。シンカは小さくため息をついた。

「友人が、一度飲んでみたいと言つていました。とても高価で、流通量も少ない。」

「そうですな。よろしければ、一本お譲りします。このセラーのワインは私の私物でしてね。預かってもらつておるんです。」

シンカは赤い液体を見つめる。シキの誕生日が近い。一ちらにきたら、彼の家族とともに祝いをかねて食事をする予定になつていて。その時に持つていけたら、喜ぶだろうな。

「飲まれないのでですか。」

大公が怪訝な顔をする。

シンカは腹を決めた。なめるだけ、それなら、何とかなるかもしない。

「あまり得意ではないんですが。少しだけ、いただきます。」

息を止めて、少しだけ口に含んでみる。

熱い感触が喉に落ちる。息を大きく吐く様子を見て大公が笑つた。

「無理はなさらないでください。陛下が酒に弱いのは存じ上げませんでしたが。」

白々しい。そんなこと、食事に飲まなかつた時点で分かりきつたことだろうに。

シンカは胃から背中、全身が熱くなるのを感じて目をつぶつた。

うわ、強い酒だ…

シンカは何かと目を開いたが、隣に座る大公の顔が揺れる。だるくて、仕方ない。

「陛下？」

シンカの金色の髪が大公の肩にかかる。若い皇帝はすっかり、眠つてしまつていた。

「お人が悪いですね。大公も。シンカがアルコールを受け付けないことぐらい、ご存知でしょうに。」

いつの間にいたのか、亞麻色の髪の長身の男が、完璧な笑みを浮かべて立っている。

「ふん。カツツエか。黙つて見ていたお前がわしのことを言えるのか？」

笑つて、大公はシンカの髪をなでた。

男は向かいのソファーに腰掛けると、シンカの飲み残したワイングラスを手にとる。

カツツエ・ダ・シアス。

ミストレイアのオーナーでもあり、宇宙一の大銀行スター銀行社のオーナーでもある。年齢はレクトと同じ。レクトとは大学の友人で、二人で軍事会社ミストレイアを立ち上げた。ミストレイアは、民間軍事組織だ。どの惑星政府にも属さず、各地の内戦や警備まで、なんでも請け負う。レクトが総括本部長を務め、シキは地球本部長と言う肩書きを持つている。カツツエは、彼らの上司にあたる。

もちろん、シンカのこともよく知つている。

カストロワ大公は眠り込む青年の顔を覗き込む。

「お前の評価はどうなのだ。」

目の前のカツツエに尋ねる。

「正直、予想以上でした。大公、あまり近づかないほうがいいと思いますよ。」

シンカの頬に触れようとしている大公に、くぎをさす。

「ふん。何故だ。」

大公は不機嫌に眉を寄せ、カツツエを睨んだ。

「シンカの体臭。気付きましたか？」

「？甘いな。」

「ユンイラです。一度、抱きしめたことがありますが、ぞつとするほど、そそられますよ。」

「ほお。」

「それは、中毒になる物質を含んでいます。あまり近づくと。」

カツツエが言い終える前に、大公は既に若い皇帝を抱きしめていた。

「大公……。」

「わかつてある。」

しぶしぶ離れると、カストロワは座りなおした。一杯目をグラスに注ぐ。

「ふん。これが皇帝でなければな。コレクションに加えるのに。」

「私が言つのもなんですが、大公。あまりいい趣味とはいません。」

「そもそも、おやめになつては。」

「ふん。コレクションの一人に言われたくはないな。お前やレクトが独り立ちして以降、あまりいいものは手に入つていない。コレクションは育つていく過程が面白いのだ。実力ある若者の力強い、波乱に満ちた人生を、まるで自分のもののように感じる。至上の喜びだな。今はこれといって夢中になれるコレクションはない。この全宇宙に、全人類に知らぬものはないほど貴重な存在になつてもらわねば、つまらないのだ。まあ、デスターイののような低レベルのコレクションでも、多少は役立つてくれるである。」

「大公。」低レベル、といわれたデスターイは、それでも現在、自らの政治力でユクリアという惑星の元首になつていて、立派な人物だと聞いている。どういう基準なのか。

カツツエはラズベリーの甘味を口に残すワインを飲み干すと、渋い表情をする。

それを見つめて大公は笑う。

「こんなに、いい支援者はいないと思うがな。口も出さず、資金は豊富に与える。決して見返りを要求しない。」

「そうですね。」

確かに、とカツツエは思つ。

大公は、若者を好む。男女問わずだ。自分が長寿で年齢が高いせいもあるのか、若く将来のあるものに憧れのようなものを持っているらしい。秀でた能力を持つそれらのコレクションは、名を連ねれば、そのまま歴史の教科書になりそうなくらいだ。

それらは見返りを求められない。しかし、だからこそ、この老猾なセダ星人に頭が上がらない。それは対価を求められるよりずっと強い鎖で彼らを縛つていることになる。分かつてやつてているのだから、人が悪い。

レクトのように、「見返りを求めない奴が悪い」と開き直れるものは稀だ。

そう、レクトもカツツエも、学生のうちに大公と知り合い、コレクションに加わった。

「これも、ほしいのだが。」

しげしげと、シンカを見つめるカストロ口。
やはりそうなるか、とカツツエは内心舌を打つ。

レクトからシンカが大公に会うと聞いて、来てみて良かつた。恐いもの無しの皇帝も、いささか大公にはかなうまい。
未だにカツツエですら、大公に強くは出られない。

「大公、そろそろ、返してあげたらどうです。控えの間の連中は、やきもきしてましたよ。」

「ふん。カツツエ。お前に頼みがある。」

一杯目を空にすると、カストロワは口元に笑みを浮かべながら笑う。カツツエは嫌な予感を打ち消すように一杯目を口に含んだ。

「これをコレクションに加えることで、わしは、太陽帝国も手に入ることになる。」

シンカの頬を手の甲でなでながら、セド星人はにやりとする。

「…」

「一つ協力してもらいたい。」

カツツエには、逆らえない相手だ。ここにはいないシンカの父親に「バカヤロウ、何でお前がここにいないんだ」とのろいの言葉を無言で唱えながら、カツツエはグラスをテーブルに置いた。
「大公のお申し出とあれば、断ることなど出来ませんよ。どうぞ、なんなりと」

4・熟成されたワイン、友人、コレクション③

シンカが目覚めたとき、公邸の寝室にいた。

起き上がって、見回す。

すっかり明るくなった部屋は、きれいに片付けられていて、昨日出かける前に散らかした書類がない。

研修のレポートを書きかけていたんだけど、どうなったのかな。まだ、少し眠い眼をこすって、シンカは執務室に向かった。そこも、静かだ。

いつもお気に入りのアルパカのショールを肩にかけると、パジャマのまま、リビングに行く。

「お、起きてきたのか。」

黒髪の男が大きな口で笑いかける。

「ー・シキ！ いつ来たんだ！」

嬉しそうに、かけよる青年。

「おう、昨日な。聞いたぞ、お前、大公の前で酔っ払ったとか。みつともねえなあ。」

「ちえつ、話したんだユージン。あ、そうだ、ユージン。大公にワイン、もらつたかな？」

「はい。ちゃんと、しまつてあります。ほんとに、心配させないでください。ミストレイアの警備の方にここまで運んでいただいたんですから。」

秘書官が美しく笑う。朝食をテーブルに並べている。

「・・ごめん。でも、シキ、シキがほしがつてたワイン、もらつたんだ。」

嬉しそうに笑うシンカ。

「分かつたから、おい。何そんなにはしゃいでるんだよ。」

落ち着きなく、身支度したり、大学のことを話したりするシンカに、シキは不思議そうな目を向ける。

シキは分かつていないので。

シンカが、どれほどコージンとの生活に苦しんでいたのか。頼りになる友人が来てくれたことで、やつと、この研修旅行を楽しめそうな気がしてきていた。

「まるで、十七のときと同じだぞお前。わつとも、皇帝らしくない。

「あら、シキさんは陛下のこの幼少の頃をご存知なんですか？」

コージンがシキに微笑みかける。さつちりした姿の美しい秘書官が微笑みかけると、彼でなくとも照れる。その微笑の効果がないのは皇帝陛下くらいのものだった。

「いや、俺は、あいつが十七のときに出会つたんだ。背中もこんなしかなくてさ。」

「そんなに小さくなかったよ。いい加減なこと言つなよ。」

笑う二人。

「ね、コージン。今日午前中はシキと遊んでいいかな。」
朝食を、一人でつつきながら、まるでお母さんに許可をもらつ子供のように、シンカは言った。

「ええ。どうぞ。午後にはお帰りください。会議がありますので。」

「うん。分かった。」

久しぶりにあう、皇帝の姿に、シキは目を細める。レクトに、様子を見てくれといわれたが、元気そのものではないか。

相変わらず、大して伸びてない身長、白い肌、大きな瞳。お気に入りのレンズの実も毎日食べているらしい。これが、医者の真似して患者に向かうんだから、不思議だ。想像がつかない。彼の中では、シンカは出会つた頃のまま、恐いもの知らずの、十七歳の少年なのだ。真つ直ぐに人を見て、よく笑う。

「セイ・リンとマコアンヌはどうしてるんだ？ 健診は終わつたんだろ？」

彼らは、マコアンヌの健診のために、セトアイラスにきたのだ。

太陽帝国と、それに属さない惑星政府が共同で組織する、惑星保護同盟では、シキやシンカの生まれた惑星、リュードを、未開惑星として位置付けている。

それは、惑星の探査から入植までに最低五十年の調査期間を設け、その惑星の環境や先住民の文明を侵害しないようになつてているため、調査期間が、まだ三十二年のそこは、未開惑星、なのだ。現在リュード人でその惑星外に出来ているのは、シンカ、シキ、そしてミンク、ただ三人だけなのだ。未開惑星の先住民を、それ以外の地に移住させることは禁じられている。

ただ彼らだけはシンカが皇帝の後を継いだため、今ここにいる。宇宙にたくさんある惑星のそれぞれで発展してきた知的生命体、ここでは惑星人というが、それらの関係は種を異なるものとすることが多い。（種とは、自然条件のもとでその構成員が自由に交配できるような集団のことである。）

事実、リドラー人と、地球人は自然に子供を作ることはできない。遺伝子上の問題なのだ。また、セダ星人は他のどの惑星人との間にでも、子孫を残すことはできない。逆に、セダ星人以外のすべての惑星人と交配可能な惑星人種もある。だが、それらの相関図は複雑になり、人類の種分類は非常に困難で、まだ混沌とした進化過程にあるとされる。

これらの惑星人種に関する研究の末、生物学的種概念でいう惑星人種として確立されているものは、現在、六種ある。この広い宇宙で、たつた六種ということ自体、この分野の研究がいかに混沌としているか、伺い知れる。

リュード人のシキと、リドラー人のセイ・リンとの子供は、自然に授かったものである。つまり、マリアンヌは確立された人種として知られるリドラー人とリュード人との自然交配の結果の、宇宙で初めての子供ということになる。そういう亜種（通常父親の人種を使ってリュード亜種と呼ばれる。）は、太陽帝国の法律により、生命の維持と保護、調査を義務付けられている。その健診のために、彼らは、

「Jセトアイラスに来ている。

「ああ。Jの気候だる。プールプールじゃ春だつてのに、Jつちは
ずいぶん寒いんだな。おかげでマリアンヌが風邪引いてな。本当は、
來たがつていたんだが。悪かつたな。」

「そうか。心配だな。シキも本当はすぐに帰つてやりたいんだろう
？」

ミストレイアで、「黒髪の獅子」と呼ばれた彼が、かなり子煩惱だ
といつづわさを聞いた。

「馬鹿言つな。俺は、久しぶりに地球から出られて、羽を伸ばした
いんだ。」

黒髪に黒い瞳の男は、大きななりで伸びをする。

「いいのかな、そんなこと言つていてさ。」

シンカが、ジュースを飲んでいる隙に、シキがレンエの実を一つ
まんだ。

「あ！だめだよ。俺のだ！」

「おいおい、子供じやないんだからさ。」

「俺の好物つて知つてるじゃないか！意地悪だな！」

すねる皇帝の額をぴんと弾く。

「いてつ。」

くつくつぐ。シキが笑う。

「可愛いなあ、お前。」

赤くなつて、黙るシンカ。

「陛下、陛下。すみません。」

ヨージンが、少し緊張した表情で、シンカの横に立ち、耳元で告げ
た。

「ゲーリントン教授から、お電話です。」

「え？」

「Jの番号を知つてゐるはずはなかつた。」

シキと軽く手を合わせて、青年は執務室に入つていいく。

画面に触れると、通信が再開される。

向こうに、ネクタイを締めて、きちんと白衣を着込んだ教授が、微笑んだ。

「おはようございます。」

「すまないね、オフの日に。」

「いえ。・・あの、ご用件は？」

「君に、見せておきたいものがあつてね。今日の午前、私の出張に付き合つて欲しいんだ。」

「え、・・はい。」

シキとの、遊びが・・。

「大学の官舎で待つていて。すぐにおいで。」

「はい。」

画面が、暗くなつてからも、シンカはぼつと見ていた。何で、俺に声をかけてくるんだろう。

しかも、こんな、タイミングで。

よほど、沈んだ表情だつたのだろう、シンカがリビングに戻ると、シキが声をかける。

「大丈夫か？」

「陛下？」

「うん、ごめん。シキ。教授に呼び出された。出張について来つて。」

蒼い瞳が、寂しそうに微笑む。

「まあ、仕方ないな。俺は、まだ一週間はこちらにいられるんだ。しかも、仕事じゃなく、な。だから、いつでも呼べよ。」

「分かった。ほんとにごめん。」

うつむく青年の髪を、くしゃりとなでて、シキは笑つた。

「お前が選んだんだろ？」

「チエツ。」

そそくさと、支度して、シンカは一人に見送られる。

車の中で、運転手にもシンカが落ち込んでいるのがよく分かった。

「忙しいんだな。」

車が見えなくなると、シキは秘書官に微笑む。

「はい。本当は、もっとお時間を作つて差し上げたいのですが。なかなか調整が難しくて。」

「あなたも大変だな。」

「大変なのは陛下のほうですもの。私は大丈夫です。リビングに戻つて、シキは飲みかけのコーヒーを口に運ぶ。大丈夫、か。つらい思いをしている人ほど、その言葉を使う。ユージンが、思いつめた様子でシキの正面に座つた。「あの、聞いていただきたいことが。」

「ん？」

秘書官は、美しい瞳を潤ませて、黒髪の男を見つめた。

4・熟成されたワイン、友人、コレクション4

「悪かったね。休みのところ。チートの約束でもあったのかな?」エドアス・ゲーリントンは助手席で浮かない顔をしているシンカに声をかけた。

「いえ、そうでもないです。」

がつかりした表情を消せずにいる青年に若い教授は笑った。

「素直だな。しかし、君が運転できないとはね。」

「すみません。僕、免許なくて。」

「それで、運転手つきなのか?大きなお屋敷を借りているんだな。」

「……。」

「他の研究生はどうしていると思つ?..」

「知りません。」

前方を見ている教授の横顔を見つめた。

「ホームステイしているか、共同でアパートを借りている。特に、この一般向けの研修を受けるものは恵まれていないものが多くてね。恵まれていれば、この大学に入学していただろう者ばかりだ。君だけ、少し違うね。」

なにを言いたいのか。

シンカはゲーリントンの褐色の肌を見つめていた。切れ長の黒い瞳は、すこしレクトを思わせる。レクトも同じリドラー人だからだろう。

「運転中人に見られるのは好きじゃない。こちらを見ないでもらいたいね。」

シンカは慌てて視線を前に戻した。

「すみません。」

変わった人だな。シンカは思つ。

そう言えど、なんで俺を呼び出したのか、聞いていらないな。

「君は、たしか、コンイラ因子の研究をしたいといつていたね。」
「はい。」

教授が視線を前に向けたまま、ぽつりと言つた。

「少し、興味のある亜種を見つけてね。コンイラの因子を体内に持つていてる。」

「亜種？！」

「ああ。宇宙に一人だけだ。惑星リュード、君の生まれ育つた星の血を引いている。」

ちらりと横目でシンカを見つめる教授は、楽しそうに目を細めた。

ゲーリントンはこのセトアイラスにコンイラの研究所を持っている。リュード人であるシンカに興味を示すのも、こうして声をかけるのも当然だが。回りくどい言い方に試されている気分になる。

「デアストル。君は知つていてるか？」

「ええ。知り合ひの子供です。星を離れているリュード人は少ないですから。」

教授はシキの一人娘マリアンヌのことを言つていた。

関係を深く探られると面倒だな。

シキも言つてくれればいいのに。健診に行つた病院がコート・ロティだつたなら、それなりに俺も考えておかないと。

周囲が惑星リュードを単なる辺境の惑星と思つてくれるうちはいいが、マリアンヌのことが広まれば、必然的に注目を集めだら

う。となれば、同じ惑星出身のシンカも目立つことになる。

シキは、なにも言つていなかつた。そういえば、検査の結果についても。

「コンイラの因子を持つて生まれた子供は中毒症状を持つ。あらゆる病氣に対する免疫は持つものの、自らの内臓は弱く体力もない。」「よくご存知ですね。そういうえば、コンイラの研究所をお持ちでし

シンカは、うつむいてかみ締めるように言った。

そのユンイラの中毐症状になつた人々を、助けるための研究が、俺を生み出した。

「あの赤ん坊も、中毒症状を持っている。あまり、長くはないな。」

シキはコンイラを使っていなかつた。ミンクのみつに中毒になつて
いない。なのに、その子供に中毒症状が出ることなんかあるのだろ
うか。

「教授。その亞種に興味があります。」

「協力してくれるかな？」

教授は穏かに微笑む。

リドラー特有の褐色の勝った肌、切れ長の漆黒の瞳がシンカを見つめた。

リドラ人は標準的に地球人より背が高く、手足が長い。運動能力に恵まれている。教授も特に鍛えたわけではないだろうけれど、シンかより頭一つ高い身長、しなやかな手足をしている。今日、身につ

けているステージがよく似合っている。

少し薄い唇が神経質そうな細い顔にむらりと乗っている。

「はい、是非お願ひします。」

素直にこり笑うシンカに、教授も満足そつだ。

景色はセトアイラス市を抜け、この星本来の風景になつていて。セトアイラス市では完全に締め出されている、黒々とした高木がうつそつと茂る。深い森のようだ。薄暗い。年数を経た古い森のようだ。

どこに、向かつているのだらつ。

速度はかなり遅い。徐行している、といつていい。地上すれすれに走る意味があるのかも分からぬが、この星ではそういう規制なのだろうかとシンカはきょろきょろと景色を眺めた。

まだ昼間だというのに、ここは薄暗い。時折木々をすり抜ける陽光が視界に弾けてシンカは目を細めた。

「あの教授。どうして僕を呼び出したんですか？」

「……出張といつのは、嘘でね。」

「え？」

隣を振り向く。

「見るなど、言わなかつたかな？」

三十歳の若い教授は、くわえていた煙草をふいにシンカの手に押し付けた。

「つー？」

一瞬のことと、声にならない。

「なにするんですか！」

「私は、ある仮説を立てている。」

教授は車を停めた。

かすかな振動に、自家用飛行機は接地したのだと分かる。いたむ手首をそっとかばい、シンカは教授を睨んでいた。シンカの質問には答えずに教授は胸のポケットに細い指を滑り込ませ、中から小さな細い銀色のものを引っ張り出した。

なんだ？

シンカは身を引ひつとして、シートベルトで固定されていることに気付く。解除は、と身じろぎしたところで肩を掴まれた。

「なんですか？」

教授の手にある銀色のそれが紫色の光を放ち、眉をひそめるシンカの瞳を照らした。

まぶしくて、一瞬見えなくなる。

「教授、なんですか！」

まぶたを閉じてもちかちかするほどのまぶしさで、シンカは手で瞳を隠そうとする。

その手首が教授に捕まれた。

「君は本名をシンカといつ。仮説どおりだ。」

目を開けるとまだ赤い残像が視界を遮り、シンカは何度も目をこすつた。

仮説、つまり、正体を知っていたということなのか！

「君の瞳の蒼はね。コンイラの色素と同じなんだ。ほら、傷も、もう治っているね。」

捕まれた手首に、火傷の跡はない。

煙草の火は俺を試したのか。

「そんな恐い顔しないでもらいたいね。なんで分かったかって？カラーレンズを入れていたつて、分かるんだよ。なにしろ、私は惑星リコードのデイラの研究所で、君を三年間、研究したんだ。」

教授が差し出した小さな四角いプレートを開くと、シンカの十四、五歳の誕生日の写真がホログラムになって光る。それは誕生日「」とシンカの母ロスター・スネスが研究員に配ったものだつた。

当時の研究員たちはシンカを家族のように見守つていたといつ。研究所の警備兵だったセイ・リンも同じようなものを、彼女のは赤ん坊の頃からの写真だつたが持つっていた。

「ずいぶん成長して。君が皇帝になつたときには、君に関わつた研究員全員に緘口令がしかれた。デアストルが皇帝であることが確認できなくてね。こうして一人きりになるために連れ出したわけだ。」

教授の長い指が、シンカのあごに触れる。

「久しぶりにあえて嬉しいよ。」

「僕は嬉しくなんかない。覚えていないし。」

「それはそうだろう。君はいつも眠らされていたんだからな。君に協力してほしいんだ。君の体内のコンイラを抽出したくてね。」

「それは帝国の法律で禁じている。」

教授の手を押しのけて、シンカは睨む。

「君の研修の成績は私が担当している。いいのかな？落第でも。」

「は！？なんだよそれ！」
教授の平手が頬をうつた。

「黙れ。」

神経質な細い眉が、ゆがみ、穏かないつもの様子とは違っていた。漆黒の瞳は、冷たくシンカを見つめる。

「お前は私の研究材料なのだ。お前がここで生きていられるのも私のおかげなんだぞ。不安定な生き物のお前を何度も救つたことか。恩に感じて喜んで協力するべきだろう？何だ、お前のその態度は」「恩に着るも何も、俺はそんなこと知らない。勝手にあんたたちがやつてたことだろ！？」

「いつか、ロスタヌスから奪つてやるつもりだった。それが、こんな形で実現するとはな。」

「なにを言つてる！俺は協力なんかしない。」

肩に置かれる男の手を強引に引き離す。さらに掴みかからうとする教授の腕を振り払つて、肘を腹に突き出した。う、ぐ、と声を上げ、教授は昏倒した。

崩れる教授にかまわず、シンカはとにかくこの場を逃げ出すことにした。シートベルトを外し車の外に降り立つた。ポケットを探りかけ、携帯電話を失つていることを思い出した。先日の騒ぎのときに、ユージンに取り上げられたままだつた。

「ああ、もう…」

森の木々はうつとうしいほど暗がりを作り出し、道の先も曲がりくねつて見えない。一体ここがどこなのかも分からぬ。自動誘導装置を配置されているのだから、一応公式な道路であることは間違いないが先ほどから、一台もすれ違つていない。教授の目的が二人きりになるためで、しかもここで車を停めたのなら、誰かが通りかかるのを待つなど悠長なことはできない。

はあ！と怒りの混じる溜息を吐き出して、シンカは停まっている車に戻った。

中ではまだ、教授がのびている。

自分の知らないこいつが、俺のこと知っている。俺のことを研究していた。研究材料だと嬉しそうに言つてのける。なのに俺はこの男のことを何も知らない。圧倒的に不利だ。

シンカは運転席側に回りドアを開く。

車のエンジンをかけば車載の電話が使えるだろ。

シンカの認識番号ではエンジンはかからない。車は身分証明となる認識番号を読み取らないと動かせないようになつていて。誰が、いつその車を運転したのか、記録されるようになつていて。シンカの認識番号は一般人と違うため使用できないのだ。

運転席で気を失っているゲーリントンの手首のリングを、スタートスイッチにかざしてみる。

どこかにセンサーがあつて認識するはずだ。

ゴージンに連絡して迎えに来てもらわなければ。いや、自分で運転してもいいな。

アレコレ考えながら教授の腕をさらに近づけようと引つ張り起す。

「大体、俺に車を運転させないからこいつこいつになるんだ」

この時ほど、自分に普通の認識番号がないことが悔しいことはなかった。

数回試しているうちに、ゲーリントンがうなつた。

「…」

エンジンがかかつた。

「お前…」

ゲーリントンがシンカにつかみかかる。

首をしめようとする腕を何とか振り払つて、シンカは車から離れた。

「くそっ」シンカは走り出した。

森へ踏み込めば、逃れられる。

が。

ゲーリントンの車が背後に迫っていた。

動物侵入の防御柵はかすかな電流を帯びて三メートルほどの高さまである。

触れかけて、ぴりと痛みを感じ、シンカは振り向いた。

逃げられない？

背後には銀色の車体と、まぶしいライト。

4・熟成されたワイン、友人、コレクション5

静かな振動が不意に吐き氣を催し、シンカは目覚めた。

車の後部座席のようだ。横向きに寝かされている。耳鳴りと同時に視界がぐるぐると巡る氣がしてまた目を閉じた。

捕まつた、のか。

静かに息を吐き出して、もう一度ゆっくり目を開けた。

起き上がりうとしてそれができないことに気付く。寝返りをうつりとすれば言いよのない痛みが全身を走った。

こいつ、車で俺を、轢いたのか……。

正気なのか？殺すつもりなのか……？

運転しながら、教授の漆黒の瞳がミラー越しに話し掛けた。

「シンカ。言うことを聞くんだな。大学では今までどおり振舞つてやる。だから協力しろ。それにマリアンヌの治療にも君の血液が必要なんだ。協力してくれるとあんなに素直に言つたじゃないか。教授は穏かな表情で微笑む。

この状況で笑う神経がまず理解できない。

「嘘をつくな。……マリアンヌが中毒なわけ、……ない。」

「それはどうかな。君が診察したわけじゃないだろ？それに、リコード人の父親は信じたよ。」

シンカは別の痛みが胸に降りるのを感じていた。

「シキを、だましたのか？」

「君はなんで私を信じないのかなあ。私は宇宙一コンイラに、いや、君に詳しいと自負しているんだ。信じなさい。」

細い眉を神経質にピクリとさせ、鏡越しに青年を睨みつけるその表情は面白がっているようでひどく残酷な印象を受ける。

反射的に胸を抑えたシンカの手に固まりかけた血液が粘りつく。息をするたびに、肺が痛んだ。

シンカが咳き込めば、教授は笑った。

「大丈夫だ、お前は死なない。それくらいではな。」

「ひど、いな……。」

「また呼び出す。いいな。別にお前を殺そうといふんじゃない。少し、採血に協力してくれればいい。抵抗するからこいつにう田に会つ。私に従わなければ研修も終わりだ。皇帝陛下が落第じやみつともないだろ?」

く、と。

ゲーリントン教授の含み笑いが何を意味するのか。

正常な人間がとる行動とは思えなかつた。

それが返つてシンカの判断を鈍らせる。何をするか分からぬ男。関わらないのが一番なのに。担当教授を替えてもらうか。研修に関して特別扱いは一切しないといつ学長の言葉を思い出す。その約束で承諾してもらつたのだ。

「分かつたよ。」

シンカは目を閉じた。

痛みとともに、体が発熱しているのを感じる。コンイラの成分を体内に持つてはいるから、傷はいずれ治る。痛みだけが残つてしまつたが。

「私の家で着替えていくといい。そのままではな。」「あんたが悪いんだろ……。」

ろくなことがない。朦朧とする意識の中、シンカは地球が恋しかつた。ミンクの待つプールプール。美しい、春の花が咲いているはずだ。

5・採血、研究、少女

午後、約束の時間を一時間過ぎてシンカは公邸に帰ってきた。

出迎えたコージンは哀しいほど慌てていて、シンカを送つてきたゲーリントン教授を睨みつけたほどだ。

リドラー人の若い教授は神経質そうな細い眉をピクピクさせながら、美しい秘書官の視線を受け止めた。

「初めてまして。ゲーリントンです。確か、コージン・ローテシルトさんでしたね。」

「あの。」

問いただげに見つめる秘書官に、低い弱々しい声でシンカは答えた。

「『じめん、コージン。もう、ばれてるから、気にしなくていいよ。』投げやりに答えて、シンカは執務室に入つていく。教授に挨拶もない。

「すみません。車に酔つてしまつたようで。」

コージンの表情を読み取つたのか、教授はにっこりと笑つた。

コージンは睨み返す。シンカの様子から、何かあつたと直感を働かせているのだ。ゲーリントン教授のなれなれしい様子に比べて、シンカの疲れたような態度がそれを物語ついていた。車に酔つたくらいであんな態度をとる陛下ではない。服装も、出かけていったときと違う。

ゲーリントンに「ありがとうございました」と儀礼的な挨拶をし、早々にエントランスへと追いやると、コージンは慌てて執務室に駆け込んだ。

あのシンカの様子は普通ではなかつた。

「陛下！」

シンカはソファーに横たわっていた。

疲れたようにぐつたりしていて、秘書官の呼びかけにも反応が鈍い。

「陛下、会議は延期いたしますか？ドクターを呼びましょうか？」

いつもあんなに禮りしきの、こんな時はやさしいんだ。

シンカは哀しくなった。

けだるい体がどうにも動かない。

まさか、こんなところでティイラの研究員に会つてしまつとは。

ゲーリントンはマコアンヌのことでシキを騙している。

シキは俺の体内のコンイラが治療に必要だと聞かされた。だから俺に健診の結果を言わなかつた。俺のことを気遣つて。

……シキは、本当はどう思つたんだろう。俺がゲーリントンに協力することを望んでいるのだろうか。俺自身の研究をしてほしいと。

吐き気がした。

「陛下？」

コーディンが肩を揺すつた。その振動すらめまいを誘つ氣がして、シンカは眉を寄せる。

「気分が、悪いんだ……」

「！？陛下？あの、陛下！？」

ぐつたりとしたままシンカは動かない。

手を握り締めてもそれは力なく重い。ひどく熱い。

そのまま意識を失つてしまつた皇帝に、コーディンは慌てた。

「陛下、しつかりしてください、陛下！」

「失礼。私も一応ドクターなのでね。任せください。」

コーポレーティングが立ち上がり立つたところで、背後に先ほどの教授が立つてゐることに気付いた。いつの間に入り込んだのか。エントランスで帰したつもりだった。つい、声が荒くなる。

「！許可もなく、入らないでください！だれか！」

コーポレーティングはシンカに近寄ろうとするゲーリントンの前に、立ちはだかった。

「ドクターなら、専属のものがあります。お気持ちは嬉しいのですが、どうぞお帰りください。」

「しかし、大丈夫ですか？その様子ではかなりつらそうですが。」

「あなたの運転が、荒かつたからでしょう？」

そう睨みつけたコーポレーティングの表情は、鬼気迫るものがあった。

「ほう」と小さく声を上げ、むしろ嬉しそうに笑うとゲーリントン教授は秘書官を見つめた。

「そんなに睨まないでください。では、私は帰ります。何かあつたら、こちらにおりますので、連絡してください。」

ゲーリントンは、テーブルに名刺を置いた。

「コンイラの免疫症研究所の所長をしておりましてね。彼の治療に關しても、宇宙一と自負しておりますのでね。」

神経質に口元をゆがめる笑みを浮かべ、ゲーリントンは秘書官が呼んだ警備員に追われるように出で行つた。

ほつと緊張をほぐした秘書官に「大丈夫ですか？」と警備員の一人が声をかける。

コーポレーティングは氣丈にいつもの完璧な笑みを見せた。

「ええ。大丈夫よ。陛下は車に酔つてらつしやるの。ありがとうございます。」

「また、何かありましたらお呼びください。」

ミストレイアで雇つた彼らは丁寧にお辞儀して持ち場に戻つた。この場限りの仮の警備員。こんなことなら親衛隊をそばに置けばよか

つたとユージンは後悔していたが、彼らなら帝国の権限の元シンカを保護してくれる。

だが、シンカが堅苦しい彼らを嫌がったからこうなっている。余計に、シンカはことを大きくしたくないだろう。無理をするかもしれない。今回の研修旅行が多くの反対を押し切つて実行したものだからこそ、旅先での失態はシンカの権威を傷つけることになる。ユージンも慎重にならざるを得ない。

「じめん。ユージン。」

「陛下！お目覚めですか！」

秘書官が駆け寄ると、シンカは笑つて見せた。

大きな革張りのソファーで、若い皇帝は金髪の前髪が頬にかかるのを気にもせずに、ぐつたりとしている。熱があるのか、すこし頬が火照っている。

「うかつだつたよ。会議まで後何分ある？」

「三十分ほどです。ですが、陛下。」

「資料を。時間がない。会議の後、話すから。今日は大臣たち皆さん揃つてもらつている。忙しい彼らが集まつてくれるんだ、延期はできない。大丈夫、時間までには座つていてるくらいはできるようになるよ。」

横たわつたままユージンの差し出した端末で資料を確認する。その蒼い瞳を見つめながら、ユージンは考えていた。

シンカは仕事に対して強い責任感を抱いている。だから、ユージンが上手く手を抜けるように仕向けていた。そうしなければ、シンカは無理をしてしまう性格なのだ。

ユージンは自分でなくては、シンカの健康を維持できないと思い込んでいた。

本来なら、こんな状態の陛下を会議に出席させるなど許すコージンではないが、この会議は今年の秋に予定される惑星保護同盟の会議のための事前協議だ。

重要な会議。本会議の前に太陽帝国としての議題を策定したり、他惑星からの提出議題の調査、回答を準備したりと、大臣クラスで調整しておかなくてはならないことがたくさんある。年間の予定の中で最も重要な会議の一つになる。仕方ないのだ。

美しい秘書官は、仕事に集中する皇帝の額にそっと手を置いて、愛しそうに見つめていた。シンカは黙つて、されるまことに任せている。滞りなくネットワーク上の会議を済ませると、シンカは秘書官に夕食の手配を頼んだ。まだ少し調子が悪そうだ。

「シャワー浴びてから、もううかる。」

そう言って、シンカはバスルームに入ろうとする。自分の体の様子を確認したかった。時間がたつてゐるため、既に傷はないだろうが。内臓に負つた怪我を、触診で確認しておきたい。

「陛下、なにがあつたのか、教えてはいただけませんか？ドクターは呼ばなくてよろしいのですか？」

「コージン。」

「教えていただけないのでしたら、あのエドアス・ゲーリントン教授に、お聞きしますが。」

コージンは、教授の置いていつた小さな名刺を示して見せた。

「私の記憶では、彼は、惑星リコードにおられましたね。そのことで何か、あつたのですか。」

「！」

そうだった、コージンはシンカについて調べ尽くしているのだ。レクトが、尋常でないといつていて。そつか、俺の知らないことも、知つてゐるんだ。

シンカは再びリビングのソファーに戻り、コージンに隣に座るよう

促した。

「ユージン、俺は、ゲーリントンがリュードにいたことを知らなかつたんだ。あいつについて、知つてることがあつたら教えて欲しい。」

「はい。」

秘書官は嬉しそうだ。

「陛下、惑星リュードのティイラ研究所で勤務した研究員は、陛下が生まれてから十七年間で総勢二十名おりました。ゲーリントン教授は、軍務官が当時のリュードを含む星域の大佐として就任していた時期に、配属されました。一人は、同じリドラー人でしたが、どうも仲がよくなかったようです。ゲーリントン教授は、強引な性格で、研究所では主任研究員でしたが、積極的に陛下を研究しようとして、周りの抵抗にあつたようです。当時は、陛下を生み出した研究 자체が倫理的に問題視されていましたので、踏み入った研究は控えられていたのです。」

「そう。」

首を傾げて、じっと見つめる皇帝に、ユージンは不思議そうに笑みを返す。

「覚えていらっしゃらないのですね。」

「ああ。だいたい、俺は十七まで、研究所があることすら知らなかつたから。」

「そうでしたか。ゲーリントン教授は、そこで、何か事件を起したようです。詳しくは、分かりませんでした。ただ、それが原因で、左遷のような形でセトアイラスに戻ったのです。」

「研究員は、俺が皇帝になつたときに緘口令が敷かれたつて聞いたんだけど。」

「はい。でも、陛下。実際は、ゲーリントン教授以外は、全員、亡くなつております。」

「…なんで？」

そんなはずはない、シンカは地球の帝国研究所で彼らに会っている。シンカに医学を教えたのも彼らだ。

ゴージンは続ける。

「陛下。ゲーリントン教授は、カストロワ大公のいわゆる「コレクション」の一人ですから、処分できなかつたのだと思います。」

「処分…。」

帝国の情報部が動いたのか。表向きは、死んだことになつてゐるか。レクトは、なにも言つていなかつた。

「軍務官が、陛下にお話なさらないのは、陛下がご存じないほうが多いと、判断なされたからです。」

「分かつてゐる。ゲーリントンはそのこと、知つてゐるのかな。」

「ご存知ないと思いますよ。彼は、デイラの研究所では孤立していましたので、セトアイラスに戻つてからも、当時の同僚と連絡をとつてゐるとは思えません。」

「…・・・そうか。」

「陛下？ 彼が、何をしたのですか。」

「…・・俺を研究材料にしたいそ�だ。協力しないと、今回の研修、単位を出さないって。担当教授なんだ。」

ゴージンは、ため息をつくシンカの肩に、そつと手を添える。

「教授の、申し出に承諾なさつたのですか？」

「…・・ああ。轢かれるなんて思わなかつたから。気が動転していたんだ、多分。採血程度だつて、言つてたし。様子を見てから対処法を考えてもよかつた。下手に抵抗なんかするんじゃなかつたよ。そしたら、こんな怪我しなくてすんだ。俺も、自分の子供の頃を知られてるつて分かつて、慌ててしまつた。馬鹿だな。」

「陛下！ 車で、ですか！？」

真剣な表情の秘書官に肩をゆすられ、シンカは顔をゆがめた。

「痛いよ。俺も、どこがどうなってるか分からないんだ。多分、打撲とか、そんなどと思うんだけど。」

ゴージンがそっと、抱きしめた。

「なんてことを。陛下、どうかドクターを呼ぶことを許してください。」

「無駄だからいいんだよ。もう傷はふさがっているし、もともと俺には治療なんかできない。痛み止めすら使えないんだ。丈夫な体質つてのも不便なんだな。」

前髪をかきあげ、青年は少し笑った。

秘書官が涙をふいた。

「私は、何もできないのですね。」

その長いまづげに、涙をためる姿は、ひどく美しかった。心配してくれる、その気持ちはうれしかった。

「俺のこと、知つてくれて助かったよ。ありがとう。」

微笑むシンカの蒼い瞳を真つ直ぐ見つめ、ゴージンはそっと口づけた。

皇帝は拒まなかつた。熱のある体に、ゴージンの唇が心地よかつた。ゴージンの白い手がシンカの頬を包んだ。

若き皇帝の甘い香りが心を満たす。この上なく幸せな気分になる。

翌日、シンカはいつもどおり病院に出勤した。

午前中は、第一診療科での勉強会だ。研究医の発表する症例や手技について、検討して意見を交換するのだ。いずれ、シンカやケイナも壇上で発表しなくてはならない。

ドクター・ローデスが、腫瘍の免疫療法に必要な、樹状細胞培養に必要な技術について、詳細に発表した。

シンカはいくつか質問し、かなり勉強になった。

ケイナも負けずに自分の知識を披露しようとしたが、それは、その場を少ししらけさせた。彼女の論説は正しいのかもしねいが、誰かの論文や教科書から受け売りに近く、実務をこなしている研究医には物足りなかつたのだ。

「ファルム、今日の夕方、私の研究室において。」

勉強会を終えて病室に戻ろうとするシンカに、ゲーリントンが声をかけた。

ケイナの嫉妬の視線を受けながらシンカはうなずいた。

「教授に気に入られているのね。」

ケイナは研修医の部屋でコーヒーを飲むシンカに、声をかけてきた。

「そうでもないよ。」短く答えて、また手元のスクリーンに視線を戻した。シンカはアイリスの病状について医学書で調べていたのだ。

「あの女の子のこと、調べてるの？」

「ああ。好中球数が100マイクロリットルを切っているんだ。ドクター・ローデスに課題を出されていて。」

「ふうん。私は昨日の勤務で脳腫瘍患者の樹状細胞療法をさせてもらつたのよ。」

「そり。がんばってるね。」

自慢げに話すケイナに笑いかけて、再び「コーヒーを口元に運ぶ。

アイリスの容態はよくなかった。敗血症が始まつていて、昨日から集中治療室だといつ。今はこの状態の彼女を救う手立ては確立されていない。

可能性のあるいくつかの方法があるが、幼い彼女のウイルスは変異を早め、つまり、急速に悪化している。

シンカはゲーリントン教授が発表した、コニイラの成分を使用した臨床実験の報告を読んでいた。コニイラの成分、コニイラ因子と呼ばれるそれが、ウイルス性の免疫不全に効果があるという研究結果だ。

だが、今はまだコニイラ因子は手に入らない。それは、コニイラ自体を栽培できていないからだ。

シンカが皇帝になった年、レクトがコニイラ栽培所のすべてを破壊した。それは、理由あってのことだったが、やはり残念な気はする。今や惑星リュード内でも、ほとんど栽培不可能なほど、野生のコニイラも減ってしまっている。

研究用にどうやって入手しているのか不思議なくらいだ。

だからこそ、ゲーリントンは、シンカの体内のコニイラを欲しがるのだろう。

それはシンカが生きている限り、体内で作られづける。

しかも、植物由来のものより人体への副作用がないのだそうだ。

白血球内にあるそれは、今はミンクのためだけに経口投与できるよう精製されている。それはアイリスには役に立たないのだろうか。十分な臨床試験を経ていないため、もちろん、使用できる可能性は低い。だからまず、アイリスの体内のウイルスを培養し、そこに投

「与して確認したかった。培養ははじめばかりで、まだ結果が出ない。

「大丈夫ですか。」

アイリスの母親は憔悴した様子で、集中治療室の家族用の控え室で座っていた。

「やはり、だめなんでしょうか。私が、感染したためにあの子がこんな、ひどい目にあうなんて」

アイリスは、母親の胎内にいる間に感染したのだ。母親はまだ発病していない。

「すみません。僕も経験が浅くて、こんなとき何て言つて慰めていいのか分かりません。でも、アイリスはお母さんのこと大好きだつていつも言つっていました。」

まだ、若いアイリスの母親は、研究生の青年を見つめた。やさしげな青年はアイリスが「くまのお兄ちゃん」と呼んで懐いていた。

「できるだけのことは、させてもらいます。」

「お願ひします。あの子、あなたのこととても気に入つていて、だから、最期まで看取つていただけますか。」

「はい。」

シンカの黒い瞳が、哀しげに微笑んだ。

セトアイラスの薄緑の空が黄色く夕日に染まるのを見ながら、シンカはゲーリントンのコンイラ研究所にきていた。研究室まで行くと、一緒に来るよう指示されたのだ。

ゲーリントンの車に乗るのは少しためらわれたが、「怖いのか」と馬鹿にしたように笑われれば我慢するしかない。

研究所はセトアイラス市の中心からシンカたちのいる公邸とは反対側の郊外にあり、リドラ星基準のコロニー内に作られていた。ゲーリントン自身がリドラ星人でもあるし、リドラ星の大気組成はコン

イラ発生地である惑星リュードに似ていた。研究所には丁度いいのだろう。

惑星リードラはかつて太陽帝国が滅ぼしてしまった惑星だった。そのために特殊な大気組成で生きているリードラ人は移民となり、各惑星に設置されたリードラ人のためのコロニーに住んでいる。

それ以外の場所では小型のマスクを装着し、彼らの肺を地球基準の標準大気から守っているのだ。

研究所は広い敷地内に四角い建物を三棟持ち、規模の大きなものだつた。そのうち一棟はウンイラ栽培のための施設のようだ。実質的な研究や検査・試験が行われるのは真中の一棟で、シンカはそこに連れて行かれた。

今は医療器具の並ぶ試験室の人一人が寝られる大きさの実験台上に、座っていた。

窓からの夕日は特殊ガラスで遮られているがかすかに赤みが強くなつているのを思わせた。

ゲーリントンが助手たちに見せるためにカラーレンズを外させたため、今シンカの瞳は特殊な蒼をたたえている。

昨日の怪我の様子を見るためだろう、体温を測つたり血圧を測つたりして、簡単な診察を受けた。

「さて、シンカ。申し訳ないが、採血させてもらひつよ。」「はい。」

褐色の肌のゲーリントンが採血管に針を取り付け、シンカの腕に注射し固定した。採血管はそのまま機械に繋がれ、静かにゅつくりとその機械は動いている。血液が、管を通つて流れしていく。

座つたまま、シンカはそれを見つめていた。

シンカの血液は人間のそれとは違うため、特別な処理を施している

ところ。

機嫌のよい時のゲーリントンはひどくまともな人間に見える。昨日の奇行が嘘のようだ。シンカはしつかり読み込んだ彼の研究論文を思い出した。

「アイリスに僕の血液製剤は、使えると思いますか？」

シンカは、思い切って聞いてみた。天才と呼ばれる教授の論文については、シンカも認めるところがあった。性格に難点はあるが研究者としては一流だ。

「製剤を作っているのか？それは初めて聞いたよ。」

「デイラの、住民のために、少しだけ作らせているから。」

「アイリスはもう末期だろう。今から使用して、体力が持つかどうか。実際に、植物由来のものでは、好中球が三百以下では、効果はなかった。君のウンイラ因子は好酸球にあるから、上手く輸血できれば違うかもしれない。だが、はじめての試験になる。結果は保証できない。」

「やはり、だめですか。」

真剣に見つめるシンカ。ゲーリントンは、細い眉をピクリとさせ、笑った。

「私としては興味はあるね。やつてみなさい。製剤はすぐにでも作ろう。」

「はい。」

「少し、採血が多くなるが、かまわないかな？」

「はい。」

促されてシンカは診察台に横たわった。

どれくらい抜かれているのか分からなかつたが、少しだるくなつてきていた。昨日の怪我で出血していたからか。

機械の規則正しい動きを見つめているうちに、シンカは眠つてしま

つ
た。

気付いたときには小さな病室のようないじりにいた。

窓から見える景色は夜で、室内の足元の明かりだけがぼんやりと黄色く床を照らす。

ベッドから起きだして、シンカはその部屋を出た。廊下も既に暗く静まり返っていた。

廊下の先、一つだけ明かりの漏れる部屋があった。

「ああ、シンカ。気がついたかな。昨日の件もあるし、貧血になつていただけで起さずに眠らせておいたんだ。もつ、大丈夫か？」

そこは教授の部屋のようだ。それほど広くないが、パーテーションの向こうには応接セット、部屋の片面にはライブラリーだろう、フイルムやデータ、書籍なども並んでいた。資料の棚に囲まれた中、不思議と整然とした机で教授はコンピューターに向かっている。やりかけの作業を惜しむように、ちらちらと一回ほどシンカを見上げ、その内ホログラムスクリーンを閉じた。

手招きするので、少し警戒しながら近づく。

医師がするよつてシンカの目を確かめ、貧血の度合いを見ている。

「すみません。僕、もう帰らないと。アイリスの容態も気になるし、今彼女のウイルスの培養をしているんです。それがあれば、製剤との相性も確認できます。」

「じゃあ、送るつ。ちょうど仕事も片付いたところだ」

教授は穏やかに笑うと白衣の上に黒い上質なコートを羽織つて、傍らに置いてあつた小さな銀色のケースをシンカに手渡した。

保冷機能付の医療用ケース。表にはバイオハザードマークが示され

ている。

「あけてみたまえ」
言われてシンカが中を確認すると、冷蔵された彼の血漿と白血球、
そして、それを分離抽出した顆粒球が小さな試験管にしまわれていた。
試験管には、皆、『c1 - yunilia』のコードがつけられて
いた。これが、シンカの体内のコンイラ因子を表現する、正式なコ
ードだった。

病院に戻るとすぐに、シンカは宿直のケイナ・ドマネスを探した。
アイリスの様子を確認するためだ。しかし、彼女の姿はなかつた。
そのまま、教授とともに集中治療室に向かう。

そこは、今、まさに戦場のようだつた。ドマネスの張り詰めた声、
指示を受ける看護師が酸素飽和度の急激な低下と、心停止を訴えた。
シンカはコートを脱いで医療用エプロンをつけると、エアカーテン
をくぐる。その後から教授が続いた。

「教授！」
「アイリス！」
シンカはコートを脱いで医療用エプロンをつけると、エアカーテン
をくぐる。その後から教授が続いた。

「教授！」
「状況は！」
ゲーリントンの姿を見つけ看護師の一人がほつとしたように言った。
教授も急いで準備をしながら、看護師に確認する。

「状況は！」
既に心臓マッサージと助細動装置を交互に繰り返しながら、ケイナ・
ドマネスが悲壮な表情で一人を見上げた。

「二十分前に血圧低下、意識混濁。私が駆けつけたときには、心停
止状態でした。先ほどいたん持ち直したのですが。」
「僕が。」

シンカが心臓マッサージをする。アイリスの細い小さな体が痛々し

い。この作業は力が要るため、ドマネスは疲労の色が濃かった。教授が投薬の指示をし再び助細動装置を当てて、何とか心音の確認が取れた。

血圧上昇、酸素飽和度も改善された。

ここからが難しいところだ。原因を取り除かねばまたすぐに同じことになる。敗血症からの心臓麻痺のようだ。すぐに輸血がはじめられる。

「教授、それは。」

シンカが気付くと、ゲーリントンは銀色のケースから『c1 - yu n - o - l - a』を取り出すところだった。

「今、使わなくてどうする。」

教授は輸血管に、その透明な液体を数滴注入した。

シンカが止める暇はなかつた。

見る見るうちにアイリスの青ざめた頬に赤味が差した。

「血圧上昇、百十の九十六です！」

看護師が声をあげた。

「酸素飽和度六十五、体温が三十九度。」

「ユンイラは、敗血症を起している原因菌を攻撃する。ただし、CD4陽性T細胞数が、100マイクロリットル以上でないと、効果は見られなかつたが。」

アイリスのその細胞数はすでに50マイクロリットルをきつっていた。末期なのだ。発熱しているということは、ユンイラが働いていることと受け取れる。しかし。

「教授、心拍数が。」

この状態では体力が持たない。

「体温四十一度！」

心拍数、血圧、読み上げる看護師の声が、遠く感じる。

シンカは何もできず、ただ少女の小さな手をにぎっていた。ユンイラの反応で肌やまぶたは今にも目覚めそうなほど生き生きとして見えた。それが、命の最期の灯火を懸命に燃やしているようで、目をそらしてはいけないとシンカは自分に言い聞かせる。

シンカだけではない、その場の誰もが見守るしかなかつた。ユンイラの製剤は使用経験がない。唯一教授だけが何が起こっているのかを理解しているようだ。教授の指示がないと、誰も何もできない。

計器を読み上げる看護師以外、もてあました医師たちはただ教授の指示を待つていた。これでは……まるで実験。

シンカはアイリスの白い顔を見つめていた。

「アイリス、アイリス。
声をかける。

かすかに、まぶたが揺れる。小さな瞳がつっすらとシンカのほうを見つめたようだつた。

心停止の警報が響いていた。

誰かに肩をたたかれ、シンカは我に返つた。

「お前が宣言しろ。
ゲーリントン教授だつた。

シンカはアイリスの瞳孔と頸動脈を確認して、宣言した。

「午前二時二分。死亡を確認しました。」

同時に看護師たちが何事もなかつたかのようだに片付けはじめた。いや、先ほどまでの必死な思いを職務という殻に少しづつしまいこむ。看護師たちにとつて片付けるところとはそういう意味を持つ儀式のようだった。

カルテにサインを求められ、ぼんやりしたままシンカは記入する。研究生なのでそのサインの下に、教授も一筆添えた。

「ルー、解剖の許可をお前もらつて来い。」「！」

シンカはゲーリントンを見上げた。

今、幼い我が子をなくしたばかりの若い母親に、その同意を求めなくてはならない。つらい役目だ。ちらちらと様子を伺う周囲の視線を感じる。気遣う気配を感じたが、「はい」とシンカは黒い瞳を真っ直ぐ教授に向け、強い意思をつかがわせる表情でうなずいた。教授は少し期待はずれだったようで、驚いたように青年を見つめた。ゲーリントンはわざとつらい役目をシンカに言い渡したのだ。

ゲーリントンはシンカが泣くのではないかと思つていた。もつと、取り乱すのではないかと。初めて入れ込んだ患者が亡くなつた時はどんな研究生も取り乱す。特に、この病院は患者との交流に力を入れているため、その光景は目にする機会が多い。しかし、シンカは今まで彼が見てきた誰よりもしっかりと彼の目を見つめ返した。

シンカは治療室の前に立ちつくしていた母親に声をかけた。すでに目を赤くしている母親。痩せた肩がかすかに震える。

「力が、及びませんでした。すみません。」

シンカは深く頭を下げた。

母親は静かに泣き崩れた。その手には、あのくまのぬいぐるみがあった。

シンカは同じように床に膝をつき、母親の肩にそっと手を当てて支えた。零れ落ちる涙が支える手にポツとあたる。

母親が涙を浮かべたまま、シンカに言った。

「ありがとうございました。」

シンカは手にしていた書類を、そっと、母親の前に差し出した。

「これは……」

一つ大きく息を吸つて、シンカは説明する。

研究のために、アイリスの解剖を承諾して欲しい、と。

母親の目が大きく開かれる。

「あの子は、……あの子はあなたのことが大好きでした。」

「すみません。こんな、お願いを、して。」

「謝らないでください。どんな、別の方をしても、あなたはあの子に出来つたことを後悔しない、幸せだったと思つてくださっているでしょ?」

「はい。」

見上げるシンカを母親はじつと見つめていた。それから震える手で、書類にサインした。

「あの子が、どれだけ一生懸命病気と闘つたのか、あなたの目で確かめてあげてください。がんばったねって、言つてあげて。」

そこまで言つと母親は泣き崩れた。

シンカは何も言えず、ただ彼女の肩に手を置いていた。

そこに女性の看護師が来て「アイリスに会えますよ。」と告げ、母親を支えながら連れて行つた。

見送りながらシンカはそつと涙をふいた。

翌日は一日中免疫治療科で、患者の世話をしたりアイリスの解剖結果をまとめたりして、忙しくすごした。時折アイリスのいた病室の前で、初めて彼女に出会ったときのように振り向く。あの、大きな瞳を思い出す。

立ち尽くすシンカの脇を入院患者の子供たちが走り抜けた。

その表情は、あのいつもの人懐こい笑顔になつてゐる。

「うーん、ちがうんだ! 逃げろ! 」

男の子がさらに喜ぶ。

子どもらを見送つて、手にしたカルテを看護室に戻そうとしきびすを返す。一周してきた子供たちがシンカに抱きついた。

お前たちには!

笑いながら一人を抱き上げると、いたずら小僧の手を引いて病室へと向かう。

その姿を看護師たちが笑つてみている。看護師たちはシンカの表情が、既にたくさんの方を見送つてきたベテランの医師のように、命に対するやさしさであふれていることを感じ取っていた。ともすると若い研究生は自分の経験や研究に気を取られがちで、評価されないことはしたがらない。

こんなふうに患者と接することができるのは、稀な素質といつてい のだ。

だから「大学も出ていない田舎もの」のルーは看護師と患者に人気があつた。

6・力があるとこりと

「ルー、今日の処置は完璧だった。よかつたわよ。」

カフェで遅い昼食を取るシンカに、ドクター・マクマスが話し掛けってきた。もう食べ終わつたようで、女医はコーヒーのカップだけを持つてシンカの隣に座つた。

四十代のマクマスは少しほつちやりしているが肌つやはよく、精力的に仕事をこなす姿は雄雄しいくらいだ。小柄なのに存在感が大きい。シンカはこの内科医を尊敬していた。

「ありがとうございます。」

「ねえ、そんなに食べて大丈夫？」

マクマスはシンカがほお張るサンドウィッチと、さりにトレーにある空の皿を見ながら呆れ顔だ。

「」の間ミオにも言われました。」

苦笑いするシンカ。

「僕、もう少し身長欲しいんです。あまり忙しく仕事をすると成長が止まるなんて、医者に言われたので。できるだけ栄養とつて、もつと大きくなりたいんです。」

「今、いくつあるの？」

「百七十五センチです。田標は百九十なんだ。」

微笑む青年の黒い瞳。

マクマスは、つぐづぐ自分の年齢を感じずにはいられない。

「今でも十分だと思うけど。百九十は、多分無理だと思うわよ。」

「だめなんです。僕の友人、年上が多いんですけど、みんな僕よりずっと大きいんです。そうすると、いつも僕だけ子供みたいでいや

だから。ただでさえ童顔でよく十六、七に見られるんだ。」

「やっぱり十代の男の子ねえ。」

くすくす笑う女性に、シンカは少し照れて反論する。

「でも、ドクター、体格の差はそのまま、力の差になっちゃう世界もあるし。」シンカの言つのは格闘技の世界のことだ。マクマスに通じる話ではないが、女医は笑つて流した。

「はいはい。食べなさい。それだけ食べれるなら、心配ないわね。」

心配してくれていたのだ。

アイリスを、亡くしたばかりだから。

「大丈夫です。僕より、ゲーリントン教授は大丈夫なんですか？」

皿に視線を落とすシンカにマクマスは溜息で応える。

「彼はいいのよ。コンイラをまだ認可されていない処方で試したのも、彼は承知でやつてる。あの場にいた看護師たちもシンカが止めるのを聞かずに教授が行つたと、証言しているの。まあ、今回の患者さんは起訴することはないようだから大丈夫だけれど、院内の倫理委員会は動き出しているわ。ルー、あなたも事情を聞かれることがあると思うわ。」

「はい。あの、あの時使つたコンイラについて、教授は何て言つているんですか？」

「入手ルートの公表は拒んでいるわ。あれがどんなものであるかは、学長たち上の人には知つているみたいよ。」

「そうですか。」

「君は知つているの？ゲーリントンと一緒に彼の研究所に行つていったそうね。」

「

「いえ、知りません。」

苦しげに頭を伏せる青年に、マクマスは強い視線を送る。知っているのね。そう、確信している表情だ。

その頃、エドアス・ゲーリントンは慣れた様子で、政府庁舎の最上階に降り立つた。

エレベーターのエントランスから、いつもの馴染みの秘書に手を上げて挨拶すると、カストロワの執務室に入していく。その表情は不敵に微笑んでいる。

迎え入れたカストロワは、不機嫌だった。

「『U1 - yuniline』を使ったそうだな。お前が、皇帝を過去に研究したことがあるのは知っていたが、なぜ皇帝の血液製剤を持つているのだ。まさか、当時のデイラ研究所から持ち出したわけでもあるまい。」

執務室の机で書類を前にしたまま、大公は若い教授を見つめた。

ゲーリントンは、纖細とも取れる姿勢に神経質な笑みを浮かべた。

「大公、お分かりでしょ。私がデアストルの正体に気付かないはずはありません。皇帝陛下、あのデアストルが協力を願い出てくれましてね。少々、血液をいただいたまでです。太陽帝国皇帝からの申し出を断るわけには行きませんからね」

「それを患者に使えと、陛下が命じられたとは思えないが？」

「彼はあの患者に入れ込んでいましたのでね。研究者としてはまた

「ない機会です。試してみる価値はありました」不敵な笑みを浮かべたままゲーリントンは悪びれない。

「現在、太陽帝国では、植物由来以外のコンイラの成分を採取すること、また、皇帝陛下のDNAを含む物質を入手すること、いかなる目的の研究にも使用することを禁じられている。分かつていてやつたのか？」

「ご本人が、そうしたいとおっしゃったのです。」

「ゲーリントン。」

金色の不思議な光を放つ瞳で、カストロワは自分の年齢の四分の一程度しか生きていかない教授を見つめた。

「大公。大丈夫ですよ。私は必ず研究を成功させて見せます。」

大公と学長だけが知っている皇帝陛下のセトアイラスでの活動を公表するわけにも行かず、つまりは倫理委員会がどう動こうが、あのコンイラの出所を突き止めることはできない。それを分かつていての行動なのだろう。

あまりにゲーリントンがエスカレートするよつなら、処分すればいい。

大公は百十数年生きて生きた中で、こういった人間を何人も見てきた。学者にはありがちだ。倫理観は欠如している。行動が予想できるだけに面白みにかける存在だ。

唯一、こういうコレクションをほめるとすれば、決して逆らわないことだ。言いつけたことは守る。

これが、カツツェならこちらが口出しすることなどできないほど、完璧な生き方をする。レクトもそうだ。しかし、あの二人の腹の中は分からぬ。それがまた、面白い。表向きもそう簡単には言うこ

とを聞かないレクトなどは、噛み付いてみたり寄り添つてみたり、飽きない存在だ。

大公は座っていた椅子を窓がわに向けると、体重をかけた。

ゲーリントンは黙つて立つたまま、その薄い縁が勝つた肌の横顔を見つめていた。

「コレクションにもいろいろある。」

「はい?」

「私のコレクションにどんなものがいるのか、お前は知つているか。」

「はい。現在の太陽帝国大臣十二名のうち八名までが大公のコレクションです。他の惑星政府内にも多くの地位の高い人物をお持ちだと思いますが。」

「ふん。私が今欲しいのは、金色の髪の蒼い瞳のあれだ。」

「! それは、お気持ちが分からぬではありませんが。」

ゲーリントンは内心驚きつつ、言った。別に皇帝に肩入れするわけではないが、この大公の勢力に、皇帝の勢力が取り込まれてしまえば、この宇宙はこのセダ星人の思うがままだ。

それが自分にとつてどう転ぶかは分からぬが、あまりいいことのようには思えなかつた。その上、もしコレクションにシンガが入つてしまえば、下手に手出しできなくなる。いや、逆に、いいのかもしない。

今はかなり危ない橋を渡つてゐる。ちょうど非公式な旅行中で、しかも期間限定の研修中だからこそ、あれも言つことを聞いてゐるのだ。もし大公のコレクションともなれば、上手く大公を丸め込んで、研修が終わつてからも皇帝の専属医師のような形で研究を続けられるかもしれない。

「ゲーリントン、お前に協力して欲しいのだ」

「はい」

教授は細い眉をピクリと動かし、口元に薄い笑みを浮かべた。

「なんなりと」

その日、シンカは久しぶりに落ち着いた夕食を取ることができた。コーディンと二人きりというのはいつもどおりだが、先日の件以来、コーディンは落ち着いているように見えた。

交わしたのは口付けだけだったが、それで彼女は満足しているのかかもしれない。

食後の紅茶でデザートのクッキーを流し込みながら、シンカはネットワークのニュースを見ている。くつろいだ気分で少し眠くなる。

「陛下、今夜は重要な業務もございませんので、どうか、早めにお休みになつてくださいね。お顔の色が優れないようになります。」「うん。少し、貧血気味なんだと思つ。」

「ゲーリントン教授ですか。」

シンカは眠い目をこすつとうなずいた。教授はアイリスがなくなつたあの日以来、ほぼ毎日、時間を見つけてはシンカの血液を採取していた。

正確な量は分からないうが、採血管の太さと機械の動きで、シンカは想像がついた。約400ミリリットルくらい。しかし毎日では貧血になる。わかつているが逆らえないのでいる。

「大丈夫、明日はオフだし、まさか、この間のように呼び出したりしないと思うよ。」

「はい。『無理なそらな』でください。」

シンカは気付いた。亜麻色の髪をきれいに結い上げた、美しい彼女は泣いている。

「？コーディン、どうした。」

「いえ、何でもありません。ただ、心配で。」

空のカップをトレーに乗せ、下がる口とするコーディンを引き止めた。

「大丈夫なのか？俺は、あなたのほうが心配だよ。顔色悪いし。」

手をつないだ状態が彼女の頬を赤くする。微笑んで手を離すと、シンカは秘書官の肩に手を置いた。

「ちゃんと寝ているのか？俺は留守がちだから、あなたが昼間休んでいるのか心配なんだ。以前から働きすぎなんだ。せっかく、ブループールを出ているんだから、自由にしていいんだ。休暇だと思ってくれてもいいよ。俺も病院になれてきたし、今まで以上に自分で業務管理できるから。」

「でも、陛下、陛下のおそばにいることが幸せなんです。」

「じゃあ、俺がいない時間は休暇だ。決めた。仕事するなよ。」

愛嬌のある笑顔で見つめられると、コーディンの胸は躍る。コーディンが頼りにしていたアシラ文政官から話があった。こんなにやさしいのに陛下は、春には秘書官全員を解任するという。切なくて涙がこぼれる。

解任の話が出たあの日以来、秘書官はあまり眠れなかつた。どうせならと、仕事をする日もあつた。シンカが宿直で帰らない夜は一晩中泣いていたこともある。

眠れないせいか一日中ぼんやりして、若い皇帝のことを考えていることも多い。こんな状態ではいけないと考えれば考えるほど眠れなくなる。

そんな時、陛下が怪我をして帰ってきた。

恐ろしく感じた。陛下をあの冷酷そうな教授の下に送り出す毎日が嫌でたまらなくなっていた。

「泣くなよ。」

「陛下、お願いです。ずっと、秘書官でいさせてください。」

うつむいて涙をこぼす秘書官に、シンカは返す言葉がなかった。

震える肩に手を置いて、そっと抱きしめた。

美しい秘書官がこれほど自分のことを思ってくれているのに、それでも彼女の思いに答えることができない。切ないのはシンカも同じだった。

「陛下、お願いです。」

「ユージン。あなたが俺のこと調べたりするから、だから……」

「それが、いけなかつたのですか？私はただ、仕事のために多くを知るべきと考えたのに。先日、知つてくれてありがとうとおつしやつたではないですか！」

「！それは確かに、嬉しかつたよ。」

シンカは苦しげに目を伏せる。

「だけどユージン。俺はあなたがどれくらい、何を知つているのかは分からぬけど、情報部も動いているんだ。あなたを逮捕させるような真似はしたくないんだ。」

「陛下。いつか私の望む部署にとおつしやつてくださいました。」

何かを思いついたように、年上の美しい秘書官は、シンカを見つめた。

「私を、情報部に配属してください。そして、陛下のおそばに秘書官として、置いてください。私が情報部の方と同じ軍部の規律を守ることができれば私が何を知つっていてもよいのですよね？」

すぐるコーディンの視線に、シンカは哀しそうに見つめ返す。

「それでも、コーディン。俺は、あなたの気持ちには応えられないし、だから、そばにいてはいけないと思つ。」

音もなくシンカの頬に痛みが走る。

シンカは手を添えることも、秘書室をにじりむこともしない。

それが、さらにコーディンの怒りを搔き立てる。逸らされたままの青年の顔に、やうに手を上げようとする。

シンカの大きな瞳が潤んでいるのに気付く、コーディンは上げた手を下ろした。

こちらを見たシンカの表情は、哀しく美しく、コーディンの胸をえぐつた。

コーディンはもう、何もいえなくなつた。

「コーディンー」

部屋を飛び出し、血腫にこもつてしまつた秘書室に、シンカは大きくため息をついた。

その閉じられた扉の前で座り込む。

「……どうしたらいいのか、わかんねえ」

つぶやきは、足元のやわらかなじゅうたんに吸い込まれていった。

翌朝、シンカが目を覚ましたとき、コーディンの姿はなかつた。

出かけたのだろうか。

警護のものに確認するが彼らは知らないといつ。

「あんまり、女を泣かすもんじゃないですか。」

一人に言われた。

「そういう関係じゃない。」

「ロートシルトさんは、素晴らしい気のつく女性だ。俺は、あんないい女見たことないね。おっと、失礼しました。」

睨むシンカに、ミストレイアから派遣された警備員は人の悪い薄ら笑いを浮かべた。

ほとんどここにいないシンカは、何日かおきに交替で来る彼らの顔を覚えていなかつた。その間コーポレートがいろいろと配慮したのだろう。

俺のことも、少しばらわさしたのかもしれない。

俺が悪者でもそれはそれで仕方ない。

シンカは珍しく苛立ちながら、一人でリビングに戻つた。

ソファーに仰向けに横たわり、天井を睨んでいる。

メイドが恐る恐る声をかけてきた。

「あの、『朝食は、こちらでお召し上がりになりますか？』

まだ、若いそのメイドは少しおおどりしている。いつもは間に入ってくれるコーポレートがいないためだ。

起き上がつたシンカは、小さくため息をついて、微笑んだ。

「すまない。あまり、食欲がないんだ。飲み物だけ、執務室に頼むよ。」

青年の微笑みにほつとしたのかメイドは少し照れながら、はいと、透き通つた返事をした。

昨日用意されたらしい、コーポレートのメモを確認し午前中の執務を終えると、シンカはコーポレートの携帯電話に電話してみる。

今、どこにいるのだろ？
しかし返事はない。

ためらわれたが、彼女の部屋に入つてみた。

そこはきれいに片付けられていて、人がいた気配がないほどだ。
クローゼットに服の一枚もない。小さなテーブルに、あの、シンカ
から取り上げた携帯電話がおかれていった。
シンカは途方にくれた。

今夜シキの誕生パーティーをここで開く予定だ。その手はずを彼女
が整えていた。なのに、肝心の彼女がいないと、どうしていいのか
皆田見当もつかない。

朝から何度もかけたか分からぬ電話に再びかけてみる。
やはり返事はなかつた。

メッセージを残そうとするのだが、なんといつていいのか、分から
なかつた。

帰ってきて欲しい、というのは容易いが、仕事があるからとも言
うのか？昨日休暇をとれといったばかりだ。それではずいぶん勝手
じゃないか。シンカは、コージンの寒寒とした部屋のソファーに腰
掛ける。

横になつてみる。

休暇、か。そう思つていればいいのか。

メッセージを、残してみようか。

「コーディン。ルード。今、どこにいるんだ？連絡して欲しい。一人でゆっくり考えたいなら自由にしてくれていいけれど、黙つて出て行かれると心配なんだ。声を聞かせて欲しいよ。」

もつ少し、待つてみよう。

その時テーブルの電話が鳴った。

どきりとしながらスイッチに触れると、ホログラムが投影される。シンカの執務室のものと違つてコーディンの部屋のスクリーンは小さい。

期待する秘書官ではなかつた。

「シキ」

「おう、なんだ、珍しいな。お前が電話に出来るなんてや」

シキはあの豪快な笑いかたで笑つた。

「お前、お預け食らつた野良犬みたいな顔してんや。」

そう言えれば朝から慌てていて、服装も髪型も何も気にしていなかつた。

「そんなんに笑うなよ。俺、落ち込んでんだから。」

シキには、思つたとおりに話せる気がする。

「おう、今日のパーティー、ルアーノホテルに六時だつたよな。コーディンが急にそこでできなくなつたつて言つていたけど、どうしたんだ？なんか、あつたのか？」

「...コーディンから、連絡あつたのか？」

驚いてスクリーンに近づく青年に、シキのまづが驚く。

「今朝早くな。なんだ、お前、聞いていないのか？」

「コーディン、なんか言つてた？」

シンカの表情をどう取つたのか、シキはそこで厳しい表情になつた。

「お前、もつ少し彼女のこと考えてやれよ。全部、任せっきりだつただろう。負担大きいぞ、きっと。」

「そうかも、ね。だから出て行つちやつたのかな。」

青年はため息とともに目を伏せた。理由はわかってる。

「そうか。」

「……今朝早く出たまま、帰らないんだ。連絡取れないし。」

「まあ、今夜は来るだろう。きっと、彼女のことだ、きっと手配はされているはずだ。気にするな。」

「ああ。分かつて。『ごめん。シキ。せつかくの誕生日だつて言つのに、心配かけて。』」

シキはコーディンが出て行つたつて聞いても、驚かないんだな。違和感がある。

「まあ、人間、たまには一人で考えたいときもあるだ。それより、シンカ、あのワイン忘れずもつてこいよ。」

シキは何か知つているのだろうか。コーディンの居場所も知つているのかもしれない。

その黒い瞳を見つめる。

「……なんだよ？」

怪訝そうに睨み返すシキ。

子供が生まれて地球の勤務に代わってから、すっかり落ち着いた感じになった。自称色男は切れ長の瞳、彫りの深い顔立ちで相変わらずかっこいい。豪快に笑う大きな口、ワイルドな感じの黒髪。浅黒い肌がシンカには憧れだ。

シンカがまだ、惑星リュードで、じく普通の少年として生きていた頃から、助けてくれた。彼がいなかつたらきっと、今の俺はいない。人間らしくない俺のこと、いつも、信じてくれてた。

「おい、シンカ？ なんとかいえよ。」

「ああ、ごめん。六時だったね。ワイン、必ず持つていくからさ。また一つ、シキがおっさんに近づく日だ。盛大に祝つてやるよ。」

につこり笑う皇帝に、シキは笑つて怒る。

「可愛くないな、お前は！」

笑いながらシンカは、アイリスの言葉を思い出していた。

くまのルーみたいに、ルー兄さんがアイリスのこと治してくれるといいのに、そう言った彼女に俺は何もしてやれなかつた。

あまりに力が足りない。

シキとの通話を終えてスクリーンが真っ暗になつても、シンカは顔に笑顔を貼り付けていた。シキが何かを知つてているかもしれなかつた。なのに、問いただせなかつた。

マリアンヌの検査のことも、シキが黙つてているのは俺を気遣つてだから、シキなら、必要だと思えば話してくれる。黙つてているなら、理由があるんだ。

そう言い聞かせながらも、かすかに苛立つのを抑えられない。

本当は、シキに「研究に協力して欲しい」と頼まるのが恐いのか
かもしれない。

コーチンの心配をしているくせに、俺は自分を護るために眞実に近
づこうとしていない。教授の件を帝国政府やレクトに報告しないで
いるのも、そのためだ。

研究材料、人と違う生き物。

認めたくなくてふたをしようとしている。

俺には力が、足りない。

執務室で報告書や稟議書に目を通しながら、シンカは思っていた。皇帝なんていつたって誰かに命じ、誰かが言つことを聞いてくれるから力があるように思われる。けど、命じる相手がいなかつたら何もできない。その言葉に耳を傾ける誰かがいるから、言葉どおりにことが運ぶ。

俺が一般人の振りして市街に降りているときには、そんな無力感は感じなかつた。

何事も自分でやるからだ。ここでは自分の研修と執務以外のすべてをユージンに任せていた。だから、いざ彼女がいないと、どうなつているのか把握するだけで大変なんだ。

でも、もともと自分でやつていたことだ。できないはずはない。俺、ユージンが有能なことにかまけて、楽してたんだな。

ふと、立ち上がつた。
自分で動いてみよう。

セトアイラスに来て初めて、シンカは自分で服を選んだ。

シンカはブループールでは、なんども偽名を使って市街に出てはいろいろなものを見て回つた。今使つてはいる偽名もその時のものだ。ここセトアイラスでもできないことはない。

そう考へたシンカは、星間ネットワークで太陽帝国情報部にアクセスする。シンカはコーディングが持つてゐるはずの携帯電話が使用されたときに位置確認ができるように、彼女の番号をマーキングした。帝国情報部のデータは皇帝のパスで使用できる。かなり便利だ。セトアイラス市街の地図データも照会する。

これを、シンカの携帯電話に繋がるようにしておけば、コーディングが電話を使用したときに、どこにいても把握できるようになる。

身軽な服装に着替え、栗色の髪を整えカラーレンズをはめると、携帯電話とシキがくれた短剣を腰につける。

そういえば、そうだった。

シンカは自分がいる環境を確認しないでは安心できない性質だった。どんなところでも、その周囲には何があつて、どういう人がいて、どんなものがあるのか。それは、惑星リュードにいた頃から、そうだった。

それを思い出すと、なんだかわくわくしてきた。

そう、もともと冒険は大好きだ。

シンカは、警備のものに止められた。

「お供します。」

そう言つた彼らに、シンカは首を振つた。

「病院の友人と会う約束があるんだ。ついてこられたら困るよ。笑つて出でいくシンカを、男たちは見送つた。専用の車を呼ぶ」ともしない。

「歩いていくつもりなのか？」

「さあ。」

特権階級の考へることはよく分からん、彼らは首をひねつた。

公邸の屋敷から庭を横切り、門の外に出るだけでも、かなり歩いた。それでも、久しぶりに歩くのが楽しい。

大きく伸びをして、シンカは心の奥に重く残る何かを、吐き出そうとするかのように深呼吸した。

薄いグリーンの空に、今は日が高く昇りほとんど田の色に見える。今日の気温は、最高でも十五度。シンカには寒いと感じる。

それで彼は黒いウールの細身のハーフコート、濃紺に首元と袖口にサックスブルーのラインの入ったシンプルなニットを身につけている。足元はグレーの地にブルーグレーの模様が入った細身のパンツだ。

靴はミンクと同じブランドのスニーカーだ。本来なら、金髪で蒼い瞳の自分に合わせて用意しているので、栗色の髪、黒い瞳では少し地味な感じになる。

それでも、今日は気にならなかつた。

公邸の前の通りは、歩く人もまばらで、時折、自家用飛行艇が通り過ぎる。地上から一メートル程度の高さを保つて飛ぶそれは、先日ゲーリントンがシンカを乗せたものに似ている。流行のタイプらしい。プールプールでは、この乗り物は五メートル間隔で地上二十メートルまで三層をなして飛んでいる。セトアイラスではそれは許されていないらしい。

だからなのか、空が広く見える。

歩道を少し歩くと、シンカは足元にグリーンのプレートが埋め込まれている、タクシー乗り場にたつた。程なく目の前に、シルバーの

車体の小型の飛行艇が止まつた。

地球のブループールのタクシーより、かなり大きく見えるそれは、青年の目の前で静かに後部座席のドアを開いた。ブループールでは通常タクシーには、宣伝用のスクリーンが絶えず変わる表示を出して派手なものが多いのに、ここではタクシーもシンプルなんだな。何となく感心する。

そつとのぞいて、乗り込んでみる。

「あら、なかなか無用心ね。」

「え！」

みると運転しているのは、ルクースのレザイアだった。

「あ、間違えた。」

あわてて降りようとするシンカの前で、ドアが強引に閉まつた。

「…あの、すみません。僕、ここでタクシー乗るの初めてで、間違えました。」

「いいのよ。どこに行く？」

「…」

しまつた。

「あの、レザイアさん。僕、仕事ではなくて、少し市街を散策したかったんです。」

「誰も連れずに行くの？」

「おかしいですか？」

派手な髪型の女性は、あでやかな赤いワンピースで、同じ色の唇が微笑む。

「いいえ。丁度いいわ。少し、取材に付き合つてもうれるかしさ。君に聞きたいこともあるしね。」

「レザイアさんは、このセトアイラスに詳しいんですか？」
「多少はね。多分、あなたよりは。」

意地悪にウインクする女性に、シンカは少し頬を赤くする。タクシーと普通の車の区別もついていない。恥ずかしい。

「じゃあ、女性が立ち寄りそうなお店とか、レストランとか、教えてもらえますか。」

「いいわよ。なあに、デートの下見？」

「違います。いちいちからかうんですね。」

「いつもにつけり、完璧な皇帝陛下の、今日は素顔を見せてもらおうと思つてるのよ。せっかく私の車にじつ招待できたんだもの。写真は適当に取らせてもらひわよ。」

「記事は事前に、広報に通してくださいね。」

「ね堅いこと。ね、前にいらっしゃいよ。後ろと話していると首が痛くなっちゃうわ。」

既に市街の中心部を走っている飛行艇の中で、シンカは仕方なく助手席に移った。女性にしては飾り気のない車のような気がする。

「ね、今回の研修以外に何か目的があるの？」

「いいえ。研修と、執務とで結構忙しいので。無理はしないようにスケジュール組まれています。」

「ふうん。そういえば、いつもあのべつたりくつこっている秘書官さんは、よく出してくれたわね。あの子、すじくお堅くて、何にも話してくれないのよね。」

細い煙草に火をつけながら、自分と大して変わらない年齢のユージンをあの子と呼んだ。豊満な胸のラインを惜しげもなく見せつけるその服装は、確かに開けつぴろげで、女性の強い性格をうががわせ

る。

「取材したの？」

「ええ。もちろん。コーディン・ロートシルトは、女性誌の花形なんですから、取れる[真]は取つておくし、話せる機会があればどんどん話しかけるわよ。」

シンカはそつと、前髪をかき上げた。うつむいたその横顔をレザイアは目ざとく観察している。少しばかり元気がないことも見通している。

「せ、ついた。まずは、お食事。[レザイア]は、セトアイラスで一番美しい景色が見える、高級レストランなの。」

「[レザイア]は。」

以前、大公と会食したといひだ。

[レザイア]、コーディンは来るだらうか。

「レザイアさん、一人で落ち込んだときとか、[レザイア]といひに来る？」

「なあに、急に。」

真剣な青年の表情に、年上の女性は微笑む。

そのとき、シンカの携帯電話が小さく音を発した。

「...」

携帯のシステム表示が電話と異なることに気付いたレザイアが、横から覗き込む。

「レザイアさん、[レザイア]、ビニカ分かるかな。」

携帯のホログラムに[写りこむ市街の地図を見せる。

「座標を言つてよ。自動操縦でいけるわよ。」

「SEI4430D93041」

「了解。それ、見たことないわ。変つてているのね。」

「そう？ 最新のは便利だから。」
そしらぬ顔でシンカは笑つた。

「何を、いえ、誰を探しているの？急に元気になっちゃつて。」
さらに、コーディンが誰と電話しているのかを調べているシンカに、
横から手を伸ばす。栗色の彼女の愛しい恋人と同じ色の髪をクシャ
りとなでて、青年の顔をこちらに向かせる。

「ねえ、誰を探しているのかな？」

「探しているけど、でも、様子が分かればそれでいいんだ。」「
コーディンは、食事中かしら？」

「多分ね。場所はレストランみたいだから。」「

コーディンが電話している相手は、エドアス・ゲーリントン教授だつ
た。どうしてだろ？

それに気をとられ、シンカはつい否定することを忘れた。

「優秀な秘書官さんがサボタージュかしら？」

「あ。」

にっこりと派手な笑顔を浮かべる女性に、あわてた表情を見せて、
青年は携帯を取り落とした。

すばやくそれを拾い上げるとレザイアは画面を見つめる。

「エドアス・ゲーリントン。有名ね。あなたの担当教授じゃなかつ
たかしら。」「

「返してくれよ。」

「なんで、秘書官の居場所を探しているの？彼女何かしたの？それ
とも、喧嘩でもしたの？」

取り上げようとする青年の手を、よけて、携帯を高く上げると、レ
ザイアはさらに何か操作しようとする。

「すごいわね、これ、もしかして、情報部御用達の特別なものなの
？」

「返せよ…知らないよ、レクトがくれたんだ！」

「ふうん。レクトさんと仲良しなのね。」

少し悔しそうに皇帝をちらりと見ると、レザイアは意地悪な笑みを浮べる。

「「J」を「」で探さないで、直接電話すればいいんじゃないの？」

すぐに操作できるほど女性はこうこう機器になれている。勝手にコージンの番号に発信したようだ。

シートベルトを外して、レザイアから電話を取り戻そうとするシンカは睨んだ。

「どうせ、出ない。」

青年の傷ついたような哀しげな表情に、からかっていいものでないことに気付き、レザイアは電話を返した。

「なんだか、分からぬけど。ねえ、君、皇帝陛下なんだから、秘書官の一人とトラブルがあつたって、気にすることないんじゃないの。」

むすつと不機嫌な表情で前を見つめる皇帝の表情を指輪のカメラに数枚収めると、女性は自分の最も興味ある話題に移ろうとする。

「ねえ、軍務官は」

「ついたみたいだよ。」

無視して小さなホテルの駐車スペースに止まった車から、降りる。

「あん。待つてよ。」

白い街の中の、白いその小さなホテルは、十階建てくらいのこじんまりとした造りで、ロビーの足元にしかれたベージュに深紅の模様が織られた絨毯が、少しだけ花を添えている。植物がないこの街で、

壁面やテーブルの上を飾るのはガラスの器や金属でできた芸術品だ。このホテルの壁面には、同じ作家の作品だろつ、木の枝を模したさまざまな茶系の色合いのガラスの細長い花器が、置かれている。連作のようで、森をイメージしているようだ。

正面のフロントの女性の視線をさらりとかわして、右側に入つたところにあるラウンジに向かう。追いついてきたレザイアは、ふうん、と中を見回している。

「素敵なところね。」

「レザイア、しばらく、黙つていでもらえるかな。」

その皇帝の視線は厳しい。同じくらいの身長のレザイアからすると、青年はかわいらしく、子供という印象があつた。しかし、その表情は違つた。どこかで、見たことがある。

シンカはラウンジの入り口で着ていた黒いコートを脱いで、ボーリーに渡す。レザイアも毛皮のジャケットを預ける。

入り口近くのテーブルに座ると、シンカはコーヒーを頼んだ。レザイアは丁度昼食の時間もあるし、なかなかいい感じのこのホテルの食事も、堪能してみたいと考えていたが皇帝の黒い瞳ににらまれて黙つてしている。

シンカの視線の先には、亞麻色の長い髪の女性がいた。

有名な、あの秘書官だ。

正面にはゲーリントン教授がいる。一人は食事をしているようだ。

教授の表情が、穏やかに笑つているのに比べ、秘書官の表情は硬い。食も進んでいないようだ。

再びレザイアがシンカの表情を確かめると、青年はじつと、秘書官

に見入っている。

「ねえ、」

言いかけたレザイアに、鋭い視線を向け、シンカは黙らせる。

「もう。」

「コーヒーを口に含みながら、女性記者は密かに皇帝のその厳しい表情を、カメラに収める。

「いつものあのかわいい笑顔とは別人みたいね。怖いくらい・・・！」

そこにレザイアは思い出した。

どこかで見たきたしたシンカの厳しい表情は、レクトに似ているのだ。

そういうえば初めて栗色の髪に染めた青年を見たときにも同じ印象を受けた。

まさか、親子？

皇帝の出生は、辺境惑星リュードとされている。前皇帝が自らの子供を人工授精によって生み出し、敵の多かつた彼は世継ぎを守るために辺境で育てたとか。その真偽は、不明だ。

調べようにも惑星リュードは未開惑星。保護法で固く守られていて、取材になどいけない。前皇帝がなくなつた後、遺書じみた映像でシンカを後継ぎにする血の言葉が残されていた。それが、彼が皇帝になつた理由だ。

もしシンカがレクトと親子なら、すべて偽りということになる。レザイアは、じつとシンカを見つめる。シンカはユーリンを見つめる。

その視線に気づいたのは、ゲーリントン教授だった。

「やあ。」

にこやかに手を上げると、立ち上がる。シンカもキッチリと笑顔を作る。その表情が、少し無理しているよう見えるのは私だけだろうか、とレザイアは思った。振り向いた秘書官が、小さな声を上げる。

コーディンの表情は、およそ彼女らしからぬ印象を受けた。シンカもそう感じたのだろう、作っていた笑顔が消える。

美しい完璧な顔で、穏やかな笑顔を浮かべているいつもの秘書官ではなく、青白い顔に口角の下がった口元、その頬は表情なく固まっているかのように動かない。瞳は落ち着きなく、シンカから視線をそらすと、まだ途中だらう食事を残して、立ち上がった。うつむいて、視線を合わさずに、シンカたちのテーブルを通り過ぎようとする。

「コーディン！」

立ち上がり、秘書官の手を捕らえようとした皇帝の手を、ゲーリントンが押さえる。

「！あなたは、彼女に何を！」

「私ではなく、君がしたんだろう？まあ、安心したまえ、研究所で預かっているから、いつでも来るといい。」

すでにコーディンの姿はなく、ゲーリントンは彼女のあとを追つていった。

立ち尽くすシンカを、レザイアは首をかしげて見守った。

「いいじゃない、居場所がはつきりしたんだから。食事にしましょうよ。」

皇帝の手を引いて座らせると、今度はレザイアが主導権を握った。シンカはだまつて、レザイアが勝手に注文した料理をつついでいる。

あの、コーディンの表情。

それにシンカは思い当たるものがあった。症例を調べたことがある。心を病んだ人と同じ。無表情で無氣力、うつ状態を顕著に表している。

気づけなかつた。あそこまで進むには、事前に兆候があつたはずだ。不眠や食欲不振。無気力。意味もなく泣いたり、笑つたりしていたはずだ。昨夜、突然泣き出したのも、多分、その兆候だ。

気づけなかつた。

俺の責任だ。

口に含む料理に、何の味も感じられなかつた。

レザイアは、あまりにシンカが反応しないので、飽きてきた。車であちこち連れまわりながら、さまざまな質問をしたが、ほとんど上の空だ。

「皇帝陛下。私はあなたの運転手じゃないのよ！失礼ね。このまま、レクトさんとのここに連れて行っちゃうわよ！」

「え？」

シンカは、初めて意識を持つた瞳で女性を見つめた。

「レクトも来てるのか？」

「ええ。知らなかつたの？あんな状態の秘書官じゃ役に立たないだろ？から、レクトさんに公邸にくるように言つたら？きっと喜んでいくわよ。」

シンカは返事をしない。

「会いたいの？ そう、顔に書いてある。」

情けない表情のシンカに、レザイアは相手がまだ幼さの残る、十代の青年だといひことを思い出した。

「今、どこにいるんだ？」

「教えてほしければ、私にも一つ教えてよ。あなたとレクトとの関係。」

青年は、ぎゅっと瞳を閉じた。

その瞳を開いたとき、先ほどまでのほつとした表情は消えて、いつもの利発な笑顔に戻っていた。

「やつぱりやめた。それに、その話は直接彼に聞けばいいだろ。」

「あり、つまらないわね。」

「そろそろ、帰らなきゃいけないんだ。」

「お送りしますとも、皇帝陛下。やつと運転手から解放されるわ」元気を取り戻したかのよつた青年をレザイアは不思議に思いながら、車を走らせる。

6・力があるところへ 3（後書き）

アルファポリスwebコンテナシラソキング「SF部門」に参加中
です
応援してくださると嬉しいです

「蒼い星」シリーズを気に入っていただけました?
感想などいただけると嬉しいです
わで、続きはまた近日中に更新しますね!

7・セイ、ゴージン、マリアンヌ

ホテルの最上階のスウェイートを貸切にした、ホームパーティはコージンの手によって、きちんとセッティングされていた。

シンカ、シキと家族、それにシキの上司に当たるカッシュ、ミストレイアのセト・アイラス基地にいるシキの友人たち。運ばれる食事を思い思ひにつまみながら、皆楽しそうだ。

シキの誕生日の祝いのはずだが、主役はシキの一人娘、まだ一歳になつたばかりのマリアンヌだ。彼女を抱いているシキの奥さん、セイ・リンは常に誰かに囲まれている。

「今日はありがとう、シンカ」

セイ・リンだ。

赤毛とグリーンの瞳が美しい。女性にしては少し大柄なのに均整の取れたスタイルは、色っぽい。片腕にマリアンヌを抱いて、空いた手でグラスを持っている。

「久しぶりね」

「うん。お母さんになつたなんて思えないな。」

二コ二コ笑う青年にセイ・リンは微笑み返す。セイ・リンとは皇帝になる前からの友人だ。いつかシキと結婚すればいいのにと思つていたら、その通りになつた。元軍人で、女性ながらも少佐にまでなつた女性だ。頭がよく、一緒にいるとシキのほうが幼く感じることもある。

年齢はシキより二つ下で、三十五歳になる。昨年末に生まれたばかりの、マリアンヌを抱いていた。

マリアンヌはシキと同じ黒髪で、瞳の色はセイ・リンのグリーンだ。

大きな眼をくじつとさせ可憐らし。

シンカのまうに手をのぞじて二口二口している。

「もう誘惑してゐるのか？」

シキが、セイ・リンの肩越しに手をこぎりして、愛娘の視線を皇帝から奪おうとする。

「あら、マリアンヌはいい男が誰なのかよく分かつてゐるよ。ねえ。」

娘にほおずりするセイに、シンカは笑う。

「ねえ、シンカ。ミンクが連絡してくれないつて怒つていたわよ。こちらからかけても、コーディンが出るばかりだつて」

セイ・リンとミンクは仲がいい。まめに連絡をとつたり会つたりしているらしい。

「やうが、『ごめん。忙しくて。』コーディンからそのことは、聞いたことはなかつた。

「男のそれはだめよ。忙しいなんて理由にならないんだから」ちらりとシキを横目で見ながらセイ・リンが言えれば、「いや、シンカは忙しいんだぜ、セイ。病院での宿直とかあるんだる。ゲーリントンの研究所にも通つてゐるし、もちろん仕事もある」とシキが底う。コーディンからいろいろ聞いてゐるんだ。確信した。

「あら、男同士でかばつてゐつてわけ?でも、星間通信で話すべりながらできるはずだわ。シキ、あなたもね。」

「なんだよ、俺がいつ音信不通になつたんだよ

痴話げんかになる夫婦を眺めてシンカは笑つた。教授のところに通つてゐるのはコーディンしか知らないはずだつた。シキはやつぱり、

「シンカ」

カツツエが声をかけてきた。

レクトの親友だ。シンカも、皇帝になる前に世話をなつている。

「カツツエ、久しぶりだね」

「ああ。君も相変わらずだな」

宇宙一大銀行のオーナーは、それらしく丁寧な口調だ。多分、今日この場にいる中でもっともきれいな発音をする人物だ。

「少しば、成長したと思うんだけど。」

皆に口々に変わらないといわれていたので、なんだか本当に成長していないのかと思つてしまつ。

「シンカ、君は飲まないのか？」

カツツエが、カクテルの入つた、きれいなグラスを軽く振つてみせる。

「俺、だめだから。一口も飲めないんだ。」

「そうか。残念だな。あんまり、元気そうじやないから。気になつたんだが。」

ユージンと同じ、亞麻色の髪の優しげな笑みを浮かべる男をじつと見つめた。

何も言わず視線をそらすと、久しぶりに金色の髪に戻つてゐるシンカはさびしげに微笑んだ。

「大丈夫だよ。」

その表情をじつと見つめ、カツツエは手元の甘い酒を口に運ぶ。向こうで笑い声が起つて、マリアンヌが体格のいいシキの部下をみて泣き出したのだ。

「どうだろうな、マリアンヌ。」

「さあ。詳しく述べまだ、聞いていないから。そういえば、検査つて……レクトも受けたの？」

シンカはふと気付いた。レクトはリドラー人と、本来交配できないは

ずの地球人の前皇帝との間に無理やり作られた子供だ。立場としてはシンカと少し似ている。

心配そうに、見上げるシンカにカツツエはにこりと応える。

「ああ。奴の場合、いいほうに転んだんだろうな。見た目や体質はほとんどリドラ人だ。ただ、子孫は残せない。」

「！ 知らなかつた。」

「……通常、亜種が生殖機能を持つことはほとんどないらしい。君もそうだが、生まれて、そこに存在していることだけでも、何億とある宇宙の惑星から、希望の星を一つ見つけ出すようなものなんだ。それに、あいつと同じ人種が増えて宇宙に広がつたら、地球人なんか生き残れないだろうね」

カツツエはにやりと笑つて見せた。

「そうだね」

シンカは元気なく微笑んだ。

俺も、同じ。

シンカはリュード人の母ロスターと、リドラ人と地球人との血を引くレクト、そして植物のコンイラの遺伝子から生まれている。子孫を残すどころか普通に成長するのかも怪しい。ドクターに無理ばかりすると成長が止まると脅されたとき、本気で応えた。

長い人類の進化の過程で、一瞬だけ存在して、一代で消えていく変り種なんだ。生きているだけで、奇跡。ゲーリントンの顔が浮かんだ。研究したくも、なるか。

「おいおい、そんな顔するな。シンカ。君やレクトのような存在はごく普通の地球人からすればとても優れているんだ。あらゆる面で魅力的だ。マリアンヌもきっと魅力的な女性になる。」

カツツエはセイ・リンの腕で眠る愛らしい赤ん坊に視線を移した。

シンカもそれにならう。

「……元気に、育つてほしいな。」

シンカのその言葉には、深い思いが込められていくようだ。

「そういえば、シンカ。知つてるか？」

カツツエがいつもより大人しいシンカのために話題を変えた。シンカは傍らのテーブルにあつたレンエの実をつまみながら、片ひざを抱えた。そんな姿勢は彼を子供っぽく見せる。

「何？」

「惑星リュードで、地球からの密猟者が捕まつたんだ。」

「密猟？ 何を獲つてたの？」

「……コンイラ、だ」

「……」

シンカはいつもの皇帝の表情に戻つていた。

「あの研究材料用に高く取引されている植物のコンイラ、密猟者のものだつたんだな。」

ゲーリントンのところで見たことがある。栽培されているものはまだ、研究に使用できるほど育つていない、だから高いけれど購入していると彼は言った。

「ああ、そらうし。リュード人の犠牲が出ているらしい」

「……」

シンカが身を乗り出した。

「ほら、何とかつて言つ山に生えるんだらう~そこの山岳地帯に住むリュード人たちが、密猟者に襲われているらしいんだ。」

「ひどいことを」

シンカは唇をかんだ。山岳民族、スキと同じ民族だ。

「コンイラは他では手に入らないからな。今のクローン技術を持つ

てしても複製できないんだってね。しかも植物のコニイラは絶滅しかかっている。」

植物の、とつけたところがひつかかる。
シンカはじつと隣に座るやせしげな笑みを浮べる男を見つめた。

「そもそも、協力してやつたらどうだ？君の体内のものを使えば、わざわざ惑星リコードまで密猟に行く必要はなくなる。君の成分のほうが優れているんだからね」

「カツツエ……」

「なんで、そんなふうに、言つんだ。

「コニイラにはみな期待しているんだ。惑星リコードで、環境の悪化したあの星で、生き延びるためにコニイラが使われていた。副作用はあるもののその効果は素晴らしい。人類がそれを有効利用すれば、誰もがどんな環境でも生きていける。場合によつてはすべての病気から開放されるかもしれない」

「それはまだ、分からないよ」

「そうだ、研究してみないことにはね」
やさしげな笑みがシンカの心をえぐる。

研究、させらつてことか。俺の体を、研究にさせらつて……なんでカツツエが教授とおんなじこと言つんだ。

シンカは、田をそらした。

不意に会場の明かりが暗くなり、そこに巨大なバースデーケーキが登場した。

歓声が上がる。

室内のみな視線が、ケーキと共に照れながら立つシキに集まる。

「ケーキが似合わないな、シキ」

「先輩、年の数だけ酒飲んだほうがいいんじゃないですか！」

皆がからかう。

暗がりの中でシンカの横に立っていたカツチエが、耳元でささやいた。

「シンカ、私の言ったことは気にするな。大公に気を付けるんだ。」

「！」

振り向くと同時にケーキのろうそくが消され真っ暗になった。

「カツチエ、それはどうじう……？」

派手なクラッカーの音と歓声、照明が点されたときにはカツチエの姿はなかつた。

その夜、そのままホテルに泊まることになつてゐるシキたち家族は客を次々と見送つて、残つたのはシンカだけになつた。

「シキ、少し、話があるんだけど。」

シンカはこの時を待つてゐた。ゴージンについて相談したい。

セイ・リンはすでにマリアンヌを寝かせるために寝室に入つてゐる。リビングのソファーにシキと腰掛け、青年はココアのカップを抱えた。

シキはがまんしていたのだが、煙草の煙を惜しむかのようにそつ

と吐き出す。

「コーポの、ことなんだ」

「今日、来なかつたな」

「シキはコーポから何か聞いているんだろ。最近の彼女の様子、知つていたのか?」

シキは黒い切れ長の瞳で、シンカを見つめた。睨んだ、といつてもいい。

「お前、中途半端に女に手を出すなよ。コーポの気持ち分かつてるくせに、可愛がつておいて解任するのはひどいだろ。仕事ができないとこならともかく、あれだけやつてくれる秘書官はいないぞ」

「シキ」

「俺はお前がそういう奴だとは思わなかつた。俺も女と遊ばないわけじゃない。だがそれは互いに遊びですむからだ。遊びで済まない女には決して手は出さないぜ。それくらい判断しろよ」

「手なんか出してないよ」

「こまかすなよ。お前が望んだからこの一ヶ月、一人つきりでっこに住んでんだろう? 誰がどう見たつて、お前、そういう関係だろうが。コーポだつてそう言つているんだ。それにこれ、おまえだる」

シキが差し出した雑誌は三流の「ゴシップ誌」だが、公園で朝、皇帝と秘書官がデートしている、という内容の見出しが踊つていた。
「寧に犬の二キの紹介までされている。

シンカはさすがにまぶたを閉じる。コーポの汚職に関しては情報部の機密事項だ。シキは知らない。話すこともできない。ましてやコーポがここに同行するためにアシラに手を回しただろ? 証拠もない。

「外から見れば、そ'うなのかもな。」

大きく息を吐いて、シンカは手元のカップを見つめた。

「俺のこと信じられないなら、怒るなり蔑むなり、好きにすればいいよ。それより、俺は今、ユージンを助けたいんだ」

「自分で助けるよ。お前がやらなくてどうすんだよ。」

信じてもらえないこととつのは、つらいものだな。シンカの口元に自虐的な笑みが浮かぶ。

「なに笑つてんだ。」

ますます、不機嫌なシキの視線を痛く感じながら、シンカは口を開いた。

「今、ユージンは、ゲーリントンの研究所にいるんだ。」

「何?」

「彼女、心を病んでいて。俺が行つても逆効果なんだ。」

「俺に行けと言つのか?」

「すまない。俺も同行する。彼女を保護して、地球に返さなくちゃならないと思うんだ。俺一人じゃ、彼女は混乱するばかりだから。」

昼間シンカと田も合わざずに走り去った、あのユージンの顔が浮かぶ。

「……お前の責任なのか? その、病気は。」

「……多分。」

ガツ!

シキの拳を頬に受け、シンカはカップを取り落とした。

「お前、なんでそんな風になるまで、彼女を放つておいたんだ!」

シンカには何もいえない。

「ばかやうう!」

もう一つ頬に傷を増やして、シンカはされるままになっていた。

捕まれた服が首を締め付ける。そんなこと、気にはならなかつた。ただ、どうしようもなく、一つの思いが心を占める。

力が、足りない。

寝室から飛び出してきたセイ・リンが止めると、シキは馬乗りになつていた体をはなした。

「シンカ、大丈夫？」

「いいか、シンカ。ユージンのために協力してやる。けど俺は、お前のこと、見損なつたぞ！お前のせいだ、ミンクも泣いてたんだ。のんきにお勉強してる場合じやないだろうが！」

「ミンクはきっと分かつてくれる。」

「お前！」

さらに掴みかかるシキをセイ・リンが止めた。

「ユージンのこと、明日連絡するから。ガンスには俺から連絡しておぐ。いつたん、帝国軍基地にある病院で様子を見て、それから地球に帰すことになると思う。」

そう言って、シンカは乱れた服をはらい、部屋を出て行く。

「シンカ、待つて」

セイ・リンがホテルのロビーまで見送つてくれた。

黙り込んでいるシンカにセイは微笑んだ。

「私は、あなたのこと信じてるわ。実を言うとユージンの様子がおかしいのは、私、わかつていたの。女の勘つてのかな。彼女、これまでも少し恐い気がしていたのよ。貴方のことになると私情が混じるのが分かつた。あなたに固執している風だった。ミンクも多分大丈夫よ。私たちに話せないことも、ちゃんと、あの子には話せるんでしょ？」

シンカはうなずいた。

セイ・リンもかつては軍人。帝国軍の組織にいれば民間人に語れない事実が多いのも承知なのだ。

「ごめんなさいね。シキを、許してあげてね。」

「いいえ。俺が、上手くできなかつたから。俺の責任なんだ。セイ・リンも、心配かけて「じめん」

ふくよかな胸元に腕を組んで、セイ・リンは笑つた。

「一番つらいのは、あなたなのに。相変わらず、自分のことは後回しなのね。」

初めてあつた十七歳の頃から、シンカは変わつていない。皇帝という地位についても、常に周りを大切にしようとする。そのシンカが今の一言で、瞳を潤ませたことにセイ・リンは気が付いた。

「シンカ……」

「セイ、マリアンヌのことだけ」「何かを振り切るよつてシンカは笑いかけた。

「かわいいでしょ?」

「俺、できるだけのこと、するから。」

やさしく微笑んで、シンカは迎えの車に乗り込んだ。黒く鈍く光る専用車は、静かなセトアイラスの街に消えていく。

「シンカ……」

セイ・リンは驚きの表情のまま、立ち尽くしていた。

翌日シンカは、午後の救急救命室の実習を終え、免疫治療科の宿直勤務までの時間、ゲーリントンに伴われて研究所に向かつた。

研究所にはユージンがいる。シキとは現地で合流するよつて連絡を入れておいた。

車中で教授は何事もなかつたかのように、こじやかにシンカの今朝の研究課題の発表について話していた。

「君が取り上げた、ユンイラ因子の培養変異について、私も興味が

あつてね。あの不安定なユンイラの変異パターンを読みとることで安定したものとして、確立できる。今はマクロファージに与える影響が一定していいからね」

「そうですね。植物由来のユンイラ因子は、特に赤外線に弱いです。培養時の変異が起こるのはそこに原因があるように思います。」

「君はここに来る前から、ブールブールの研究所で、ある程度学んでいるんだろう?..」

そこは帝国が運営している機関で、植物由来のユンイラを研究している。公にはしていないが、そこでシンカの血清からミンクのための製剤も作っているのだ。

「ええ。あそこで研究にもう少し僕も参加したいので、勉強したいんです。」

「ふん。私もそこに入れてほしいものだな。セトアイラスでは、大學がうるさいし、大公の目もある。」

「人選の権限は、僕にはありません。」

「皇帝陛下の意見なら通るぞ。」

「教授、教授のやり方は、受け入れられないと思います。」

「ふん。」

不機嫌に前を向き、若い教授は車内の空調を止める。少し、暑くなつたのだろう。

「ユンイラの入手先を教えて欲しいんです。」

その横顔を見ないようにしながら、シンカは言った。カツツエが言つていた、リュードの密猟事件。あれは、情報部のデータによれば、地球の地下組織『迦葉』がからんでいて、それを買い取る相手といえば、この研究所以外にはなかつた。この宇宙でユンイラを研究している研究所はブループールの帝国研究所か、ここだけなのだから。それ以外でユンイラを入手しても、何もできないはずだ。

教授は横目で青年を睨むと、神経質に口角をあげる。

「私は正式な業者から買い取っている。業者がどこに依頼してどう入手しているかは、知らないがね。」

「惑星リコードから、入手できるコンイラは限られているはずです。このセトアイラスには、かなりの量のコンイラが入ってきていますね。」

「さて。需要のある場所に供給されるのが当然だろ？ なにか、おかしいのか？」

教授の表情は変わらない。

「いいえ。ただ、かなりの費用がかかるんでしょうね。」「資金に困った記憶はないね。」

教授はにっこりと、笑ってみせる。

「ああ、そうそう、君の研修もあと十日程になつてしまつたね。寂しいねえ。是非、君にはいい成績で終えてもらつて、それから私も、君の主治医と同じ権限を与えて欲しいものだな。」「…？」

シンカの、皇帝の体にふれていい宇宙でただ一人の医師。

今はもともとレクトの部下だった女医のガンス・トートアにお願いしている。彼女もここセトアイラスの大学を出ているが、大学側からの就任要請にも関わらず、レクトの人柄に惚れて軍医になったのだ。今は、皇帝付きの医師として、シンカの行く先々に常に同行している。今回は、セトアイラスの上空にある宇宙ステーションで、皇帝の専用艦の乗組員とともに待機している。今日はコーディンのために、セトアイラスの帝国軍基地にきてくれているはずだ。

「イヤだ」

眉をひそめて、シンカはにやつく教授を睨んだ。

「免許があつたって貴方は研究者で、医師じゃない。コーディンもガンスに任せた。今日、連れて行くから」「誰が許可した」

ゲーリントンの表情はゆがんだ。いつもの穏かな表向きの顔と、自分の思い通りに行かないときの怒りの表情は、かなり落差がある。

「俺がここにいる間は、協力するよ。採血でも何でもするといい。だけど、コーディンを預けておくことはできない。逆らえば、情報部があなたを処分するまでだ。」

「なんのつもりだ。脅すのか？」

「知らないのか？あなたを残して、あのデイラの研究所にいた研究員は、皆、処分されたんだ。だれも、残っていない。」

助手席の青年を、ゲーリントンは見つめた。そのシンカの凄みのある表情は、今まで見たこともないくらい残酷な視線を教授に向けている。

若い教授は初めて、シンカが太陽帝国皇帝であることを実感した。「ふん、やれるものなら、やってみるといい。今の彼女を動かすのはどうかと思うね。」

シンカは教授を睨んだ。

ゴージンは研究所内を一人で自由に歩き回っていた。その表情はあどけないような、呆けたような感じだ。教授に伴われたシンカを見ると、嬉しそうに微笑み駆け寄ってきた。

「ゴージン」

緊張しながら抱きついてくる女性を見つめる。今は、躁状態なのだろ？

「うれしいです。陛下。」

次に教授を見つめると、ゴージンは言った。

「先生、本当に私に子供を授けてくださるんですね。」

「ひとつとあどけなく、どこか何かが抜け落ちた表情。

「どういふことだ？」

驚いたシンカは、教授を睨みつけた。いつもどおり、採血の準備をしていたゲーリントンは、薄ら笑いを浮かべて、言った。

「彼女はね、君の精子をもらって、人工授精で子供を欲しいといっているんだよ。」

「！」

シンカは、片手で目を覆つた。抱きついたままの秘書官は、シンカの香りをかいでいるのだろう頬を腕に擦り寄せつつとらじでいる。

「甘い香り」

シンカは大きなため息をつく。

「彼女になに吹き込んでんだよ！」

「さあね。勝手に言い出したんだ。知らんな。協力してくれるのか

？」

「冗談はやめろ！俺の子供なんかありえない！」

俺やレクトの、無理やり生み出されたものの苦しみを誰かに『える

など、考えられなかつた。

この辛さは誰も理解できないのかもしれない。
コーディンを貼り付けたまま、シンカは採血用の針を自分で刺した。
器具用にテープで止めて固定する。

その様子を、じつと見ていたコーディンは、うつとりとつぶやいた。
「陛下の血の色、美しいです。香りも甘くて。特別なんですね、な
にもかも」

女性の白い手が、腕をなでる。

「！飲んだことがあるのか？」

驚いて声が大きくなると、女性はびっくりして離れた。

「驚かさないでくれるかな。ルー。彼女は臆病になつてゐるんだか
らな。」

機器を調整しながら、ゲーリントンが言つた。

「・・教授、あんた、コーディンに何をした？まさか、俺の血液製剤、
飲ませたわけじゃないだろうな。」

「さあてね。」

「俺の血液中のコンイラは、鎮静剤に含まれるファルクノールに過
剰反応する。俺もその成分が入つた麻酔薬を打たれて暴走したこと
がある。」

「それは、初めて聞いたなあ。」

のんきにコンピューターの画面を見つめながら、教授は机に頬杖を
ついている。

「ファルクノールは、不眠症や軽いノイローゼの状態の患者に処方
されることがある。もし、コーディンがそれを服用している状態で、
俺の血液製剤を使つたら
脳に損傷を与えるかもしれない！」

青年のほうに向き直つた教授は、冷ややかに笑つた。

「ああ、なるほど、そういう原因だったんだな。」

「一使つたのか？」

「そういう重要なことは、早く言つてもらわないとねえ。」

知らなかつたところ表情でもなく、のんびりと教授はモニターの血圧表示を見つめている。

「まあ、貴重な症例になつた。一時的なものになるのか、改善するのか、これから治療にかかるか。」

悔しげに、唇をかんだシンカだったが、一時的な症状かもしけない事実は、嬉しいことだった。

「コンイラ因子は、体内に一定期間は留まるが、いずれ排出される。もう、コーディンにファルクノールを使わせなければ、治るかもしない。」

そう言つてシンカは、傍らに立つてゐるコーディンの手を握つた。黒い大きな瞳に笑いかけられて、秘書官は嬉しそうにあざけなく笑う。とても年上とは思えなかつた。人の心つて言つものは、ここまで表情や雰囲気に影響するものなのか。シンカは、今が最も幸せな表情なんだろう、と思つ。

その時、研究所の受付から、来訪者の照会があつた。

シキだ。

「ミストレイアの地球本部長? シキ? ああ、マリアンヌの父親だね。通してくれていいよ。」

ゲーリントンは驚くこともなく、受付に伝えた。

「コーディンを彼に預けて欲しい。」

そういうつたシンカに教授は口元を面白がりにゆがめた。「では今日は、骨髄液ももらつておこなうかな

「一。」

「採血でもなんでも、といつたね? 君のために治療中の女性を渡そ
うといつんだ、そのくらい承諾してもらつよ

「採血でもなんでも、といつたね? 君のために治療中の女性を渡そ

小さくため息をついて、シンカはうなずいた。

「ホール音とともに部屋に入ってきたシキは、ミストレイアの制服だ。いつも彼と違う気がするのは、前髪が一応分けられているからか。昨夜、喧嘩したからか。

シンカが見つめても視線は合わない。

「やあ、シキさん。」

「先日は、どうも。」

「マリアンヌの様子はどうですか?」

「ええ。熱は下がりました。ありがとうございます。」

「それは、よかったです。」

シキより七歳年下の教授は、穏かな表向きの表情で微笑んだ。そうしていると、普通以上に好青年に見える。
コーディンはシキのことなど耳に入らないようで、仕切りとシンカの首にまとわりついている。まるで、シンカの放つコンイラの甘い香りに酔っているかのようだ。

「彼女、友人でしてね。地球にある病院に入院をさせることになったので、連れにきました。」

「ああ、そうか。いや、先日、ふらりと電話を受けてね。こんな状態だったから、返すのも危険かと思ったんだ。すまなかつたね。心配させて。」

猫なで声とはこのことか、と苛立ちつつ、シンカは黙つて成り行きを見守っていた。

「コーディン。お友達が迎えにきてくれたぞ。」

教授がコーディンのそばに立つ。シキに背を向けた彼の表情は、穏かに笑っているようで、しかしその漆黒の瞳は笑つていなかつた。その手に銀色の細長いものが光つた。注射器だ。

「！教授、まさか！」

シンカは、とつさにコーディンを抱き寄せ、教授の手から庇つた。

「さつや……」その薬は、だめだと！

言いかけるシンカに、ゲーリントンは注射器を突きつけた。

「そう、さつき言つただろう、君は少し疲れているからね、休んでいくといい。今日は、このあと、まだ宿直勤務があるんだろう？」

「や……めろ！」

シンカは、腕に刺した採血の針がはじけ飛ぶのもかまわずに立ち上がりつた。つもりだつた。

が、遅かつた。

視界がゆがむ。身動きもできず、急速に力を奪つ薬に、息が荒くなる。耳鳴り、乱れる視界。すでに立つていられない。

「先生、なにを？」

シキがシンカに駆け寄つた。

「いえ、あまり眠れないというので、宿直までの間休ませようと思いましてね。彼は、コーディンを心配しているんですよ。」

「……」

シキは床に座り込んだシンカを支えていた。すでに目を閉じて眠っているように見える。

「ゲーリントン教授、信頼していいんですね？」

シキは教授を睨んだ。

「ええ。コーディンを送つていいくのは一人では大変ですよ。私も一緒に行きましょう。興奮させてもいけないので、症状がわかつていないと危険ですから。」

にこやかに微笑む、若い教授は医者としては完璧な態度だ。

「私は、医学には何の知識もない。けれど、教授、もしあなたが彼に危害を加えたら、容赦しません。娘の主治医であつても、関係ありませんので。」

シキは大きな口でにやりと笑う。涙みのあるその笑みは、たくさんの戦場を渡り歩いてきた、そしてそこでこそ生きがいを感じる彼のような人間しか作れない笑みだった。

「ええ。信じてください。私が彼に危害を加えてなんになるというのですか。少しだけ、研究に協力してもらつてはいるだけです。彼は、休ませておいて、さあ、行きましょう。」

シキがシンカをそつと横たえると、コーディンが不安そつと、見つめる。

「コーディン。地球に帰ろう。」

シキが肩に手を置くと、秘書官は震えた。

「いやです。陛下のおそばにいたいのです！離れません。」

「コーディン。」

教授は、笑みを浮かべ、手元に注射器を用意した。その薬品のアンプルには、ファルクノールの含有量が示されている。

「教授、私に子供を下さるといいました。」

「子ども？」シキが、眉をひそめる。

「だから、それはね。コーディン。」

小さい子どもに言い聞かせる態度の教授は慣れた手つきでコーディンの肩に注射器を押し当てる。

「あ…」

コーディンのグリーンの瞳が大きく見開かれる。

彼女の内で、何かが壊れた。

それは、知性だつたか、記憶だつたか。すべてが、白く薄れる中で、ただ愛しい青年のことだけが心を占める。

「おい、それ、何だよ。」

シキが今度はユージンを支える。

「鎮静剤です。」ごく、普通のね。」

シキは秘書官を抱き上げ、教授を伴つて、待たせてある車に向かつた。

一度だけ振り向いた。シンカはぐつすりと眠っているようだった。

シンカが次に目覚めたとき、目の前にミオの顔があつた。

「あれ？」

起き上がるうとする彼を、可愛らしい研究生が抑える。

「だめよ、貧血で倒れたつて。教授が、ここまで連れてきてくださいたんだから。」

「救急救命室、なんだ？」

「そうよ。私、ちょうど宿直だつたの。」

「…そうだ、俺も免疫治療科の……」

起き上がると、くらくらした。

「ルー、無理しちゃ駄目よ。教授が代わりに勤務してくださるつておっしゃってたわ、大丈夫よ」

「…」

けだるさにシンカはまた、横たわる。

「ね、ルー。どこか悪いの？こんなひどい貧血、普通は起さないよ。もう少しでショック症状を起すところだつたんだから」

「つて、輸血したのか？」

「ええ、教授があなたの血液型知つていて言つて。私、はじめてみる血液型だつた。そういうえばルーはリュード人だものね。私た

ちと違つたよな。」

ぐるりとした金色の髪を揺らし、ミオは首を傾げてみせる。その時小さなホール音がミオの胸元から響く。

「あ、ごめんね、呼び出しだわ。今日は、週末だから患者さん多くて。」

「大変だな。手伝えることあつたら言えよ。」

「ルーも、今は患者さんなんだよ。」

小さくウインクして、小柄な研究生は出て行った。

シンカは天井を見つめる。

あの時、麻酔薬を打たれて気を失つたんだ。コーディンは無事、保護されただろうか。

「そうだ！」

ガンスにコーディンの症状の原因を、コンイラとファルクノールの過剰反応であることを伝えなくては。

ふらつく足元も気にせず、立ち上がると、傍らにあつた自分の荷物から、携帯電話を取り出した。

「・・夜遅く、ごめん。」

電話の向こうの、五十代の女医は、いつもの豪快な笑いかたで笑つた。

「いいえ。医師には夜も昼もありませんよ陛下。コーディン、今は眠っています。」

「ガンス、ゲーリントンが彼女にファルクノールと俺の血液製剤を服用させたらしいんだ。」

「！」

「彼女の、症状の悪化もそれが原因かもしれないんだ。だから、ファルクノールの使用を止めて欲しいんだ」

「ええ。分かりました。ゲーリントンは、知つているのですか？」

「多分、知つていて、試したんじゃないかな。」

「彼のやりそなことです。陛下もお気をつけください。ゲーリントンは、表向きはとてもよい医師ですが、内心何を考えているか分からない男です。人を人とも思わない、冷酷な一面を持つていますので。」

シンカは微笑んで見せた。

「分かつて。コーディンをよろしくね」

「はい。」

通信を切る。

「……」での、携帯電話は、だめよ。」

「……」

振り向くと、マクマスが、立っていた。

「ルー、あなた、何者なの？」

驚きの隠せない表情で、担当の研究医は訪ねる。

「今の女性、皇帝の専属医師ドクター・ガンスね」

「ごまかしきれない、か。

「……学長と大公しか、知らないんだ」

シンカは覚悟を決めた。

「研修期間が終わればきっと、公表されるだろうから。ドクター、あなたには言つておくよ」

「ルー？」

シンカはゆつくり、瞳のカラーレンズを外した。

セトアイラス政府の惑星政府庁舎は、その色彩ゆえに白亜宮と呼ばれ、セトアイラス市の真中にある。地球のブループールとは違い建物の高さの制限が低いここでは、その建物も地上十五階までしかない。セトアイラス市の夜間規制は厳しく、抑え目のネオンサインは十九時を回ると消される。

静かな街。寝静まっているのではない。市の中心部には、人々が生活する場はない。すべて研究機関や大学、政府庁舎などで占められているため、ひつそりとあちこちに見える明かりは、夜を徹して続けられる研究や実験が行われているのだ。市の外周部分に高級住宅街が取り囲むようにあり、さらにそこから離れる郊外に、商業都市や治安の悪い貧しい地域が点在する。

その静まり返った政府庁舎の一一番奥にある大公官邸に、栗色の髪の男を乗せた専用高速艇が到着したのは、午後二十時を回っていた。既に無人と化している特別車両用ゲートを、静かに滑り込むようにその黒塗りの車は走る。普段は地上一メートルほどのところを走るのだが、ゲートなどでは電磁石帯が別に設けられているので、それにあわせた高度となる。

降り立つた長身の男は、いくつもシンプルなチャコールグレーの上質なスーツに白金の折柄のあるマフラーをはためかせている。シンプルなスタンダードカラーに、小さく鈍く光るバッジは太陽帝国軍の高官であることを見せつける。

これが、太陽帝国軍の制服だ。

特に派手なところはない。彼の中でもつとも派手なのは、その切れ長の瞳を宿した、堀深い顔立ちくらいだ。

身分を証明するものは、何も要らない。

なぜなら、彼の顔を知らない政府関係者はいないからだ。

太陽帝国軍、軍務官。若干四十三歳の彼がこの宇宙の三分の一以上を治める太陽帝国の、軍隊を率いている。最強の軍神と恐れられ、その過去の偉業は今も畏れとともに語り継がれる。

リドラー特有の恵まれた体躯。百九十センチ以上の身長、均整の取れた肉体は、地球人にはないしなやかさと、たくましさを持つ。淡い褐色の肌に、短く整えた栗色の髪。黒い瞳は鋭くあたりを見つめる。

彼を、大公カストロワは待ちわびていた。

「おお、久しぶりだな。レクト。」

セダ星人特有の淡いグリーンの顔をほころばせ、見かけは五十くらいの大公は、軍務官を迎えた。

長いマフラーを外して従者に渡すと、軍務官は挨拶もそこそこに、大公の執務室に入つていいく。従者に出て行くように手で合図する。その傲慢な態度も、彼の存在感は許してしまつ。

「大公、お元気そうで何よりです。」

テーブルを挟んで大公を見つめながら、レクトは言った。

「お前こそ、変わらんな。」

大公は明らかに嬉しそうな表情を隠せない。

「カストロワ大公。こんな遅い時間に申し訳ありません。」

「うむ？」

「話は大公にとつてあまり嬉しくないものかと思いますよ。」

にんまりと笑う元コレクションに、大公は気持ちが高ぶる。この作品は、本当に素晴らしい。手におえないのが難点だが、これほど心くすぐる存在はいなかつた。

「なんだ。」

落ち着いた振りをしながら、大公は言った。取つて置きのブランデ

ーを持ち出すあたりは、それはしゃぎようが知れるとこいつものだが、目の前の男はそんな細かいことに気付くタイプではない。

「迦葉をご存知ですか。」

「地球の地下組織だつたか。」

「あれがこちらにも組織を広げていることをご存知ですか。ゲーリントンの研究所に密獵品を卸していましてね。」

「ほう。初めて聞いたな。」

レクトが彼の年齢ほど寝かされた琥珀色の液体を口に呑むのを見つめながら、大公は答えた。

「それが、どうかしたのか。」

「大公。エドアス・ゲーリントンに何か悪さをさせていませんか。迦葉に絡むのは得策とは思えません。」

「ゲーリントンは勝手に何でもやるのだ。お前に似てもいる。」

穏かに微笑む大公にレクトは眉をひそめた。

「私はあそこまで馬鹿じやありません。」

「シンカに対する固執の仕方は同じだと思うがね。」

「ふざけるな」ゆっくりかみ締めるように言葉にする口元は笑っている。黒い瞳は決して笑つてはいない。誰もが恐れ、冷酷と呼ぶその表情を、大公は楽しんでいた。

「懐かしいな、お前のその口調は。」

「一つ、大公。お教えしますよ。太陽帝国軍情報部は、迦葉の壊滅を図っています。その舞台が、場合によつては、ヒヒセトアイラスになるかもしません。」

「ほう。」

「黙つて、見ていてください。」

「嫌だといつたらどうする。」

「シンカを、手に入れたくはありませんか。」

挑むように見つめるレクトに、大公の金色の瞳が輝いた。

「私に、くれるというのか?」

軍務官は肩で笑っている。あまりにも、大公の反応が素直すぎた。

「冗談です。太陽帝国皇帝を、私があなたにさしあげるなんてこと、できるわけはないでしょ。コレクションと同じくらい、大切にして欲しいとは思いますがね。」

「お前は……」

しらけた様子で、大公は軍務官を睨んだ。

「お前ほど、私の恩を感じない男はいなかつた。」

「では、具体的に要求すればいいでしょ。見返りはこれだ、と。」

大公は、大きく息をつく。

それではコレクションの品位を損ねる。

「相手に一方的に求めさせておいて、自分は欲しがらない振りをする。人が悪いにも程がありますな。」

レクトは小さく笑つて、立ち上がつた。

「感謝はしておりますよ。レイス。」

そう言って立ち去る男を、大公は眺める。

かわいいのか、かわいくないのか。いつも決めかねる。

だからまた、顔を出してくれる日を待つてしまふかも知れない。

三日後、研修も残り一週間となつたその日、シンカは一人きりの休暇を迎えていた。

コーディンをガンスに預けてから三日がたつている。今日は時間が取れないので、様子を見に行こうと考えている。

あの日以来、会っていない。セトアイラスから遠い郊外にある、太陽帝国基地内の病院に入院していた。そこにガンスも詰めてくれている。通信では様子を聞くものの、直接会うことはためらわれた。まとまた時間も取れなかつた。ガンスの話ではかなり落ち着いて、シンカを探して逃げ出そうとしたり、暴れたりということもなくなつたという。

しかし、落ち込んで考え込む様子は、今だ見られるという。

俺が行くことで、彼女に与える影響がどの程度あるのかは、分からぬ。

シンカは朝食を済ませると、昨日の中央政府からの報告書にもう一度目を通す。

「陛下、お下げしてよろしいでしょうか。」

ダイニングの椅子に片足を抱えて座り小さな端末のファイルを眺めるシンカに、メイドの女性がにっこりと笑いかけた。慌てて膝を下ろし、うなづく。そういう姿勢ははしたないと、よくコーディンに怒られた。ミンクなどは両膝抱えて座つたりするので、その姿を見るたびに「とても、コーディンには見せられない」と思ったものだ。

甲高いホールで、セキュリティシステムが来訪者を告げる。

「？」帝国軍の迎えにはまだ早いが。

端末のスクリーンを切り替えると、門の外、車の運転席で笑うゲーリントンが映される。

なぜ、ゲーリントンが？

嫌な予感を覚えながらも、「おはよひじぞいます。」とカタチびおり挨拶する。

「おはよ。迎えにきたよ。」

短い金色の髪を朝日に光らせ、教授は笑った。

迎え？

何のことだ…。

「あの、今日は」コージンの見舞いの予定がある。言いかけるシンカに、教授はたたみかけるように話した。

「今日は、君に見せたいものがあつてね。」

一瞬眉をひそめたが、シンカは教授を迎えていた。いつものシルバーの車で建物の正面に横付けすると迎えに出たシンカに握手して、いかにもいい人そうな振りをしている。

「今日は、顔色がいいね。おはよひじぞいます。」

シンカの肩に手をおき、警備しているYたちに愛想のいい笑顔を向ける。

「今日は、採血はなしですよ。」

つまらなそうな顔をして蒼い瞳で見つめる青年に、教授は微笑んだ。

「そこは、君次第だが。」

「じゃあなしで。教授のいとおりにしていたら体が持ちません」

リビングのソファーに座るとゲーリントンは伸びをして、室内を見回した。メイドにコーヒーをもらつと、こつこつ笑う。

「うん。いい香りだ」

「コーヒーをおいしそうに飲む男にシンカはやりかけた仕事のファイルを閉じると、正面に座った。

「あの、『事件はなんでしょう』」「う

シンカを見つめて目を細め、わざとじらすつもいなか黙つてコーヒーを飲み続ける。

シンカが溜息とともに自分の皿の前のカップに視線を落とすと、やつと教授は「話といつのまね」と口を開く。

「マリアンヌの精密検査の結果が出たんだ」

「…」

「コンイラの成分があることは言つたね。見てみなさい。眉をひそめるシンカに持つっていた荷物からカルテを取り出して見せた。

「黒髪の彼に、君のものと同じコンイラがあるんだね。マリアンヌの体内のものも、君と同じじゃだ。」

「…」

示されたカルテから、シンカは目が離せない。

「でも、シキはほとんどコンイラを使ったことがありません。幼児期に一度服用し、後は怪我をしたときに一度、僕の血液で治したくらいです。その程度で遺伝するほど彼の中にコンイラが蓄積するとは思えない。妊婦が使用したならともかく。」

「君のは、特殊なんじゃないのか？」

そんなはずはない。シンカは何度も示されたファイルを眺めた。

「マリアンヌも、姿は違つが、デイラの住人のようになる可能性はあるな。内臓の状態はあまりよくない。」

俺のコンイラのせいだとでもいうのか？

以前、そつ、皇帝になる前、ひどい怪我をしたシキを助けるために、俺の血液を患部に当てる。それが今も残つてゐるといふのか？

「その報告のとおり、彼女の白血球中には、c1 - yu n o i l a 成分が見られる。」

「具体的な症状はあるのですか？」

「今のところはないね。しかし、まともな成長と、普通の寿命は保証しかねる。健康とはいえないね。」

そこで、教授はにやりと笑つた。漆黒の瞳が、細くなつてシン力を見つめる。

「そこで、君には協力してもらわないとねえ。君の血液内のユンイラ因子は、変異し易くてね。なかなか、成分を維持したまま培養ができないんだ。」

「それで、また採血ですか。」

シンカはため息をついた。提案してみる。

「帝国研究所で完成した製剤は経口薬です。それではいけませんか。」

「製剤を少量作るだけなら、私だけ可能だ。しかし私は、培養し研究したいのだ。対症療法ならそれでいいだろ、マリアンヌの症状が悪化したときには役立つ。しかし、それでは根本的な解決にならない。彼女は一生薬を飲みつづけなくてはならないし、それだけの薬を君の血液からだけ作成することは不可能だ。」

「植物由来ではダメですか？」

「成分が違う。植物由来因子は副作用が激しい。寿命を縮めてしまうだろ、う。」

「では僕の、骨髄のクローニングを、進めろと？」

教授はにっこり笑つた。できのいい生徒にする表情だ。

「そのとおりだ。君の骨髄組織を複製することで、血液を作り出すことができる。」

現在のクローニング技術は進んでいる。皮膚や内臓の複製は当然のように行われる。資産あるものなら、自分の健康な状態の組織から培養した自らの臓器をバンクに預けている。

血液の培養がもつとも難しく、理論的には可能なのが、他の臓器のようにバンクに預けておけるようなものではない。血液はもつと簡単な、冷凍保存が一般的なのだ。帝国の研究所で、シンカの血液も冷凍保存されている。それから製剤を作るのだ。

「考えさせてください。」

シンカは目を伏せた。

マリアンヌのカルテにある内容は、彼女の内臓が植物由来のコンイラ因子の禁断症状に似た症状で弱っていることを示している。シンカの成分では、内臓は傷まないはずなのだ。しかし、白血球中にあるコンイラ因子は、シンカのものだという。少し、腑に落ちない。

ミンクに、経口薬を投薬するのは、彼女がもともと植物由来因子の中毒症状を持つて生まれているため、体内に一定濃度のコンイラ成分がないと機能障害を起すからだ。それを補うために、副作用の少ないシンカの血液製剤を与えている。

もし、マリアンヌが本当にコンイラの中毒症状で内臓の機能障害を示すなら、それは、血液中の植物由来のコンイラ因子が不足しているということになる。しかし、この検査結果では、ミンクが必要とする濃度と同じ、いや、それ以上に多い。矛盾しているようと思う。ミンクですら、半年しか体内に留めることができないコンイラの成分が、生まれてから一度も服用していないマリアンヌに、これほど含まれるというのはおかしなことだ。

この検査結果に偽りは無いのか？

シンカは教授を見つめた。

「何かね？」

「いえ。」

マリアンヌの検査を、ブループールでもう一度行う必要があるな。

シンカは、そう考えた。

「教授、僕、これから用事があるので。」

「コーディンのところにいくのだろう?」

「…」

「一緒にいづ。」

シンカは立ち上がった。その蒼い瞳には怒りの色が伺える。それを見て取ると余計にゲーリントンは楽しそうなのだ。

「教授。この間、彼女にファルクノールを注射しよつとしたじゃありませんか。俺も無理矢理眠られた。本来ならいつでも、貴方を拘束し逮捕できるんですよ?」

「ふん。あれは悪かつた。いや、まさかあれですぐに眠ってしまうとはねえ。普通の人間には悪い薬じやないんだがね。あの日は代わりに私が宿直をやつてあげたじやないか。まあ、機嫌を直しなさい

普通の人間じやないことを承知でやつたくせに。

悪びれない様子の教授に、シンカは「この人になにを言つても無駄か」と内心溜息を吐く。

リビングの電話が鳴つた。

「おかまいなく、じうぞ。」

メイドを呼んで、ドービーをお変わりしようとしている教授を睨んで、シンカはスクリーンを開いた。

ガンスだった。少し、白衣のもの混じる地味な髪型の彼女は、肌つやだけピカピカしていて、清潔感にあふれている。白衣がとても似合つ。

しかし今はいつもの笑顔ではなかつた。

「陛下。すみません。」

「ガンス、これから行くよ。どうした? 何かあつたのか?」

相手の表情が緊迫しているため、シンカはわざとやさしく笑つ。こういう時、まず、相手をなだめようとする性格はどこからくるのか。

「陛下。コーディン・ロートシルトが、行方不明なんです。」

「一帝国軍基地の中で、か?あんなに、警備も厳しいのに?」

向こうで、おやおやと、つぶやくゲーリントンの声が聞こえる。無視して、シンカはガンスの言葉に集中する。

「はい。それが、昨夜まで確認していたのですが、今朝になつて行方が分からぬのです。軍病院内は自由に行動できるようにしていただけで、探したのですが、どうも、病院から出てしまつたようなのです。基地内は今捜索しているところです。」

「彼女は一人で出られる状態だったのか?」

「いえ、そこまで回復していたとは思えないのですが。すみません。」

「しかし、ガンスは専門の精神科医ではない。しかも、コーディンの症状も、通常のものと違ははずなのだ。」

「わかった。もし、基地外に出たのであればそこでは手におえないだろうから、情報部に、レクトに連絡するよ。ガンスすまなかつた。動きがあつたら連絡するから、そこで待機していく欲しい。警備主任のノデク少佐にレクトから連絡が行くと思うから、その間、伝えておいてくれ。」

「はい。申し訳ありません。」

通信を切ると、いつの間にか横に座っていた教授が一杯目のコーヒーを口に運びながら、ふふんと笑つた。

その態度に腹が立つて、シンカは睨みつけた。

「教授、というわけで多忙ですので、お引取り願えませんか?」

「冷たく言つ。」

「おや、多少は協力できると思ったのだが。残念だねえ。」

「…何か、知つていいんですか？」

ゆつたりとソファーにもたれて、コーヒーを飲み、天井を見上げる
ゲーリントン。プラチナブロンドの短めの髪がきらりと揺れる。
漆黒の瞳は、まだ笑いをたたえている。

「教授！答えてください。」

「研究所に、来るだらう？」「

「……」交換条件か。

「それに、今の君に、何ができるのかな？せいぜい、帝国軍を使って
搜索を手配するくらいだらう。そんなこと、十分もあれば終わつ
てしまつ。その後の時間を、どうするんだ？」この間のよつて、意味
もなく探して回るのかな。」

くすくすと笑う男。

「それに付き合つてあげてもいいが。」

「もう一度、聞きます。コーディン・ロートシルトの行方について、
何か、ご存知なのですか。」

ひどく丁寧に、シンカは確認する。

「ああいつた症状の患者はね。」

コーヒーのカップをテーブルに置きながら、ゲーリントンは言った。
「鬱症状と、それによつて弱つた体力が改善し、少し自分の状態が
わかつてくる頃に、最も危険なんだ。何が起きているのかがわかり
始めると、自分が何をしていたのかも分かつてしまつ。それを自力
で改善できず、にいる自分に気付き、絶望する。自殺願望が出てくる。
死ぬことが、一番の幸せだと思い込む。成功するまで自殺を繰り返
す。」

シンカも知つてゐることだつた。今、コーディンが一人で出歩くのは
危険なのだ。

拳を握り締めた。

教授の思惑通りじゃないか…。

「お願いです。ご存知なら、教えてください。今から、採血してくれてもかまいません。だから、お願いです。」

「じゃあ、一緒にいで。」

レクトに連絡をとり、搜索の手配を依頼すると、シンカは車で待つエドアス・ゲーリントンの元へ向かった。

カツツエの言葉を思い出していた。

そろそろ、協力してやつたらどうだ？コンイラには、みな期待しているんだ。人類が、それを有効利用すれば、誰もが、どんな環境でも生きていける。場合によつては、すべての病気から開放されるかもしれない。

今まで忙しさにまぎれて考えずに来た。もつと自分自身、研究内容について勉強してからと、思つていた。もう、その時期なのかもしない。

コンイラの存在は、初めて紹介された時、医学会に衝撃を与えたといつ。それは、惑星リュードに研究所ができるて十年後だつたというからもう二十二年前になる。その間、研究が進まなかつたのは惑星リュードが未開惑星保護条約により限られた研究者しかその地に降り立てなかつたからだ。さらに、コンイラが『約五百年前の大噴火』によつて環境の悪化した惑星リュード』といつ限られた条件でのみ発生した植物で、栽培が困難だつたからだ。リュードでも、『大気の毒』と呼ばれている毒素が減つてきていて、つまりコンイラは既に絶滅しかけていた。

二年前には、惑星リュードで唯一の栽培所が破壊され、太陽帝国がやつと開発した宇宙ステーションの栽培施設も、レクトの手によつて破壊された。

コンイラの研究によつて、当時の太陽帝国がさらに多くの惑星を支配しようとすると、惑星保護同盟が危惧したためだ。今は、太陽帝国はそんなつもりはない。同盟とも上手くやつて、研究を許可したところで、社会的混乱が起こるわけでもなかつた。

ただ……。

「いいかげん、自分が研究者にとつてどれだけ魅力的な検体か、理解したほうがいいね、君は。」

車を運転しながらゲーリントンが言った。先ほどから、黙り込んでいるシンカをちらちらと横目で見る。

「切り刻まれて、いい気分になる人はいないと思うけど。」

「人間であれば意志も尊重されるが、倫理問題だなんだとね。しかし、きみは人間とは違う。」

「！」

「君が皇帝でなければ、今ごろはとっくに研究所住まいだ。」

シンカは教授を睨むと黙つて横を向き、窓の外を眺める。今は金色の髪が窓に映る。蒼く特殊な光を宿す瞳も、少し屈折して見える。人間ではない、植物でもない。そういう生き物。初めて知つたときの悲しみが思い出され、胸にちくりと刺さる。

「ま、せいぜい、その地位を守るんだね。」

ゲーリントンの冷たい言葉が、ますます気分を重くさせた。

研究所のいつもの処置室に来ると、シンカは教授に尋ねる。
「コーディンについて、知っていることを、教えてください。
それを無視して、教授は笑った。

「先日、もりい損ねた骨髄液を少しちもらつておこうかな。」

シンカは溜息を吐きながら結んだマフラーを解いた。着ていたコートを脱ぐ。コートのしたは白いカシミヤのニットで、襟と袖口に牛皮が使われている。それは、シンカの引き締まつた体格をふんわりと見せ、やさしげな表情によくあう。

シンカが何がしかの格闘技などで鍛えてこることは、ゲーリントンは想像できた。筋肉のつき方で分かる。

だからこそ常に相手の弱いところをついて自分を優位に持つしていく。
けして、体力勝負や実力行使にならないように。

若い皇帝は金色の髪をかきあげ、苛立ちが隠せない瞳で教授を睨んだ。

「わかりました。好きにすればいいんだ！教授、コーディンに何かあつたら、許しませんから。あなたもただではすみません。覚えていてください。」

くすくす笑う教授に、促されるままに、いつもの診察台に横になる。
「ああ、そうだ、骨髄液の抽出だけどね、君は麻酔使えないからね。
多少、痛いと思うよ。我慢してくれたまえ。」

シンカは唇をかみ締めた。

皇帝の警備のために、ミストレイア・コーポレーションから派遣された男たちに、レクトが怒鳴りつけてから、一時間ほどが経過していた。

「ミストレイアに所属するのが、いいかげんな任務をしやがつて。行き先も聞かずに、ゲーリントンに預けただと？ その辺の銀行の警備員じやないんだぞ！ 自覚があるのか、馬鹿ものどもが！ 人を一人守ることがどれだけ大変なことか！ 本人がなんと言おうと、あれは太陽帝国の公人なんだ、一人くらいついて行かなくてどうするんだ！」

屈強な男たちが怯えた。何しろ相手は宇宙最強の冷酷な軍務官だ。ミストレイア・コーポレーション、彼らの所属する会社の統合本部長でもある。

「いえ、その。病院に出勤するときはいつも、お一人ですし、ユージンさんがいなくなつてからは、ほとんどすべてを『自分でなさつておられたので。』

「病院には運転手が送つていつたからだろ？ そろいもそろつて、この空っぽの公邸を守つているのか。ばか者！」「

レクトの冷たい視線で、彼らは降格を覚悟した。

それから、一時間。公邸の広いリビングで、レクトは煙草をふかしながらじっと待つていた。

なんだか、おかしい。

ため息とともに吐き出した紫煙に、目を細める。

カツツエは少なからず、エドアス・ゲーリントンと俺の確執を知つ

ているはずだ。シンカの身近にゲーリントンがいるのなら俺に知らせるか、あるいはシンカに注意を促す。シキも、いつもあいつならユーリンがないと知れば、シンカをこんなところに一人にしておく奴じゃない。なぜだ。

シンカを孤立させるように、誰かが、仕組んだか。

思い当たる人物が、一人だけいる。

メイドが夕食の準備をしているが、一度レクトの様子を見てから一度と顔を出さず、もくもくと料理を作っている。うわさに聞く、宇宙一恐ろしい軍神とはよく言つたものだ。その鋭い眼光は、今は容赦なく回りに放たれている。

誰が、どうおびえようと歯牙にもかけない。その迫力は端正な容姿とあいまって、ぞつとするほど印象深い。この強い印象が伝説を作るのである。

勝手に飲み始めたウイスキーがボトル半分ほど空いたときだ。来訪者を告げる甲高い音が響いた。

スクリーンには青白い顔のシンカ。そして、肩に手を置く三十代くらいの男。

きちんとした身なりの彼は、薄い唇に神経質な笑みを浮かべて、シンカに何か話している。

シンカはあまり相手にしていないようだ。

レクトはスクリーンに向かつて声をかけた。

「挨拶も無しなのか？さんざん待たせておいて。」

「！レクト。」

軍務官の声にシンカは顔を上げた。その表情は、嬉しそうでもある。

「これは軍務官。お久しぶりです。」

にやりと笑うゲーリントンだが、次の瞬間、さびすを返していた。

「ゲーリントン。貴様、シンカに何をした。」

スクリーン越しにも感じる迫力は、ゲーリントンを帰途に向かわせるに十分だった。ゲーリントンはシンカになにやら耳打ちしてから、レクトのほうを振り返りながら、手を上げる。やがてと自分の車に戻っていく。

シンカが呆然と車が去っていくのを見つめていると、背後でエントランスが開きレクトが飛び出してきた。

「遅いぞ、シンカ！ 携帯の電源も落としてあるし、お前は一体……」

「レクト、教授が、今、コーディンは迦葉が連れ去ったって！」
真剣な表情で若い皇帝は頭一つ高い位置にある、レクトの端正な顔を見つめる。

視線を上向けると同時にぐりごりとめまいを感じて、慌ててさすと目をつぶつた。

「それはいい！ もう、その情報はつかんでいる。なぜ、俺たちに任せないんだ。」

腕を捕まれ、引っ張られるに任せようよろと歩いていたシンカだが、リビングに入ろうとこづきときに足がもつれた。

「！？ おい。」

めまいに似た症状が全身にあって、けだるくて立っていられなかつた。

「…なんで、教授が。」

そう言った、声はかすれて、レクトには聞き取れなかつた。
そのままずるずると引きずられるよつて、シンカはソファーに寝かされた。

気が付くと、ベッドに横たわっていた。覗き込む、ガансの心配そうな顔があった。

「陛下。」

「気付いたのか？」

ガансの横に、レクトの厳しい顔。

怒っている、のか。ガанс、わざわざ、基地からここまで来てくれたんだな。

「ごめん。」

シンカが最初に言つのは、いつもそういう言葉だった。

「謝るな、バカヤロウ。」

額の金髪をくしゃくしゃなでて、レクトは悔しそうに睨んだ。

「お前、あいつに向されたんだ」

あのヤロウ、とレクトはゲーリントンを知つてゐる様子だ。どうりで教授がレクトを見たとたん逃げるように帰つていた。

「採血。あと、骨髓液をいくらか取られた。」

「陛下、今朝の通信で、陛下の隣にゲーリントンの姿を見まして、軍務官にお知らせしたのです。ゲーリントンは油断ならない人物です。一体いつから、その採血を続けてらつしゃるのですか？骨髓液はどのくらいを採取されたのですか。」

中年の女性は恰幅のいい体を揺らして、点滴の準備をしていく。

「採血は多分400ミリを、もつ一週間になる。骨髓液は今日初めてだ。量は分からぬ。とにかく、痛くてさ。」

思い出すだけでざわと背中に冷や汗を感じる。悟られまいとシンカは小さく舌を出して、微笑んでみせる。しかし、二人は険しい表情のままだ。

「軍務官。」

ガンスが奥の執務室にレクトを引つ張つていく。

なんだろ？

シンカは首だけ回して、一人を見送る。

腰椎穿刺は自分も実習でやつたことがあつたが、麻酔なしではこんなに痛いものなんだな。通常は局部麻酔するが、俺にはそれはできない。

ため息が出た。「行くよ？」と命図されても、腰椎から脳幹にまで響く痛みには自然と体が震えた。押さえつける助手たちの手も汗ばむほどだ。シンカが痛みに耐え握り締めた両手は、己の爪で血が滲んだ。自分が見ることの出来ない場所というのが余計に堪えた。神経が磨り減るとは、こういう事なのだろうか。

そして、採取後の、気持ち悪さといったら、ゲーリントンに腹を立てる気力もなくなるくらい、体力を奪つていた。

今も、まだ回復していない。採血や腰椎穿刺の傷跡はないのだが、減つてしまつた血液や骨髄液を元に戻すには時間がかかるようだ。少し熱が、ある。きっと、からだが足りなくなつた血液と、骨髄を一生懸命再生しようとしているんだ。

結局ユージンについては、先ほどの迦葉の話しか聞けなかつた。

俺、こんなに力が足りないと思つたの、はじめてだ。

以前にも、一度そう思つた。

アイリスを、亡くしたときだ。

再び目を閉じると、ユージンのあどけない幸せな笑顔が浮かんだ。それは、アイリスの笑顔にも似て見える。青白い顔で、大きなくくりんとした瞳。

くまのルーは、一緒に逝ったのだろうか。

「そうだ。大至急だ。ああ。一一ヒスケルスに連絡を。」

レクトが誰かと話していた。一一ヒスケルス、それはシンカ専用の小型高速艦だ。今は、この惑星上の宇宙ステーションで待機している。

「レクト?」

目を開ける。

「シンカ。お前を、地球に連れて帰る。」

黒い瞳が目の前で睨んでいる。

「なんだよ、それ。」

「これ以上お前をここには置いて置けない。研修だかなんだか知らんがそんなもの、お前に必要ない。ゲーリントンに協力する義務もない。何も考えずに、お前は地球に帰るんだ。」

シンカの頬にレクトの大きな手があたる。熱のあるシンカには、気持ちいい。

「よく分からない。俺、研修、まだあるし。ゴージン、見つかってないだろ。それに、マリアンヌのことも」

「そのどれ一つとして、お前が必要とすることじやない。唯一、そうだな、お前がここですべきことで、やり終えてないことは、カストロワ大公を懐柔できなかつたことくらいか。」

カストロワ大公?…レクトはそのために俺の研修旅行を認めたのか?

「帰らない。」

蒼い瞳が、じつとレクトを見つめた。

「なあ、お前は欲張りすぎだ。もう、これ以上は駄目だ。お前の体がもたん。」

「なんで、レクト。ユージンのこと、放つておいたんだよ。俺はも

つと早く、彼女を解任したかった。『シンカの瞳が、少し潤んだよう見えた。

ここにコーディンとともに来なければ少しは状況は違っていた。

黒髪の軍務艦はベッドに腰掛け、傍らの皇帝を見下ろした。その瞳にはやさしげな光が浮かんでいた。

『シンカ、お前が抱いてやればすむことだらう?』

『それはできないよ。それじゃ、何の解決にもならない。コーディンはきっと、Hスカレートするばかりだ。』

『Hスカレートしておかしな行動をとれば、逮捕する」とだつてできるだらうが。』

レクトの笑みはやさしい。それが余計にシンカには苦しい。シンカの言いたいことが通じない。

『それは、レクト。彼女をだすことと同じじゃないか。』

『よく聞けよ、シンカ。コーディンは既に知つてはいけない情報を得て、お前を脅しているんだぞ。彼女のこと思いやる必要があるのか?お前が優先すべきは、公務と、お前が選べる一握りの人間を守ることだけだ。周りの人間すべてを大切にできるなんて思つた。傲慢甚だしい。』

『レクト。』

『それとも、お前、子供じゃあるまいし、ミンク以外の女を抱けないなんて、いわないよな。』

『馬鹿にするな。』

目をそらす。言われなくたつて、これまで何度もとなく、それでコーディンの気が済むなら、と考えた。

軍務官は、煙草に火をつけながら、アンティーケのスツールをベッドサイドに持つてきた。紫煙が揺れる。

『シンカ、今回、コーディンを放つておいたのも、お前を一人でレイス・カストロワに会わせたのも、お前に成長してもらうためだ。』

「？なんだよそれ。」

「お前が、コージンを傷つけようと、殺そつと、俺はかまわない。いや、むしろそつすべきだと思っている。レイスにも、上手く立ち回って奴を操るくらいできなくてどうする。優しいだけじゃ皇帝として勤まらないぞ。」

価値観が違う。

そう思わずにはいられない。

「……大公のこととは、任せてくれるって言つただる。」

「……俺は、今のお前の歳にカストロワ大公のコレクションになつた。」

「レクトが？」

初めて聞いた。コレクションは、大公の息がかかっていて、扱いづらいと、いつかレクト自身がもらしていた。

「コレクションはな、親のいない俺や、カツツェにはまたとないチヤンスだ。人生を変えられるんだ。そのために、多少の我慢など平気だ。人生で何一つ失わずにすむならそれはそれでいい。だが、俺の生き方はそんなに甘くない。一つを守れば、一つ失う。その覚悟がなくては、ここまでにはなれなかつたさ。」

シンカは思い出していた。

レクトは、コンイラを壊滅させるために、シンカを当時の皇帝から守るために、愛した女ごとデイラを破壊した。

それが善なのか悪なのか、未だに分からぬが、それによつてシンカが救われたことは事実だ。

シンカには選べない生き方だと思う。

それをやれというのか。

「カストロワ大公は、今、お前と勢力を二分する存在だ。お前は、大公に敵対するつもりはないだろう。だが、お前がそう考へたからといって、相手がそう受け取るとは限らない。大公の性格なら、お前をコレクションにくわえたいと考えるだらう。ついでに、太陽帝国の実権を握る。」

「俺、わざと彼の前で酔つてみせたんだ。」

シンカの言葉に、レクトは一瞬、驚いた表情をする。

「ほう。」

「コレクションにくわえたいと考へてくれたのなら、まずはそれでいいんだ。大公のような経験も長い偉大な政治家に、上からものを言つたつて通じるものじやないだろ。彼が、無視できないと思うよう、仕向ける必要がある。」

「少しは、考へてるんだな。無謀な気もするが。」

「別に、あの人の前で酔つ払つたつて、どうつてことないよ。それに、俺、大公に少し興味があるんだ。」

「なんだ？」

怪訝そうに見つめるレクトに、蒼い瞳が、いたずらっぽく笑う。

「だって、宇宙一長生きで、もう百数十歳なんだろう？そのうえ、たくさんのコレクションを育てていて、どんな人かと思つ。そんなに長く生きてきて、彼は何を求めるんだろうって。」

「知らんな。おかしなことに興味を持つんだな。そんなことより、自分の安全にもう少し気を使えよ。」

「・・・大丈夫だよ。俺は。」

少し、遠い目をする青年に、レクトは吸いかけた煙草を忘れている。そういう顔をされると、どうしても思い出す女性がいる。ロスタネス。シンカの母親。瞳の色も髪の色も、肌の色すら違うのに、どこかが似ていて、思い出さずにはいられない。

ロスタネスが、この世を去つてもう三年が経とつといつて。軍務官の黒い切れ長の瞳は、まぶしそうに青年の顔を見つめていた。

「・・・灰。」

「・・・ああ。」

慌てて、トレイに煙草を押し付ける。

「俺、帰らないからね。」

多少、状態がよくなつてきたのだろう、笑顔に力がある。

「ばか。俺に逆らえると思つていてるのか。」

「嫌だ。」

レクトがベッドに腰掛け、毛布の上からシンカの肩をたたく。その瞳には、他の誰にも見せないやせしい光が宿る。それを、シンカは気付いていない。

「ドクターの判断なんだぜ。お前に、どういひこえる問題じゃないな。」

「！」

「ガンス。説明してやつてくれ。俺は、もうね。」

リビングにいたのか、ガンスが、顔を出した。

レクトより、五歳くらい年上の女医は、にっこり笑つて、すれ違う

軍務官におやすみなさいと声をかける。

「ガンス、俺、まだやらなきゃいけないことがあるんだ。」

「陛下。」

小さくため息をついて、初老のぴかぴか肌のガンスは、さっきまでレクトが座っていたスツールに腰掛ける。

「陛下も、よくお分かりでしょ？ 400ミリの血液を採取されて、通常その分を再生するのに一週間はかかります。それを、毎日だなんて、陛下、すっかり貧血症になつていいじゃないですか。しかも、ゲーリントンは陛下の骨髄まで欲しがつてはいる。危険です。」

「・・・じゃあ、採血を止めさせれば、ここにいてもいいんだな。」

「いいえ。」

きつぱりと、ガンスは首を横に振った。

「陛下。陛下には休養が必要です。以前から、申しておりました。陛下の成長、ですが。」

ガンスの灰色の瞳が、少し哀しげに見える。

シンカは、ゆっくり上半身を起した。自分の体じゃないみたいな感覚が、まだ、少し残っている。

「通常、人間の成長と老化は同時に起こっているものです。相対成長、陛下もご存知でしょうが、生物の各部分の成長はすべてが同じ速度で成長しているわけではありません。地球上で言えば、頭部及び脳細胞の成長が他の部位よりずっと早い。だから、子供の頭は大人のそれより比率として大きいのです。同様に、細胞自体の成長速度も違う。」

「脳細胞の成長は十代後半で止まりますが、手足など身体の筋肉細胞などは、男性であれば二十代後半まで成長しつづけます。どの時点で、成長が止まつたとするのかは難しいところなのです。」

「うん。」

「陛下の、すべての細胞は、永遠に分裂を繰り返すであろうとされています。細胞学的に老化しません。それは、数々の実験でわかっていることです。ですが、それは肉体的成长に終わりがないという

意味ではありません。」

「うん。でなきや、すごい巨人になっちゃうよ。」

笑うシンカ。ガンスはそれには付き合わなかった。真剣に、シンカが黙つて彼女を見つめるまで、じつと、待つている。

「・・・ガンス？」

「陛下。以前から、危惧していたのですが。陛下の肉体的成长は非常に速度を緩めています。同時に、細胞の老化現象も起こらない。予測に過ぎませんが、相当の期間今のお姿のままでおられると。」

「背が伸びないとか、そういうことじゃないのか？」

「そう、ご理解いただいても結構です。現在もつとも長寿であるセダ星人がどのように成長し老化していくのかご存知ですか？」

「ああ。約二百年を基準として百年間で地球人の五十代くらいの様子になると聞いた。後はそれを維持しつつ徐々に老化していくという。だから、残り百年はほぼ同じ姿だと」

「陛下は、今のお姿ということになります」

「え？」

「ちょっと、待って、ガンス。それは、どういうこと？」

「今のお姿からどのくらい成長あるいは老化が進むのかわかりませんが、それは地球人の標準からすれば想像もつかないくらいの時間をかけるだろうと」

「つまり、このままでこと？」

「はい。もしかしたら、とてもゆっくり、ゆっくり成長しているのかもしれませんが、それは、人の一生と同じものとして図ることの出来るようなものではないと思われます。」

「...」

シンカが、黙つた。

見開いた瞳を、ガンスは、やさしく真っ直ぐ見つめ返す。

それが、真実であることを、その瞳は語っていた。

「・・・俺、このまま？もつと、レクトみたいに、シキみたいに」

「無理です。」

シンカは、額に手を当てて、うつむく。

「きっと、今は貧血だから、だから、身長とか伸びないんだよ。この貧血が治れば、・・そうすれば、きっと。」

ガンスは黙つて首を横に振つた。

「そんな、そんなことないよ、きっと・・」

ガンスが、やわらかい腕で抱きしめた。この、十九歳にしては幼く見える皇帝は、このまま、成長も老化もしない。そのままの姿で、いつまでなのかも分からぬ人生を生きづづける。その寂しさは、想像するに余りある。

「俺、いつまで、生きるの？」

「分かりません。」

「俺、俺だけ、ずっとこのままでさ、なあ、ミンクとか、みんな、大人になって、俺だけこのまま？」

ガンスには何もいえない。

「嫌だ、そんなの、嫌だよ。みんなが成長して、年取つて、いつか死んでしまうのを、俺だけ残つて見送るのか？俺だけが、残されるのか？」

以前から、漠然と不安に思つていたことが、突然目の前に現れたような気がした。その不安をかき消すために、自分自身を知るために、そして、ミンクにできるだけ長くそばにいてもらうために、医学を学んでいるのだ。

それが、・・こんなことになるとは。

「陛下。何も、昨日今日に、止まつてしまつたのではないのです。身長が伸びなくなつて、もう一年経ちます。その間、ずっと、私はちは研究を続けてきました。怪我をしたために成長が止まつたのではないか、忙し過ぎて睡眠不足が成長を妨げているのではないか、

と。しかし、総合的に見て、ここ半年、成長と呼べる兆候は見えませんでした。

シンカは、初老の女医を突き放した。

「じゃあ、もう、何しても無駄なんだ。」

そう言つた表情には、哀しげな皮肉な笑みが浮かぶ。

「陛下、そういうおっしゃりよつは。」

「研修を続ける。帰らないよ。何をしても変わらないなら、もう、とまつてしまつたなら、俺は自分がしたいようにする。」

「いい加減にしろ、シンカ。」

見上げると、レクトが立っている。シャワードでも浴びたのか、ラフな服装だ。

「・・俺、帰らない。」

つかつかと、歩み寄るレクト。

その、大きな手で、シンカの胸元をつかみあげた。

「レクトさん、乱暴は。」

「俺には逆らうな。」

止めようとするガシスを無視し、レクトはシンカの頬を平手でたたいた。

「・・・」

「お前は、ずっと生き続ける。少なくとも、俺やミンクよりずっとだ。それを嘆くな。ミンクは、本来ならもつと長く生きられたものを、コンイラの中毒のために長くはない。そうだろう？それをお前は知っている。だから、死に対する不安を持たなくていいだけ、幸せだと思え。」

「・・・」

シンカは、自分がいつか誰かに同じようなことを言つた気がした。

「それにな、お前に出会つたものは、幸せだ。最後まで、お前が見届けてくれるんだ。自分がどう生きてきたのか、どう死んでいくのかを、お前はちゃんと見ていてくれる。それに、誰もお前を失うことがない。それは、うれしいことだ。」

レクトの表情は、やさしい。

「少なくとも、俺は、お前が生きていてくれることに感謝しているんだぜ。」

「……レクト。」

頬に、温かいものが流れる。

レクトは黒い瞳を細めて、微笑んだ。

「泣くな。とにかく、お前のここでの役目はもう、終ってる。地球にもどれ」

「……あと、一週間なんだ」

「だめだ。いいか、明日迎えに来る。逃げるなよ」

青年の金色の前髪を、くしゃくしゃとなでて、そつと抱きしめる軍務官を、ガンスは満足そうに見つめていた。

冷酷とうわさされるこの男が、こんなにやさしい人間だということは、身近な人間にはよく分かっていた。だから、ガンスは、レクトの部下でいることを望んだのだ。

レクトに、なだめられ、とりあえずベッドに横たわったシンカだったが、やはり、研修を途中で止めてしまふことに抵抗を感じていた。ユージンを放つておくわけにも行かない。

シンカは、まだ夜が明けないうちに、そつと公邸を抜け出した。引きとめようとしたミストレイアの警備員たちには、申し訳ないが少し大人しくしてもらつた。

研修に必要な端末と、資料の入ったデータ。白衣と、携帯電話。シキにもらつたナイフ。それだけをリュックに詰め込んで、まだ、青い闇が占めるセトアイラスの郊外を、ただ歩いていった。

木々のない公園沿いに進むと、早朝のランニングをするおじさんや、犬の散歩をする女性など、プールプールで見た朝の風景に似た光景がある。

少し大きめのバッグを背負った青年を、偶然見つけた。それぞれの日常に戻つていく。きれいに整つた顔立ち、白いコートに蒼いマフラーを首に巻いた姿は、印象的だ。今は、金色の髪蒼い瞳のまま、本来の彼のままだ。気付かれる危険もあつたが、染めている時間はなかつた。

どこかに、適当なホテルを見つけて、そこで染めよう、そう考えていた。

公園を抜けると、向こうに墓地らしき丘陵地が見える。そこにも植物はなく、タイルできれいにモザイクを施された丘に、白い墓標が並ぶ。

確かに、この墓地に、アイリスが葬られたと聞いた。シンカの足が、そちらに向く。

「体力、ないな俺。」

独り言を言つて、シンカは丘陵地を歩く。少し、息が切れる。ふと振り返ると、公園が小さくなり、そこを行き交う人々が見える。先ほどより増えている。レクトの言つとおり、眼に写るすべての人を幸せにしようなんて、そんなこと考えているわけじゃない。俺の、周りにいる、ほんの少しの人たちだけ、彼らを、大切に思うだけだ。守れる相手を守らないのは、皇帝として、いや、男として駄目なんじやないか？

シンカはそう思つ。

白い都市に、朝日がさす。白い建物が朝焼けにまぶしく光り、濃い青だった空は、淡いグリーンに染まっていく。美しい光景だった。ミンクに、見せてやりたかった。

色素のない銀色の髪、赤い瞳、にっこり笑う表情を思い出す。ずいぶん、長くあつていらない気がする。電話くらい、してやらなくては、と思う。思うが。今は、俺が上手く笑えないことを気付かれてしまうだろ？。最近特に、そういうところは鋭い。きっと、心配しながらも、気丈に振舞ってくれる。そのいじらしい姿を見てしまったら、会いたくなってしまう。抱きしめたくなる。コーディンのことも、何もかも、どうでもよくなってしまうかもしれない。レクト流に、一人だけを大切にするのなら、それは、ミンク以外にありえなかつた。だから連絡をしないでいた。

アイリスの墓は、丘陵の一一番高いところにあつた。傍らに、くまのルーがいた。雨に濡れないように、ルーは小さな傘をつけてもらつっていた。

その赤い傘が、シンカの涙を誘つた。

いつか、アイリスが生きている頃、あの交通事故で奥さんを亡くし

た男に、俺は言つた。アイリスのために、生きて欲しいと。俺も、同じだな。

しつかり、生きないといけない。

その時、携帯が小さな音を立てた。

見ると、レクトからだ。

現実に引き戻され、シンカは首を振つた。息を一つ吐くと、電話に出る。

レクトは怒鳴りつけている。

「話、聞かないなら、切るよ。」

シンカの落ち着いた声に、相手は黙つた。

「俺、やつぱり研修を終えたい。俺は、自分自身をもつと知りたくて、研究に加わりたくて医学を学んでいるんだ。大丈夫だよ、ゲーリントンの言いなりにならなければ。」

「馬鹿が！」

まだ怒鳴るつもりなのか。

「お前は何も分かつていらないんだ！迦葉が動いているから、ゲーリントンに近づくなといつている！」

「迦葉と教授と関係があるのか？」

「そうだ。お前には、知らせてなかつたが、今帝国軍と情報部では総力をあげて、迦葉の壊滅のための作戦を遂行している。今、お前を迦葉の目の前に置いて、事を起させるわけにはいかないんだ。俺だつて、お前を守りきれるか分からん。」

「…、レクト。それだけの作戦なのに、俺の近くに教授が現れることが知らなかつたのか？」

一瞬、男が黙つた。

「カストロワ大公とも、なにか関係があるのか？」

「…勘は、いいな」

先ほどまでの勢いを失つて、レクトは表情を消している。

シンカは小さくため息をついた。

「利用したんだろ」

「表現が、あまりよくないな」

「おかしいと思つたんだ。あんたが俺の研修旅行を認めたときから。いつもなら反対するだろ？ 警備も最小限で、単独行動も多いのに何も言わなかつた。教授や大公が俺に興味を示すのを分かつていて、目の前にちらつかせた。……そつなんだろ？」

「だから、もう役目は終つたといつただろう？ それに、お前の好きなようにさせてやつたんだ、文句を言われる筋合いはないぜ」

何を企んでいるのか、レクトが言はずもない。

「…まだだよ。研修と、コーポレーションのことに決着をつけるから」

「できないぞ。先にこちらが動く」

余裕の笑みを浮かべるレクトのホログラムを思わず握り締める。

「…なんだよ！ 卑怯だろ！ もう、口出すなよ…」

手を離すと、レクトの映像が消えていた。送信設定を変えた、何か見せたくないのか。

「俺はお前が皇帝だらうがなんだらうが、好きにする。逆らうなど言つてゐるだろ？」「いやだ。」

シンカも歩き出した。

何か、レクトが行動を始めたのだ。

シンカは電話を切つた。

迦葉と教授がつながつてゐるのは、うすうす感づいていた。

教授の研究所で使用されるコンイーラは迦葉が惑星リュードから密輸したものだ。

だとすれば、大して採算の取れる仕事でもないものを、迦葉は教授のために行っていることになる。

無関係ではない。

教授がコーディンを利用して俺に近づくのも、迦葉の思惑が絡んでいるのか。

大公が、もし迦葉と関係があるなら、コーディンのことも知っているだろうか。

いや。

あの老齢な人物が、自らの地位を危険に晒すまねはしない。知つても、知らぬフリ。自分に都合のいい間は見逃す。直接自分が行動するような人間ではない。

そのために、彼はコレクションを持つている。

シンカは日差しが高くなってきたのを感じて、目を細めた。まずは、ゲーリントンにあたるのが早いだろ？

空腹に気付いた。

ホテルを探すのは後にして、どこかで朝食をとつて、そのまま病院に出勤しよう。髪は適当に美容院に入つて染めてもらおうか。そう考えて、公園を横切つたときだつた。

黒塗りの高速車が、こちらに向かつてくるのが見えた。通常の車両と違う高度を保つて、飛行制限された道路でないとこりを平氣で飛び越えてくる。

「げ、レクトだ！」

直感した。

慌てて、地下道に逃げ込む。

地下街の入り組んだ路地を進んで、出勤する人で混雑するトラムの駅に出た。

白い建物の窓から、外を見ると、ちらりとレクトの黒い飛行艇が見える。ついてきている。

「…」なんで、わかるんだ？

さつきシンカが登ってきた階段から、情報部のエージェントらしき男たちが駆け上がってくる。

「ちえつ！」

舌打ちすると、シンカは走り出した。

人ごみを縫つて、駅ビルの上の階に階段で登る。下から追つてくる足音。

三階くらいまで登ったところで、息が切れ始める。非常口を抜け、ビルの外階段に出た。

防護シートをナイフで破ると、飛び降りた。

真下にレクトの黒塗りの車。気付いたレクトは車の高度を保つ。派手な音を立てて、約二メートル下の車の屋根に降り立つたシンカは、ゆっくり高度を下げ始めた車から、地上に飛び降りる。通行人が驚いて道を開ける。振り返りもせずに、走った。

「馬鹿が。」

小さくうなつて、レクトは、エージェントに戻るように命じた。

「まあ、いい。居場所はわかるのだ。」

シンカの腕にはめられている腕輪、通称リングは、身分証明やカードの役割を果たし、通常特権階級と呼ばれる人々なら誰もが身に付けている。それがあることで、車を運転でき、物を買うことができ。シンカのそれは、まったく違うものだ。皇帝としての認証システム。それがあることで皇帝であるという証明になる。さらにいくつか機能を足してある。そして、本人は知らないが、そこから発信される特殊な電波で、常に彼の位置を把握できるのだ。外せば、そのまま厳戒態勢がしかれるため、決して外さない。レクトには、いつでも、シンカがどこにいるのか知ることができた。

「変だ。何で分かるんだよ。」

以前も同じ疑問をもつたことがあった。

それによって救われたこともあったため、あまり追求はしなかつたが、腑に落ちない。携帯電話を追跡されたのかな。

シンカは、念のため電話の電源を切った。

無人の美容院で、髪を染めながら、常に視線は外を見つめる。いつ、レクトが来るかわからない。

ロボットは、何も言わずにつつさと手際よく、シンカの髪を栗色に染めた。出勤時間まで、あまりない。

「アリガトウゴザイマシタ」

機械が言い終わらないうちに、シンカは病院へ向かっていた。瞳には、黒いカラーレンズ。これで、いつものルーになつた。

朝食はまだだが、病院のカフェで何かつまもつ。今日は免疫治療科だから、時間的な余裕はあつた。

まさか、病院にまでレクトが来る事はないだろう。そこで、シンカは思いついた。

そうだ、今夜は大公に泊めてもらおう。あそこなら、レクトも簡単には手が出ない。

この惑星で、レクトが遠慮しなければならない場所は、唯一そこしかなかつた。

「J愛読ありがとうござります
楽しんでいただけると嬉しいな…。

お知らせです

『水凪の国』という冒険ファンタジーのメルマガを始めました
「アルファポリス」で配信中 バックナンバーも公開しています
興味のある方はのぞいてみてくださいね

9・護るもの

大公は突然のシンカの来訪を上機嫌で受け入れてくれた。病院勤務の後だったため時間も遅かつたのだが、そんなことを気にしている様子はない。穏かに微笑んでリビングのソファーにシンカを座らせた。

「先日は、失礼しました。」

素直に頭を下げる青年に、五十代に見える男は白い髭をなでながら笑つた。

「いや、お気になさらずに。」

「あの、突然お邪魔したのはお願いがありまして。」

大公は金色の独特の瞳で青年を見つめた。

「軍務官から、もし陛下が訪ねてきたら連絡をして欲しいと言われておるのだが。」

「それは困ります。」

「いいのですかな？あれは怒らせると恐い。」

レクトのことを言つている。コレクションだったのだから、シンカよりレクトについては詳しいのだろう。

レクトは先回りして大公に連絡をしてあるといつことは、大公＝迦葉でないことは確かなのだろう。

ではゲーリントン＝迦葉なのか。いつもうるさいゲーリントン教授が、今日は休みで姿を見せなかつた。瞬時にそれだけ考えながら、シンカは大公に笑いかける。

「申し訳ありません。僕は今、地球にもどるわけには行かないのです。軍務官は強引に連れ帰らうとしていますが。」

「匿つてほしいと？」

目を細める大公にシンカは立ち上がりて頭を下げた。

「はい。お願ひします。」

くくと低く笑う大公。

「いいでしょ。私は何も知らなかつた。あなたは今、あの金色の髪でも蒼い瞳でもない。一介の研究生だ。」

「はい。ルーと呼んでください。」

顔を上げてにつこり笑う皇帝に大公は嬉しげだ。

（カツツェやゲーリントンを動かした効果はあつたな。）

そんな大公の思いも知らず、シンカは用意された夕食をおいしそうにほお張つた。

シンカの正面でワインのグラスを傾けながら、ゆっくり食事する大公は言つた。

「ルー。研修が終わるまでここにいるといい。」

「はい。」

シンカは熱いジャガイモのスープに舌を焼き、慌てて水の入つたグラスを口に運ぶ。その様子を目を細めて見つめていたカストロワが言つた。

「それから君に提案がある。私のコレクションにならんか。」

水を噴出しかけて、慌ててシンカはナップキンを口に当てる。ケホケホと顔を紅くしてむせた。

「君に資金が必要ないことは分かつておる。代わりにな、私の持つ政治力を提供しようではないか。」

「けほ、……つまり、皇帝に協力して貰ださる、ということですか？」

カストロワの不思議な金色の瞳が、青年をじつと見つめた。たくさ

んのものを見てきた老獴な瞳。その真意はつかみにくい。

「まだ十九だったね。その身一つにこの宇宙は重からう。何もかも君一人で背負うことはない。私なら君の気持ちをわかつてやれる。君を助けてあげられるのだ。」

「コレクションの一人として、ですか。」

蒼い瞳が真っ直ぐに見つめ返す。

「そうだ。皇帝がどんな政治を行うか、それはとても興味あるところだ。どう生きてどう死んでいくか。それこそ、銀河の歴史そのものだ。」

「大公は長寿ですからね。百年以上生きるというのはどのよつた気持ちですか？」

「ん？」

シンカは大公の表情をじっと見つめた。シンカの質問が意表をついたのだと理解できるほど、大公の表情は無防備になっていた。

「寂しくはありませんか？」

微笑むシンカ。その裏のない笑みに大公はかすかに苦い思いをかみ殺す。まるで無垢な子どもを相手にしているような心地悪さを感じていた。

「そんな質問は、初めてされたな。……そうだな、寂しいというより空しいに近い」

少し遠くを見つめ、大公は話し始めた。

「セダ星人は、その長寿ゆえに極端に人口が少ない。子孫を残す意欲も低い。この太陽帝国に開発され、自分たちの惑星以外の人類を知つてから、さらにその傾向は強まつた。地球人の短い人生と、それにかける情熱やめまぐるしい生き方はセダ星人にとってうらやましくてな。とても輝いて見える。それに憧れれば憧れるほど、セダ星人の出生率は落ち、人口も減少する。生きることに執着しない我

々は、同時に種としての進化も止めてしまった。」

その意味するところは一つ。

シンカは小さく息を吐き、「種の絶滅、ですか」と大公を見つめな

おした。

「そうだな。ゆっくりと絶滅に向かっているといつていいだろ。それを愁いる気持ちは私にはない。だから、私はコレクションが面白いのだ。」

「残念ながら、大公。僕のほうが大公より長く生きるみたいです。このまま、成長もせずに」

大公は、ワインをグラスに注ぎかけた手を止めた。

「僕が特殊なのはご存知でしょう？ 昨夜、主治医に言われました。もう、これ以上成長もせず、ただ生き続ける。だから僕は、あなたのコレクションにはなれません。」

「そうか。生き続ける、か。」

「僕も同じ寂しさを、きっと味わうんでしようね。」

「ふふ、おかしなものだな。そなたと、こんなところで意気投合できるとはな。」

「そうですね。でも僕、レクトに言われたんです。お前に会える人は誰でも幸せだつて。誰もが人生の最後まで、見届けてもらえるつて。残るのは寂しい。けれど、自分に出会った人がどう生きてどう死んでいったのか、きちんと見届けるべきだと。そのとき思いました」

「ほう。」

シンカは常々思っていることを語った。これを語るのは、大公が初めてだつたかもしれない。星を眺めるたび、そんな思いが強くなっていた。

「ロマンチックな考え方で、笑われてしまうかもしれません。僕は、ユンイラという植物は、惑星リュードが自らを浄化するために生み出したもののように思えるんです。星は、その中にどんな生き物を抱えていても、ずっと変わりません。いつか星の命が途切れまるまで。その長い時間の中で、星はたくさんの命を生み出し、滅ぼしていく。僕があそこで生まれた偶然も、星に必要とされているのだと思っています。僕の中にはユンイラの遺伝子がある。僕が生き続ける事でその遺伝子はいつか、人類の役に立つときがくる。僕がそのためにこの命を授かつたのなら、その使命を全うするべきだと思います。」

シンカの表情は穏やかで浮かぶ笑みはどこか儂い。

「研究を、始めるのかな？」

「はい。決心がつきました。僕自身の持つユンイラは人類の役に立てるでしょう」

若い皇帝の瞳は遠く宇宙を映すかのように蒼い。そこに未来を見たような気がし、カストロワは目を細める。

「僕だけではなくて、大公。セダ星人はこれから的人類に必要な存在です。」

「なぜかね。我らはゆつくりとだが、破滅に向かっている。」

シンカは続けた。

「この宇宙に地球人が進出して、彼らはその命の短さを実感します。何をするにもたくさんの時間がかかるようになつた。惑星一つを見つけるのに平均で百年かかっています。そこを調査し、入植するまでにさらに五十年。一人の地球人がその一連の事業を見届けることはできません。星を治める。宇宙に平和をもたらす。人々を幸せにする。その大きな仕事は、今の地球人の寿命では困難です。

長く見守れる存在が必要なんです。セダ星人がふさわしい。地球上ほど生きることに執着がなく、同時に富や名誉にも無関心だ。永く、星を安定させることができる。星を守れる存在なのです。」

「そんな風に誉められたことは、なかつたな。」

カストロワは、青年の瞳の色に宇宙を見た気がした。シンカの、穏かな表情とその瞳の蒼は、宇宙の深淵を映し出しているようだ。

「僕は守りたいものを、守るために皇帝になりました。レクトに言わせると、それは傲慢だそうです。けれど、自分にできることとできないことを決めてしまつては、あきらめてしまつては、いけないと思うんです。欲張りですけど、どんなに大変でも守るべきと思うものは、すべて守ります。」

そこで、シンカはにつこりと笑つた。愛嬌のある、笑顔になる。「セダ星人も、大公、あなたのことも守ります。あなたの存在は僕には必要です。」

「ふむ」

大公の薄いグリーンの顔が、少し照れたように見えた。

「コレクションにはなれませんが、友人として、そばにおいてください。」

少し首を傾げて大公を見つめるシンカの笑顔は、今までカストロワが見てきたどんなコレクションとも違つていた。どんな人物とも違つて見えた。

自分に近づくすべての人間は、何かしらを求める。富、名誉、力。あれほど可愛がつてゐるレクトもそうだ。しかし、この青年、太陽帝国皇帝は、何も、求めていなかつた。そして、私を守るという。

出されたデザートに舌鼓を打ちながら、シンカはにっこりと微笑んだ。

大公の前に出されたフィグ・ブランショに目を止める。じつと見つめ、次にカストロワを見上げた。

「食べたいのか？」

「それ、なんですか？」

照れながら興味を隠せない、青年の表情に、大公は笑った。
「干した白無花果だ。ワインにあう。」

「いただきます！」

子供なのか、なんなのか。レクトが惹かれる理由が、分かつたような気がしていた。

9・譲りもの (前書き)

いつも「」で読みあわせたります
らんららの最新作「音の向こうの空」が、「アルファ・ポリス」にて、
Picchuコンテンツとして紹介ただけることになりました
10月3日はサイトのトップページで、以降は「小説、歴史」ジャンルのページで。

よろしければのぞいてやってくださいね（珍しいことなので舞
い上がっています…）

では。蒼い星シリーズ。続きをどうぞ！

公邸の広いリビングで、栗色の髪の男が、いらだたしげに歩き回っている。落ち着かず、煙草を先ほどから何本吸つたことか。ソファーに腰掛けた黒髪のシキは、軍務官が視界を左右に行き交うのを、ちらちらと横目で見ながら、供されたブランチーをなめる。「何を、そんなに慌てているんですか。レクトをへらしくないですよ。」

「ふん。」

ほとんど答えない。

冷静沈着、恐ろしいほど洞察力と判断力が魅力の彼が、今はその感情を露にしている。

こと、シンカのことになると、この人は変わる。不思議というか、がっかりするというか。

シンカも、恐いもの無しの大胆な性格をしているが、レクトにはかなわない。

親子、だからか。この二人の間には、他人の入り込めない何かがある。

シキは、煙草をもみ消しながらそんなことを考えていた。

「レクトさん、シンカの居場所はいつでも分かるんじゃなかつたですか？」

「ああ。今は、カストロワのところだ。」

「じゃあ、安心じゃないですか。」

じろりとにらまれ、シキは言葉を区切る。

「お前は大公の性格を知らんからな。あれは、男でも女でも、欲しいと思えば手に入れれる。」

「・・・シンカがみすみす言いなりなるとは思えませんよ。ガキじゃあるまいし。大丈夫です。それより、俺はコーランの行方が気になつていてるんです。」

「ああ。」気のない返事。

「・・・搜索は進んでいますか？」

「・・・いや、迦葉が絡んでいるらしい。搜索はそこでやめさせた。」

シキが立ち上がった。

向かい合つた二人はほとんど同じ身長で、体格も同じだ。迫力がある。

「どうしたことですか？」

「迦葉の手引きで連れ出されたと考えている。放つておいても迦葉はシンカの暗殺にユージンを利用する。脅迫が来るかも知れんし、もつと他の手を使うかもしれん。」

「それを見つと/or>うのですか？！」

「・・・ユージンは、どうなつてもかまわん。いつぞ、この件で迦葉に殺されてくれたほうが、後の憂いがなくていい。」

栗色の髪の軍神は、苛烈な発言をこともなげに言い放つ。シキは目を見張つた。

「どうしたことですか？」

「・・・シンカが振り回されるからだ。」

「それは、あいつが悪い！下手に手を出すから。大体、ユージンがあんなふうになつたのも、シンカに責任があるじゃないですか！」

レクトは、煙草をもみ消すと、座つた。

立つたままのシキを見上げてにやりと笑う。

「シンカがあんな年上に手を出すわけがないだろ。お前とは違うぜ。バカがつくくらい生真面目だ。」

シキは、納得が行かないのか、黙り込んだまま。

「まあ、座れ。まさか、お前まで、地球のあんなゴシップ誌に振り回されるとは思わなかつたぜ。お前、あいつがどれほどやさしい人間か知つていいだろ。」

シキは、答えない。冴えない表情のまま、レクトの向かいに座つた。レクトはグラスに氷を足す。カラント、きれいな音がした。シキが黙つて、ウイスキーを注ぐ。

「もともと、ユージンは少し、神経質な面があつてな、異常なほど執着ぶりを危惧する声もあつた。注意するように言つてあつたんだが、文政官アシラのお気に入りでな、そう簡単には解任できなかつた。」

「あの仏心街の事件。覚えているか？」
「はい」

「あの時、ユージンがシンカの居場所を突き止めたのは、アシラの認証を使ってシンカの居場所を特定したからだ」

「！それは、機密だと…」

「そうだ。お前だけには知らせてあるが、ユージンはその情報とアシラのIDを盗んだ。それだけじゃない、俺やお前、ミンク。シンカに関わる人間のほとんどを調べている」

「何かの、組織が関わっているんですか？」

そこで、レクトはグラスをあおつた。グラスは再び空になる。

「いや。調べたが、それはない。個人的な興味からだ」

「個人的な、興味？」

「シンカに惚れてる。ただ、それだけの理由だ」

シキは黙つた。

それだけの理由で、そんな危険なことをするのか？

「おかしいと思うだろ？」「

シキは頷いた。

「そう、おかしいんだ。ユージンは、シンカに偏執している。それは、常軌を逸しているんだ」

「それで、ここまでこじれたのか。そうか」

両腕を頭の後ろで組んで、ソファーで伸びをするシキ。心にかかるつていた靄が晴れたような、満足そうな顔だ。それを見ながら、レクトは考えていた。

こいつに入った情報、大公に操作されていたかもしれん。カツツエを使えば、簡単だろ？ それで、シンカのそばから引き離されいた。

相変わらず、えげつないことをする。操られる人間は、あたかも、自分の意志で行動したように錯覚する。カツツエも、大公には逆らえないしな。

迦葉については、情報部が別で動いている以上、下手に動けない。そして、それに関して、この男に知らせるわけにはいかない。

レクトが口を開いた。

「しかし、お前が、女に手を出すうんぬんで、シンカを説教するとは思わなかつたぜ。人のこと言える立場じやないだろうが」

「俺は基本的に、誰かさんと同じで一途ですから」

軽く正面の男を睨む。レクトは、そ知らぬ顔をしている。そうだろう、結局、ロスタヌスを今も愛しつづけている。だから、誰とも結婚しないのだ。その、貫き通す一つの想いが、レクトの魅力の一つになつているのかもしぬれない。

黒髪のシキは、尊敬する上司を、嬉しそうに眺めた。

9・護のもの (前書き)

お待たせしております
カストロワの手元に飛び込んだシンカ。さて、何が起こるのか…

シンカは、大公に用意してもらった部屋で、いくつかの仕事をこなしていた。ユージンがいない分、今後のスケジュールの作成には手間取つたが、業務内容に関しては分からぬものがほとんどないもので、それほど問題になることはなかつた。地球の中央政府ビル内の担当者と、意見交換したり、日程調整をしたりと、今までユージンが行つていた仕事も少し面白い。下水担当者からの報告を受けたときには、担当はまだ、主任になりたての若者で、相手が皇帝陛下本人と知ると緊張して、何度も言葉を間違えた。

そんなことを思い出して、少し笑う。

その時、携帯電話が鳴つた。

ここについたときに、レクトに追われる心配がなくなつたため、再び起動させておいた。小さな音とともに、システム画面上に小さなホログラムが立ち上がつた。

ユージン、だつた。

「ユージン。」

その亜麻色の美しかつた髪は、風だらうか乱れている。青白い顔、それでも精一杯、お化粧したらしく、口紅の色だけがやけに目立つた。瞳の光に、強さはなく、哀しげに、微笑んでいる。

「陛下。」

「今、どこにいるんだ？ 大丈夫か？ 一人なのかな？」

シンカの表情を見て、どう思つたのか、穩かに笑つた。その、哀しそうな顔に、シンカの鼓動が高まる。

「ユージン、どうしたい？ 僕が、迎えに行つてもいいのか？」

涙がこぼれているようだ。そつと、それをふいて、変わり果てた秘书官は、首を横に振つた。

「いやす。最期に陛下のお顔を、拝見したくて・・・」

「ユージン、だめだよ。俺は、あなたに会いたい。会つて話そう。

な。

「私は、陛下に、何をしてきたのか・・恥ずかしくて、申し訳なくて・・・」

「見損なうな、俺はそんなことあなたを嫌いになんかならない。命令だ、コーディン。あなたは、俺の秘書官なんだからな。そこにいるんだ。いいか。俺が迎えに行くまで、そのまま待っていてほしい。」

泣いている。

「陛下。愛しています」

「わかつていてるよ、ずっと、分かっていたんだ。あなたの気持ち。俺のこと、待つていて欲しい。」

「ありがとうございました」

「コーディン！」

映像が、乱れた。どこなのか、くらい画面になつて、不意に通信が途絶えた。

「コーディン！」

シンカは、震える手で座標を割り出すと、すぐにレクトに連絡した。

「レクト！コーディンが、コーディンが！」

「なんだ、どうかしたのか？」

「・・今、電話があつて、急いで欲しい、俺も行くから、すぐに、彼女、死ぬつもりだ」

「・・・わかつた、お前はそこを動くな」

「俺のことはいいから、座標を送る、だから早く。」

「分かつた。いいな、お前は動くなよー。」

じつとしていられるはずはなかつた。

シンカは、薄いニットに、黒いパンツという軽装のまま、カストロワの部屋を訪ねた。

その表情から、事の重大さを察した大公は、シンカの言うとおりに高速の車を用意してくれた。服装を気にする余裕もない若い皇帝の

ために、「コードを一枚持ち、車に乗り込んだ。

シンカはただ、遠い、コージンがいた海に、視線を向けていた。力ストロワは、落ち着きなく、かすかに震える若い皇帝の肩に手をつき、じっと見つめていた。

先ほど、守りたいと言つていた。あの自信に満ちた言葉とは、正反対なこの様子。守りたいといったすべてに対し、こんな風に思いを込めていたら、つらいだらう。

それでもその生き方を選ぶところが、強さともいえるのか。興味深い。

そこには、すでに緊急車両が到着していた。一機の軍の飛行艇と、救急高速艇。海上には三隻の救命艇が下ろされている。暗い海面を、発光弾が白く照らす。

赤いランプを点滅させた、救命艇は、女性の体を救命士に引き渡したところだった。

風の強い、寒い郊外の海岸。暗く、黒い岩に白い波がぶつかってはじける。波の音は恐ろしいほどに低く鳴り響く。寒いこの星の海は、深い藍色で、時折砕けた波のかけらが、シンカの頬をぬらした。肩にかけた「コードが風に飛ぶことも気付かず、シンカは女性に駆け寄つた。

コージンは、白い、白い顔をしていた。一目でチアノーゼの兆候がわかる。救急救命士ができぱきと適切な処置を施している。

「コージン」

小さくつぶやいて、立ちぬくすシンカの肩を、レクトがたたいた。その後ろに、シキの姿もある。

「お前、来るなと言つたのに。発見が早かつたからな。大丈夫だ。コード・ロティに搬送される」

うなづいて、シンカは救急高速艇に乗ろうとした。

「だめだ」

腕を捕まれ、レクトを見上げる。

「俺、行くよ」

「お前の正体がばれるぞ。今、レンズ入れてないだろう。大丈夫、シキがついている」

シキはすでに救急高速艇に乗り込んでいる。シンカは、一瞬視線を落としたが、再びレクトを見上げた。

「行くよ」その表情は、強い。

「だめだ」

さらに腕を引いて行かせないようにする軍務官に、シンカは眉をひそめた。蒼い瞳で睨みつけると、強引に振り切りとする。しかし、レクトの力も強い。

「放せよ！」

「シンカ！ お前を行かせるわけにはいかない」
暴れようとするシンカに、当て身をしようとするレクト。とつたによけると、右腕でバックブローをはなつて、引き離した。再び掴みかかる手をすり抜けて、身を翻す。
飛び立とうとする救急高速艇に駆け込む。

「シンカ！」

いらだたしげに右頬に手をあてて、軍務官は電話を取り出す。

シンカは、捕まっていた左手首をなでながら、救急高速艇の診察台に横たわる、コーディンを見つめる。

シキと目が合つ。

隣に座つた。目の前のコーディンを見つめる。シキに、話すことは浮かばなかつた。

処置している救命士に頭を下げた。

その救急救命士は、見たことがあつた。救急救命室で、何度か患者の受け渡しをしている。まだ、若く、仕事に対する誇りにあふれていて、シンカは好感を持っていた。

「ルー、なのか？ なんでお前」

そう言つた彼に、青年は言つた。

「大切な友達なんだ」

女性を見つめたままの彼に、救急救命士はやさしく言った。

「大丈夫。バイタルも安定しているし、チアノーゼも改善した。衰弱があるくらいだ。安心しろ」

シンカは、彼の顔を見た。

「ありがとう。彼女、ファルクノールにアレルギーがあるから、それだけカルテに入れておいて欲しい」

「ああ。わかつた。そんな、落ち込むな！命が助かつたんだ。何があつたかしらないけどさ」

肩をたたかれて、シンカは笑った。

その表情は、やさしく、悲しげで、救急救命士の印象に強く残つた。こいつ、こんな顔だつたかな？救命士の青年は、処置を続けながら、そんなことを思つた。

シキも、なにも言わず、今は身分を伏せている皇帝と、その秘書官を見つめていた。

「ありがとうございます。大公自らお送りいただけるとは」落とされた「一トを拾つて、レクトが大公に微笑んだ。シンカとレクトとのやり取りを面白そうに見ていたカストロワは、口元の笑みを隠した手を離して言つた。

「いや、あれが、あまりに哀しそうだったのではな」

驚いた表情のレクトに、カストロワは言つた。

「何を見ている。お前、あれを地球に帰そうとしているだろ？。あれの意思を尊重してやれ」

「大公、それは」

「しばらく預かるぞ」

「ずいぶん、お気に召したようですね。コレクションになさったのですか」

眉をひそめて、切れ長の瞳を大公に向けてくるレクトに、カストロワは笑いかけた。

「コレクション？ そんなものではない。 そうだな、・・友達に、なつたのだ」

「友達！？」

驚いたレクトの表情を楽しむように、大公は低く笑った。

「驚くことでもないだろ。 それより、コート・ロティに行くと何かあるのか？ あそこまで引きとめようとするのは何かあるのだろう？」

コートの襟を寄せながら、大公が問い合わせた。

レクトは、手袋をしたままの手で、くわえていた煙草を取ると、横に並ぶ大公に言った。

「大公。・・ご協力願えますか。 あなたの、大切な友達のために」

「…」

大公は横目でレクトを見つめたまま、返事をしない。

その金色の瞳の意図を感じ取ると、レクトは大きくため息をついた。宇宙最強といわれた軍神は、珍しく視線を逸らした。

「いえ、私のために。・・お願ひします」

「お前にものを頼まれるのも悪くないな」

表情をこりりと変え、カストロワは上機嫌だ。

「人が悪いぜ…レイス」

未だに、ガキ扱いしやがる。 レクトは心の中で毒づいた。

「シンカならもつと、素直にお願いしますと言つ。 あれは、かわいい。まあ、お前はそこが面白いのだがな」

苦々しい表情の軍務官に、大公は嬉しそうな笑みを向けていた。

煙草の煙が吐息とともに白く染まる。 冷えてきている。 雪が降るのかもしれない。

「しかし。 一体どうやって、シンカは大公を懐柔したんだ」

部下への指示を終えたレクトは、ポツリとつぶやいた。

シンカは、大公のことは任せて欲しいと、自身ありげに言つてはいた。

大公が、本当に何の見返りもなく、自らの感情によって他人のため
にあんな行動をとるなど、初めてだった。自分は常に動かず、一つ
高いところからものをみる。

それが、今回に限って自らシンカに付き添つてきた。

（友達、だと？）

風に乱れる前髪をうるさそうにかきあげて、長身の男は一つ、白い
息を吐く。

一応、大公との長い付き合いから、一番近い存在と、多少なりとも
自負していたレクトは、それでもまだ、自分の知らない大公の一面
があつたことに、それが、ただシンカのみに向けられていることに、
軽い苛立ちのようなものを感じていた。

ユージンとともに病院に到着したシンカは、治療が終わって入院科が決まるまでの間、救急救命室の一室で秘書官の寝顔を見つめていた。

白い顔は今は少し赤味が差し、規則正しく刻まれる鼓動がシンカを安心させる。

目覚めてからが大変なのが。

彼女が目覚めた時、どんな状態なのか。

自分がここにいていいのか。

迷いながらも、シンカは離れられずにいた。

そつと、ほおにかかる亜麻色の髪を整えてやる。まだ、少し濡れている。

シキは、戸口の脇に立つたまま腕を組んで、その様子を見ている。黒髪を短くしている彼は精悍な容貌で、背の高い筋肉質の体躯をミストレイアの制服に包んでいる。

アイボリーを基調とした服は、袖の濃紺のラインと、ネクタイが華やかさを添えている。襟の小さな金糸の刺繡が彼のミストレイアでの立場を表している。今は、コートを左腕にかけたまま、部屋の片隅にたたずむ。

先ほどまで出入りしていた看護師がシキに見とれていた。

そのおかげなのか、ルーの瞳の色が違うことに注目するものはいなかつた。

看護師も他の患者にかかりきりのようで、今は室内に一人だけだ。一言も口を利いていなかつた。

シンカは、先日のシキとのやり取りを思い出していった。ゲーリントンの研究所から、コーディングを移送してもらつて以来、一度も話していなかつた。

まだ怒つてゐるんだね!。

今は何をどう言つても、せつと無い訳にしかならない。

だから、シキの視線を感じながらも、背を向けたままだつた。シンカは気持ちをコーディングにだけ、変わつてしまつた美しい秘書官にだけ向けていた。

「悪かつた」

ぽつりと、シキが言つた。

シンカが顔を上げる。

その蒼い瞳は、大きく見開かれている。

「レクトさんに聞いた。おまえ、水くさいだろ、ちゃんと言えよ」

「…言えないことだつてあるよ。シキだつて、そうだろ?」

知るべきでないことを知つてしまつたがために、コーディングは立場を失う。それを思えば、シキを大切に思えばこそ、言えない事もある。シキもきっと、マリアンヌのことを言えずにしてははずなんだ。

俺に協力して欲しいと思っているはずだ。

だが、言えずにはいる。俺のことを思いやつてくれていてるから。そう、伝えたかった。

「お前、俺を信じていかないのか?」

「そんなこと、言つてないだろ」そういう意味じゃないのに。

「……まあ、俺もお前のこと信じてやれなかつたしな」

ふと息をひとつ吐いて、シキは出て行つた。

「シキ!」

振り返らない。

シンカは立ち上がったものの、また座った。伸びた前髪をかきあげて、うつむく。ため息が出た。どうして、こんな風になってしまったのか。大切な、大好きな友達なのに。

「もう、安心ですね」

女性の声だ。

振り返ると担当医のマクマスだった。黒い髪をきつちりと結い上げ、ときぱきとした動作は、元気な印象がある。

「ドクター・マクマス」

部屋に入ってきたマクマスは、シンカの横に立ち、ゴージンを見つめている。

「ありがとうございます。ドクターのおかげです」

「いいのよ。仕事だから。それに元々そのつもりだったのだし」

にっこり笑う研究医に、シンカは蒼い瞳を向ける。

「あの？」

女医は肉付きのいい頬を緩めた。

「お待ちしてました。皇帝陛下」

「え？」

こめかみに、硬い感触。

何かを感じ取つて、シンカは体をこわばらせた。

ドクターはレーザー銃をシンカのこめかみに突きつけていた。

「！」

「動かないで下さい」

固い銃身の感触が、全身の神経をあわ立たせる。

「ドクター。どうして？」

「腕を後ろに回して。両方よ」

シンカの両手首を、白衣のポケットから取り出した拘束帯で、素早く縛り上げた。銃を突きつけたまま片手でこなすその手つきは、かなり慣れている。

強化纖維でできた拘束帯は、レーザーでなくては切ることができない。シンカの手首のリングに仕掛けられた低出力のそれで、上手く行けば切れるかもしね。

ただ、この場所はコーディンがいる。様子を見るにした。

「ドクター・マクマス。何の目的ですか」

銃を突きつけたままシンカのポケットを探っていたマクマスは、携帯電話を見つけると喉の奥で笑う。

その表情は普段の彼女と何の変わりもない。

「おかしくなつてしまつたわけではないみたいですね」

「ルー、優しいわねえ。皇帝陛下がルーに成りすましていると知つて大急ぎで手配したのよ。座りなさい」

シンカは押されるまま、コーディンの足元に腰をかけた。

「レクト・シンドラ。知つてるわよね」

シンカは頷いた。

「どうやら、組織の壊滅を図つてこらうらしいのよね。それを阻止するためあなたを利用させてもらうの」

「迦葉、か」

「ふふ、とマクマスは笑つた。

「残念だけど、俺は役に立たないよ。レクトは俺のために止めたりはしないと思うけど」

「そつかしら？あなたがコーディン・ロートシルトを放つて置けなつたように、いくら冷酷な軍神と呼ばれていてもね。自分の子供を

見殺しにはしないんじゃないかしりっ。」

シンカのなかで疑問がつながった。

ゴージンが帝国軍基地から連れ出された理由。
郊外の海で自殺する前に電話をしてきた理由。
判断力のない彼女を利用して、俺をここに連れてこさせた。

ふと、レクトが引きとめようとしていたことを思い出した。

……後で何を言われるか分からなーいな。

「あら、反論しないの? やつぱり、親子なの?」
「似てないだろ?」

「似てるわよ」

マクマスは携帯電話を開くと、画面を眺めた。
「どちらでもいいよ。とにかくどうするつもりなのか知らないけど、
ここにこいつしていても仕方ないんじゃないか?」

「もうすぐ始まるわね」

9・譲りもの (記書き)

お待たせしました では、続をお読みあれ～！

シンカは隙をうかがおうと女医が携帯電話で何か検索している横顔を盗み見る。

後ろ手に縛られたそれをどう断ち切りつかとリングの操作を始めた時。

「ルー、様子は……ドクター！」

ミオだった。

マクマスがミオに気を取られた一瞬に、シンカは弾みをつけた蹴りで女医の銃を持つ手を蹴り上げようとする。が、後ろ手に縛られたシンカの動きはいつものようには行かない。

一瞬遅かった。

マクマスは腕でシンカの蹴りをかわすと、銃をベッドに横たわるコージンに向けた。

「この子を殺したいのかしら？」

「……やめろ！」

「じゃあ、大人しくしてほしいわね」

にやりと。

尊敬していた内科医が銃を自分に向けるのをシンカはじっと見ていた。

握り締めた拳に力が入る。

！

不意に放たれた白い光線は一瞬の後に、シンカの右肩に消えた。

「ルー！？」

リングを操作する余裕が奪われ、目のぐらむ痛みとミオの悲鳴。か

すかな悲鳴がすぐに途絶え、シンカが体勢を整えて顔を上げたときには床にミオが横たわっていた。

痛みに奥歯をかみ締めた。

「ミオー・ミオ…」

こめかみを小突かれて、シンカは床に座り込む。

ミオ！

白衣の背中はじわと赤く染まる。今、処置すれば、助かるはず。女医はと見上げれば、薄笑いを貼り付けたまま銃をベッドで眠るコージンに向けようとしていた。

「やめ、ろー！」

コージンの前に立ちはだかる青年に、マクマスはこいつと無邪気とも思える笑顔を見せる。

「馬鹿な子ね。それじゃ身動きでき niediでしょ。あなたの命をかけるほどの女なの？」

その頃ちょうど、ポート・ロティ大学病院の急患受付に、そぐわない黒服の大男が一人駆け込んできた。黒いスース姿、顔にはサングラス。この深夜にその姿があからさまに普通ではない。

男たちは人々の視線を集めながら受付のイランに尋ねた。

「ファルム・シ・デアストルはどこにいる？」

「ああ、三番の……」

言い終わらないうちに一人が駆け出で、イランは怒鳴った。

「ちょっと、ちょっと、カードは？身分証は？受付してよ、一もつ！なんなのよ」

氣付くと、待合にいた患者の注目を浴びていた。治療のためにあち

こちらにいる患者も迷惑そうにこちらを見ている。

「あ、はは…すみません」と声を小さくし受付に座りなおした。

深夜。

先ほどの救急艇以来、急患はない。珍しいほど静まり返った夜勤だ。静か過ぎた。

イランは小さく首をかしげた。

「イラン、なんか変じやないか？」

コードィネーターのクリフトが太った体を揺らしながら、イランの背後でつぶやいた。同じことを感じていたイランは視線だけで頷く。「なんか、いつもどちがわないか？年寄りや子供が一人もいないぜ」「そうね。なんか変ね」

端末に視線を向けるふりをしながらも、イランはカウンターの外に立つクリフトに眉をひそめて見せる。

時刻は深夜三時。普段、この時間にはそんなに患者はいないはずなのに、今夜はやけに多い。多くは静かなのは通常良くある子どもの姿がないのだ。

この晩、宿直の医師はマクマスとミオ、それ以外に消化器科の準研究医の三人だけだ。看護士は四名。それにこの二人。それよりも多い人数の患者など、この時間には珍しい。いつもなら交替で仮眠が取れるのに今日は全員が働いている。待合室には、二十名近くの人間がいた。

酔っ払って暴れる男とそれを押さえる仲間らしき男たち。その作業着は機械技術者のようだ。彼らとは離れた隅に座っている、スーツをきつちり着て神経質そうに青白い顔をうつむかせてている青年。喧嘩した様子の男たち数名。タクシーの運転手風だ。

具合の悪そうな男性に寄り添う、体格のいいでっぷりした女性。待合室の一番奥に、壁にもたれて立っている派手な女性。金髪を長

くした彼女は、胸元を強調したスーツに身を包み腕を組んで待合室の様子を眺める。

レザイアだつた。

レクトが珍しく電話に出ないので勘を働かせて公邸に行つてみたが、そこはすでに誰もいなかつた。シンカが地球に帰つたという情報は得ていないので、病院に来てみたのだつた。

そこでレザイアは気付いてしまつた。

今、受付に駆け込んだ怪しい二人の男、ファルム、つまりシンカのことを探した二人は、情報部のエージェントだ。何かがあつたのだ。そして。

この待合室にいる酔っ払いの男。あれは、地球では手配中の犯罪者だ。他にも数人、どこかで見た記憶がある。どれも犯罪がらみだ。偶然にしては何かがおかしい。

どこかで見た記憶のある数人の顔をリングに仕込んだカメラで撮影すると、レザイアは煙草を吸う振りをしてそつと時間外の待合室を抜け出した。

病院のエントランスを出ればひやりとした風に肩をすくめる。先ほど撮影したデータをレクトに送る。軍務官なら何か知つていいかもしない。

すぐに返事がきた。

「君はホテルに帰つて、じつとしていろ」

「うメールにある。

「なによ、誓めてもくれないのね」

紫煙をふつと吐き出すと不満そうに肩をすくめ、レザイアはもう一

度待合室に戻った。

その時には先ほどとは様子が一変していた。
患者の姿がない。

太った女が受付の女性とコーディネーターを銃で脅している。背後の書類棚の向こうに看護士が四人、そこにドライバー姿の男たちに連れられて、準研究医が加わった。レザイアは入り口近くに立っていた神経質そうな青年に銃を突きつけられた。

「！何よ！なんなの？」

男は黙つて、ただ銃を女性のほうに当てている。

その時、悲鳴が上がった。

数分前。

病院の救急の搬入口の外でシキは氣を落ち着けようとタバコを吸っていた。

強い風にほこりが舞い、目を細める。

「何か、用ですか？」

身じろぎもせずに声を発したシキに、背後にたたずむ白衣の男は一瞬ひるんだ。そつと近づいたつもりだった。ゲーリントンはふと笑うと前髪をかきあげる。

「いえ、先日はどうも。結局、彼女、正氣に戻らなかつたんですか」シキは振り向いた。

背の高い、リドラー人の男がにやりといやみな笑みを口元に浮かべていた。

「喜んでいるように見えますよ、教授」

「そうですか？ 一つ、お願いがあるんです。シキさん、あなた軍務官と直接連絡、取れますよね？」

シキはにらみつけた。

「呼び出してください。私の知っている番号では、直接お話できませんので」

「何のつもりだ」

シキの正面から数名の男が囲むように近づいてきた。皆、武装している。

「取引です。あなたに危害を加えるつもりはありません。彼らは私の腹心でね。とにかく、軍務官と今すぐ、直接話をしたい」

「……いいだろ？」

シキは数メートル先で止まつた男たちに一瞥をくれ携帯電話を取り出した。

「レクトさん、俺です。シキです。すみません、ゲーリントン教授があなたと話したいというのですが。よろしいですか」

電話の向こうの男は何かしら問題があるので、ホログラム撮影を拒否しているのか音声だけだ。感情の分からぬ口調で、「いいだろう」と言った。

シキがデンワを教授に渡すとゲーリントンはにやりと笑った。

「軍務官、すべて予定通りのようですね」

『……』

「一つだけ、困つことになっていますよ。言つたでしょ？ 遷葉の前にシンカをふらふらせれば、こうなることくらい。いえ、そんなに怒鳴らないでください。一つ、取引しようじやありませんか。私なら、彼らを止められます。どうですか？ 変わりに私を皇帝の専属のドクターにして欲しいのですが」

隣で耳を済ませていたシキが、組んでいた腕を解いた。

「あんた、何を言つている！？」

「おや、反対ですか？いいんですか？」

レクトも即答だったようだ。ゲーリントンは悔しげに電話を睨む。教授の持つ携帯電話を奪い取ると、シキはゲーリントンに詰め寄つた。

「どういふことだ？」

背の高い男は、ふんと鼻で笑つた。

「聞こえませんか？そろそろ、悲鳴か何か」

その時、悲鳴が上がつた。

受付の女性が床を見つめる。そこには、あの手配犯がエージェントの遺体を引きずつっていた。奥の病室から引っ張つてきたようだ。続けて、もう一人。

そして。

白衣の女医が栗色の髪の青年を引っ張つてきた。

「ドクター！何しているんですか！ルー！」

受付にいたコーディネーターのクリフトが驚く。傍らのイランは青い顔をこわばらせて、女医を睨んでいる。

シンカは両腕を縛られ、銃をこめかみに当てられている。女医がかむ前髪に、苦しそうな表情だ。白いセーターの肩が血で染まつていた。

「シンカ！」

小さいレザイアの声が聞こえたのか、マクマスと目が合つた。覚えのある女性にマクマスは嬉しそうな笑みを漏らす。

「あら。あなた、また来たの？しつこいわねえ。ルクースのレザイア」

「どういひまかしら？」

につこりと冷たい笑みをお返しして睨みつけるレザイアを、傍らの男が突き飛ばすように前に歩かせる。

「あなたにスクープをあげるわ。嬉しいでしょう？なかなか、撮れるものじゃないと思うわよ」

レザイアは眉をひそめる。

「何のつもり？」

女医はシンカの肩をぐいと押されて膝をつかせると、あごで作業着姿の男に指示を出す。男が液体の入ったボトルを持ってきた。

「ほら、元に戻してあげるわ。下を見てなさい。」

ボトルのふたを開けて、マクマスは無造作にシンカの頭にかけた。見る見るうちに栗色の髪は金髪に戻っていく。

染めた髪のリムーバーだろう。強烈な薬品の匂いに、シンカがむせた。続いて飲料水をかけられる。

滴る水の下で、シンカは苦しそうに眉を寄せているようだ。少し頭を振った。揮発性の薬品が目に入り、瞬きも呼吸もままならない。ぎゅっと閉じた瞳が開かれたときには赤く充血していた。金色の長いまつげから、涙なのか水滴なのか。照明に煌きながらいくつも落ちる。

「知っているかしら？この子が、太陽帝国皇帝だつてこと」

だまつているレザイアに「あら、知つてたの？つまらないわね」とマクマスはニコニコと笑った。人質たちは目を見張った。

イランがつぶやく。

「うそ……でしょ？」

マクマスはちらりとイランを見やると、声を大きくする。

「見たこと、あるでしょ？この金髪と、蒼い瞳。レザイア、処刑するところをスクープさせてあげるわ。前代未聞、素晴らしいショーンになるじゃない？」

通路の向こうで看護士が小さな悲鳴をあげる。

「あなた、ドクターじゃないの？ 何者なの？」の連中も、
淡いブルーの瞳を見開いて、レザイアは叫んだ。

「その子を殺すことがどうこうとか分かっているの？ 全宇宙が混乱するわーまさか、テロリスト…なの？」

「私たちは、迦葉。聞いたことぐらいあるでしょう？」

「…」

シンカはやつと瞬きがまとめて出来るようになっていた。ひりひりと肌を焼く薬品。頬を肩で拭う。

「きれいな写真になるといいわねえ。ちゃんと撮るのよ」

「あなたも、写るわよ。顔が知れてもいいの？」

クックと笑つてドクターの姿をしたテロリストは言った。

「写真をとつてくれればいいの。あなたの役割はそこまで」

レザイアは「私も殺すつもりなのね」と、面くがどうかのつぶやきをもらす。レクトのあのメール。自分を護つとしてくれたのだと。今は分かる。

ただ、今更どうしようもない。

テロリストたちほレザイアに撮影させ、殺し、画像データを犯行声明にでも使うのだろう。ジャーナリストとしてそれほど不名誉なことはない。

レザイアは、怒りとともに恐怖がぞくつと背筋を這うのを感じた。

待合室で緊迫したやり取りが続く。

病室で目を開けたユージンは天井の見慣れない景色に瞳だけを動かして、様子をうかがつた。

視界には白い部屋と自分に繋がっている点滴。それしか見えない。

私はいつ
たい？

体を起して初めて、床に広がる血と白衣を着た女の子が倒れていることに気が付いた。

悲鳴が響く。

その声は、静まり返っていたロビーにも届いた。同時にシンカはやつと拘束帶を断ち切つたところだ。

ろに立つマクマスの銃を持つ手を掴んだ。

ぐいと引き付けると、立ち上がりざまにマクマスを投げた。床に背から落ちた女医は何かうめいたが、すでにシンカは奪い取つた銃でマクマスの額を狙つている。マクマスを膝で押さえつける。

「！」の女を殺すぞ！人質を放せ！ドクター、三才の手当を！」

の部下たちがだじろいだ。

奥で押さえつけられていた消化器科の準研究医が身じろぎする。彼はミオのことを気に入っていた。シンカは「お願いしますーミオを、

助けてほしい」と、彼を見詰めた。

「ダメでしょう、ルー。いえ、皇帝陛下。その、イランを見なさいよ、いいの？殺しちゃって。私はどうせ迦葉のコマなのよ。いつ死んでもいいのよ。」

受付ではイランが太った女に殴り付けられたところだ。

「いつたいわねえ！」

イランは小声で、抵抗する。

……人質が、多すぎる。

シンカはイランを見た。そして、横にいるクリフトにも視線を移す。シンカの蒼い瞳にクリフトはじつと見入っている。消化器科の準研究医は目が合うと視線をそらした。結局全員が身動きできないのだ。シンカの作った隙に自らを呪縛するテロリストを殴りつけることなど、そう、民間人では出来はしないのだ。

シンカは小さくためいきをつく。

瞳に宿す怒りが悲しみに変わった。

押さえていたマクマスを開放すると、銃を床に落とした。

立ち上がったマクマスはレーザー銃を拾い上げる。凶暴な視線を生意気な皇帝陛下に向ける。銃を振り上げる。

が、と痛みとともにシンカは床に倒れこんだ。わき腹に蹴り。一つ、二つ。

痛みに体を丸めているものの、シンカはうめき声ひとつあげない。

「可愛いくないわね」

ふんと鼻息を荒く吐き出して、マクマスが残酷な笑みを浮かべる。シンカの髪をつかんで、顔を上げさせる。

「やめて！ 陛下に向するの！」

駆け寄った女性がいた。患者の着る白衣ローブ姿で、細い手足が剥き出しへなるのもかまわずに、シンカに抱きつぐ。

コーディンだった。

「だめだ、コーディン。 病室に、帰るんだ！」

「いやです。このままでは陛下が危険です！」

分かっているのかいないのか秘書官は、まだ少し冷たい髪をシンカのほおに押し当てて抱きついている。

「あら、まあ」

マクマスがあきれた声を出したのと、同時に、もう一人。

「彼を殺されでは困るな」

エドアス・ゲーリントンだった。

迦葉の見張りがいるはずの非常口から入ってきたようだ。手には小型のレーザー銃が握られている。

教授は表情一つ変えずに、コーディンを引き離そうとする作業着の男を撃ち殺した。

コーディンの悲鳴が上がる。

息を呑む気配はするものの、コーディンを除いて声を上げるものはない。

教授は救急救命室の様子を見てもをして驚いた風もなく、つかつかとシンカのそばまで歩いてくる。テロリストも彼には銃を向けようとしない。

「教授」

マクマスがゲーリントンを見つめた。

「シンカは、大切な研究材料なんだ」

「まったく、ねえ、陛下。あなたの周りはなんでそんな、変な人た
ちばかり集まるのかしら」

ユージン以外の視線を集めて、レザイアは派手にため息をついた。

その時、緊急車両到着の警報が鳴つた。

救急高速艇がきたのだ。救急救命病棟ではじく普通の風景も、これ
ほど白々しく響いたことはない。

テロリストたちに緊張が走る。

受付のイランが、同僚に視線を合わせると同時に受話器を取りかけ
る。その手を、太った女が止める。
緊急搬送口のドアが開いた。

シキだ。背後に数人の武装した人影もある。

「ふせろ!」

シキの前には非常警報装置。ちかりと派手な火花が散ると、一斉に
スプリンクラーの消火剤が天井から撒かれる。
どうりとした液状の霧が室内をあつという間に真っ白にした。その
中で、一つの間につけたのか、暗視スコープをつけたシキたちは、
正確にテロリストたちを撃つ。ゲーリントンは一目散に、彼の目的、
つまりシンカに駆け寄った。

看護士や準研究医が悲鳴とともに床に伏せる。

「きやーーー！」

伏せることも忘れ、ユージンは頭を抱えて叫ぶ。混乱しているのだ。

シンカは慌ててユージンを抱きしめた。

姿勢を低くさせる。

それでも秘書官は視点が定まらずもがいて暴れる。細い手がシンカ

を押しのけようとする。

「コーポレート、落ち着くんだ、コーポレート！」

秘書官は震えている。

「シンカ、こっちだ、そんな女に構うな！」

教授がシンカとコーポレートを引き離そうとした時だった。ゲーリントンに撃たれたはずのマクマスが、受付のカウンターにもたれながらにやりと笑つた。ちょうど教授とシンカの背がこちらに向いた。

「あ…？」

シンカは背中から熱い一閃が入り込むのを感じた。

「シンカ！ この、バカものが！」

消防器を吸い込んでむせていたゲーリントンが、マクマスを睨みつけ止めを刺した。

女医は丸く見開いた視線を宙に漂わせ、息絶える。

レーザーに壁紙が焦げるのか苦い香り。ワゴンが倒れ薬品がこぼれ床に広がる。煙る室内。悲鳴。

視界は白くにごり、突入してきた男たちは銃を構え、暗視ゴーグルをつけて走っている。

シンカは頬に冷たいコーポレートの手を感じていた。

声は聞こえない。

不意に咳き込んで、甘くて苦い自分の血の味を感じた。

何も聞こえない。

白い煙の中、暗くなつた視界。黄色い非常灯が点滅するたびに、コマ送りを見るように景色が変わる。何を見ているのか、シンカにも

よく分からなかつた。

コーディンは震えていた。

自分で何を叫んでいるのか、分かつていなかつた。

必死で力なく崩れる皇帝を抱きしめる。

気絶したシンカは重く、女性の手ではどうしようもない。掴んだ手がぬるりと滑り、赤く染まる手で何度もシンカを抱き起しやうとする。

大切なものが手の中で、重く、硬くなつていいく。絶望的な悲鳴をあげていた。

「どけ！」

その手を大きな手が止めて、コーディンの代わりにシンカを抱き上げた。白衣を着た短い金髪の男。穏やかにやりと笑う。

そつ、ゲーリントン教授だ。

帝国軍の増援が到着した時には救急救命室は戦場のように混沌としていた。兵士と、情報部エージェント、搬送される遺体、逮捕される迦葉の男。抱き合つて呆然としているイランとクリフト。ミオを探して、叫んでいる消化器科の研究医。けが人の手當てに奔走する医師。

元の状態が想像できないほど、乱雑に舞い散る書類と薬品、転がるビン、医療器具。すべてがもやもやとした煙に包まれている。

肩を揺すられて、そむきを見ると、黒い瞳でこすりを見ている男。シキ、だ。

「おー、コーディン！」

「シキ、さん。」

シキは、足を撃たれたのか、引きずっている。

「シンカは？あいつは、どうした？」

「陛下？」

気付けば、そこに彼の姿はなかつた。

床にはマクマスの遺体と水溜りのような血の赤。

「教授、あの、男が？陛下、怪我をなされて！」

涙が頬を伝う。

シキは混乱のまま泣き崩れそうなコーリンの肩を抱き寄せて支え、見回した。

「私が」

医師に腕の傷を手当てしてもらつていたレザイアが立ち上がると、駆け寄る。ついてきた医師は、シキの傷に眼をやると止血をはじめ

る。
それにもかまわず、シキはレザイアにコーリンを渡すと、電話でレクトを呼び出そうとする。応答はない。その脇を担架に乗せられたミオが通り過ぎる。

「畜生。迦葉の思惑通りじゃねえか！レクトさんともあらう人が、後手に回つている。」

「軍務官は、多分、今夜ですべてを終わらせるつもりなのよ。」

コーリンを介抱していたレザイアが言った。

「なんだよ、それは。あんた、なんで知ってる！」

「私、雑誌社をやつているの。軍務官の、恋人よ。」

恋人、という前に一呼吸あつたのは少し不自然だった。

「見るといいわ」

レザイアが、携帯電話の画面をニュース映像に切り替えた。

緊急ニュースで、セトアイラスの各地、そして、同時にブループールの地下街でも、帝国軍による一斉攻撃があり迦葉の支部が統べて

壊滅させられていることを報じている。

地図で表されたその個所はセトアイラスのこの都市でも十箇所以上にのぼっていた。

「掃討作戦、つてわけか。だから、俺に病院を任せると・・・」

もし、シンカがここに来なければ、ここではこんな事件は発生しなかつたはずだ。

いや、ユージンがあんなことにならなければ、シンカが病院に来ることもなく、迦葉の作戦が実行されることもなかつた。

急遽、派遣された二人のエージェントは、作戦を未然に防ぐことはできなかつた。

今、レクトに連絡が取れるとは思えない。
床の血痕からすると猶予はない。

「おい、緊急車両を一つ借りるぜー。」

「あ」

追いすがるユージンを、レザイアに押し付けた。

「やだ、何よ！」

「たのむ。」

止血テープを貼つただけの状態でシキは足を引きずりながら建物の外に出て行く。

「なんで、男はみんな勝手なの！もうー！」

いきまくレザイア。傍らの同じ年くらいの秘書官が床の血の池から視線を離せないまま、瘦せた白い手で自分の袖にしがみつくるを感じた。「大丈夫よ、きっと、シンカは大丈夫」おびえたように震えるその手を、ぎゅっと握つてやる。

10・変えられたもの、変わらなかったもの（前書き）

さて、最終章です。

一気に更新、行きまーす！！

10・変えられるもの、変わらずにいるもの

ゲーリントンは、車の中で、ちらちらと後ろを気にしながら、ちらにスピードを上げた。

青い顔をした青年は、意識が混濁しているようだ。

あれだけの出血。右肩甲骨を貫いて、脇ばらに抜けたレーザーの銃痕。肺を傷つけたのか、呼吸が荒い。口からは、細く赤い液体が流れている。

肝臓、秘蔵、腸。考えられる負傷個所すべてを想像している。

死なせるわけには行かない。

「ちつ」小さく舌打ちする。

怒りのあまり、車で轢いてしまったときも、ゲーリントンは今と同じ顔をしていた。

恐怖におののいた表情。大切なものを、失つてしまつ畏れ。

あの時は、シンカが目覚めることでその表情は消えうせ、いつもの皮肉な笑みを浮かべたのだが。

今は、違つた。圧迫による損傷とは違つ。レーザーの傷は、組織を焼くため、再生に時間がかかるのだ。再生される前に、心臓が止まつてしまえば、それは、死を意味する。

彼の、治癒能力の限界を超えるれば、死はいつでも訪れる。

大切な研究材料を、失うことはできない。

宇宙で唯一の、貴重な生体なのだ。これを失つたら、もう、研究はできない。初めてデイラに配属されて以来、ゲーリントンはシンカという生き物に夢中になつた。その、無限の可能性を感じさせる生命の力、それでいて不意に高熱を発して生き物としての脆弱さを見せる。研究すること自体が、この上ない快樂なのだ。一つ一つ、なぞを解くような、この研究が、ゲーリントンを魅了していた。それが、終わってしまう！

迦葉のために失うわけにはいかない。

とにかく、研究所にある、彼の血液を輸血したい。それが、一番早いはずだ。治癒の助けにもなる。

研究所に入ると、指示したとおり、助手たちがストレッチャーと輸血の準備を済ませていた。車から三人がかりでそっと降ろす。シン力の状態を見た助手の一人が、目を背けた。

彼の顔色はひどかった。

死が、迫っていることを予感させた。

研究室に運び込むと、すぐに体温程度に暖めた血液を輸血する。血胸の処置だけして、呼吸を維持すると、後は彼自身の治癒能力にかかるしかなかつた。

血に濡れた服を剥ぎ取り、助手が体をきれいにしている。髪にまでべつたりとついた血液を、丁寧に、濡れたタオルでふいている。他にできることがないのだろう。

ゲーリントンは、心拍数や血圧、酸素飽和度を伝えるモニターを見つめながら、考えていた。

彼らにとつても、この、特殊な生き物の存在は大きいのだ。再び研究のことが、思考を占める。

その体に秘めたものは、計り知れない。地球人は約二万六千の遺伝子を持つ。その遺伝子の数はトリやマウスとほぼ変わりがなく、ただそれを構成するゲノムサイズがマウス二十六億にくらべ、人は三十一億ある。つまり、高等な生物ほどゲノムサイズが大きいということになる。その観点から調査すると、二百年生きるというセダ星人は約四十億、そしてシンカは、デイラの研究所時代に、遺伝子自体が約八万、ゲノム数は百億に近いと予測されている。そこにある情報とは、なんなのか。そこには、この治癒能力を説明できる何かが、不死という人類の夢が、隠されているといつてい。今は、まだ、遺伝子の研究は禁止されているために行えないが、いつか、自

分の手で解明したいと考えていた。そのためにも、たくさんの血液を採取したのだ。

「酸素飽和度、改善しました。」

助手の一人が、ほつとしたように言った。

「ああ。顔色もよくなってきた。マスクをはずしてやれ。」

そつと、金色の髪がかかる額をなでる。

「相変わらず、すぐに熱を出すな。」

「冷やしますか。」

助手の言葉に、ゲーリントンは穏かな笑みを浮かべ、うなずいた。ほつとしたのだろう、教授の表情はやさしい。

温かい毛布をかけられ、額には冷却シート。大勢の医者に囲まれて、シンカは思いもかけず、温かい歓迎を受けていた。

その時、研究所のゲートから、警報が鳴る。

侵入者、だ。

事務所に戻つて、モニターを見ると、エントランスから、シキが入つてくるところだった。

先ほどまでの、表情はなくなり、ゲーリントンはいつもの皮肉な笑みを浮かべた。

「マリアンヌの、お父さん、だな。」

ポツリとつぶやくと、髪をかきあげて、ネクタイを調えた。

「ゲーリントン、シンカはどこだ！」

その声は、遠くから聞こえていた。

「君、迎えに行つてくれたまえ。」

そう、指示された助手が、あわてて走つていく。

10・変えられるもの、変わらずにいるもの2

黒髪の獅子と呼ばれるシキを迎へ、ゲーリントンはにこやかに笑つた。

「お待ちしてました」

「シンカに何をした！」

横たわるシンカにかけより、シキは起そうとする。

「駄目です！彼は撃たれて、大怪我をしています！内臓に損傷が激しいので、安静にしないと…」

「今、輸血が終わつたところです！教授が、ここにしか彼の血液がないから、運んでくださつたのです！」

そう言って、シキを止めたのは一人の助手だつた。

「助けてくれた、のか？」

「そうです」

助手の一人が誇らしげに言つた。

その表情がゲーリントンの心に引っかかつた。

理由の分からぬ不快感にゲーリントンは苛立つ。

「彼は、大切な存在ですし。それに、いい人です」

もう一人の助手がそう言つと、ゲーリントンは不快感の意味がわかつた。

いつの間にか、助手たちは、あのデイラ研究所の奴らのように、シンカを人間として、扱い始めている。

なぜだ。ゲーリントンは常々助手たちに、研究材料であること、人間の姿をしていてもそれは人間でも植物でもない生き物であること強調してきた。モルモットに気持ちを入れてしまつては研究ができないからだ。

それなのにいつの間にか、彼らはシンカを大切に思つてゐる。どう

してなのか。

助手の説明で、落ち着いたのか、黒髪の男は皇帝の横に膝をつき、その顔を見つめている。

青年の白い額に、熱を測るよじにそっと、自分の額を合わせる。
「すまん。守れなかつた・・。」

小さくつぶやく。

その様子を眺めていたゲーリントンは、苛立っていた。
この男もそうなのか？

ゲーリントンの不快感は、頂点に達しようとしていた。
イライラする。なぜ、みな、研究材料のあれに、惹かれてしまつのか。

不意に、シキが小さく叫んだ。

「シンカ！ 気が付いたか！」

シンカは、蒼い大きな瞳をうつすら開いて、目の前のものを、判別しようつと少し見つめた。

「・・シ・・」

言いかけて、咳き込む。痛むのだらつ、咳き込みながら手で患部を押さえる。

「大丈夫か！」

黒髪の男に視線を戻そうとするが、それもできず、吐き出した血を手につけたまま、痛みのために意識を失いかける。

ゲーリントンが傍らにたつた。

皮肉な笑みを浮かべて、その手をふき取つてやりながら、教授はシキに言った。

「しばらくは動けません。」

「何か、してやれないのか？」

「薬は効きません。麻酔はコンイラと過剰反応を起しますしね。いつも、気絶したほうが本人にとつてはいいのだと思いますよ。痛み

止めも、なにもできないのですから、つらいでしょうね。私なら、自然治癒しなくてもいいから、普通の治療が受けられたほうがいいですよ。」

「・・・そうか。」

黒髪の男が、視線を青年に戻す。

「教授、あの、アルコールは、どうでしょう。」

助手の一人が言った。

「アルコール？」

「ええ。彼には、ほぼすべての免疫があるというか、薬は何も効きませんが、アルコールを飲むと眠ってしまいます。麻酔代わりに使えませんか？」

「・・・それは、いい考えですよ。もつ出血は止まっているようですし。ねえ、教授。」

「このまま、痛みに耐えるのはつらいですよ。その方が楽になるかもしれません。」

シキも、少し表情が明るくなる。

ゲーリントンは、穏かないつの表情を、一変させた。

「だめだ、このあと、骨組織の採取をする予定だ。止血が遅くなる。

」

否定された助手が、驚く。

「組織の採取つて、教授、麻酔もできないですし、どうやつて？」

「しかも、つい先ほど、生死の境をさまよっていたんですよ？ 彼に、メスを入れるんですか？ そんな。」

食い下がる助手たちを睨んだ。

いつもと違う、見たことのない教授の険しい表情に、彼らは一步下がった。

「可哀相、か？」

皮肉な笑みが顔に張り付く。

「こいつは研究材料なんだぞ。忘れたのか？ 死にさえしなければいいんだ！ 骨の一部を削り取つたからといって、死にはしない！ 今し

かないんだ！骨髄の培養は研究に不可欠だ！」
うつむいたり、目をそらしたりする助手たち。
その様子が、ますますゲーリントンを怒らせた。

デイラの研究所で、ゲーリントンの方針に従おうとしなかった研究員の態度と重なった。あいつらと同じか。結局、自分たちも同じ研究をしてきておきながら、俺だけ患者にして、自分たちがしてきたことに目をつぶっている。ロスタヌスもそうだった！ 研究材料として産みだしたくせに、いざそれが人に似ているからといって、子供のようく育てるとは！ 実験用の動物を可愛がって、人になつかせるのと同じではないか！ 結局その命を奪うときになって、動物は裏切られた悲しみとともに死んでいくんだ。

自分だけ、哀れみを持つた振りをしている、愚かな研究者たち！

「お前たち、何を研究してきた！」

「おい、いいかげんにしろよ、死にさえしなければ何してもいいだと！？」ふざけるな！」

黙つて様子を見ていたシキが、怒鳴つた。
こちらの形相も険しい。

助手たちはますます縮こまつていて。

「シンカは貴重な存在ですよ。」

シキに胸元を捕まれて、教授は睨んだ。

「マリアンヌが、健康でいるためには、彼の血液製剤が必要です。
そう、教えてあげたでしょう？」

シキは、手を離した。

「あなただって、心の中では思っているはずだ。娘を助けて欲しいと。今の法律では、彼の血液を採取することもできない。それでは、マリアンヌは助からない。」

「だが、シンカは・・・」

「大切、とでも？ 幼い娘より、大切ですか？」

黒髪の男は、拳を握り締めた。

「あなたの可愛いマリアンヌのためだといえど、シンカは喜んで協力してくれますよ。そして、マリアンヌの治療ができるのは私だけなんだ。」

「・・・シキ。」

シンカが、力ない声で、瞳を閉じたまま、傍らの男に声をかけた。びくりと、おびえたようにシキは青年を見つめた。

知られたくない。シンカを研究してほしいと、そしてマリアンヌを助けてもらいたいと考えている自分を、見透かされる。

「・・・いい・よ。どうせ、今も、痛い、し。」

そう、苦しげに言葉をつなげる青年に、シキは目をあわせられない。蒼い、吸い込まれそうな瞳は、切なげに微笑む。

絶え間なく鈍く重い痛みを訴える身体を、なだめるようにシンカは考へる。

大丈夫、傷はふさがつていいはずだ。ただ、痛みだけが残っているんだ。いつも、そうだから。

マリアンヌの、診断結果が真実なのかは、俺には分からぬ。だけど、シキがそう望むなら、それでいい。いつか、誰かの役に立つために、この体内にコンイラを持つてはいる。そつ、母さんも、そのためにオレを作ったんだ。

「そんな、無茶な・・・」

助手の一人が、手で口を覆つた。

「今、そんな負担をかけられれば、本当に死んでしまいます!」

重苦しい沈黙が漂つ。

「悪いが、お前にそれをさせるわけには行かないぜ、エドアス」

10・変えられたるもの、変わらなかったもの（前書き）

さて。これで最終話。

最後は一気に行きましょう～～～！

10・変えられるもの、変わらずにいるもの

いつの間に入り込んだのか、処置室の戸口に軍神と呼ばれる男が立っていた。黒一色のスーツ。組んだ手には皮の手袋をしている。仕事なのだ。背後にこちらはいつもどおりの服装で、カストロワ大公もいる。

助手の幾人がが顔を見合させて、尊敬のまなざしを向けていた。

「レクト！」

「レクトさん！」

シキとゲーリントンは同時に叫んだ。

エドアス・ゲーリントンは薄い唇に神経質な笑みを浮かべた。

「取引は成立ですよ。軍務官。私はあなたの言つとおり、迦葉の情報流した。その交換条件は飲んでいただけたはずですが？」

「ふざけるな。俺に従う振りをしながらコーディンを使つただろ？」「？」

レクトの切れ長の瞳が教授に怒りをぶつけていた。つかつかと歩み寄る。

「レクト、それ？：なに？」

起き上がろうともがくシンカをシキが慌てて押さえた。

「ばか、動くなよ」

「けど・・・」

青年は荒い息で苦しそうにシキを見上げた。

「なんだ、知らないのか」

揶揄するように教授は笑い「遺伝子上の父親とはいえ…」呆れたよう手を上げたところで遮られる。

「言つた。殺すぞ」

軍務官に白衣をつかまれてもゲーリントンはまだニヤニヤと笑っていた。

「民間人に、乱暴はいけませんね。・・シンカ。私は迦葉に縁があ

つてね、迦葉の情報と引き換えに、君の担当教授になることを許可されたんだよ。それなのに君の採血をしただけで軍務官は私に圧力をかけてきた。それで仕方なくコーディンを使ったわけだ。君を迦葉から護る代わりに私を君の専属医師としてもらうためにね。もともと、この男は、自分の手柄のために迦葉を一掃したかつただけなんだ

「エドアス。それは、違うぞ」

胸元を締め上げられ、教授はピクリと眉を寄せた。それでも楽しそうに続けた。

「隠すこともあるまい。何の理由をつけても結局はシンカを餌に、私と迦葉を操ろうとしたんだ。私との約束はどうなりました？私はあなたとの約束は果たしました。そのうえ、シンカを守つてやつたんだ。私がいなかつたら彼は死んでいた。感謝されるべきでしょう？あなたが私を傷つける理由はないはずですよ」

「お前は、忘れたのか？」

レクトの表情は冷たい。

教授を突き放すと、スーツの胸元から銃を取り出した。

「レクト、…何するんだよ！？…だめだ、ぞ」

大きな蒼い瞳を目一杯広げて、シンカはレクトを見つめた。肩に置かれたシキの手をつかんでいる。

「お前は黙つていろ」

レクトはちらりとシンカに視線を投げかけた。

「レクトさん、あんた、シンカを利用したんですか！？だから、俺やシンカに、迦葉のことを告げなかつた！」
シキは黙つて目を見開いているシンカの肩に手を置いた。

「だからなんだ？もともと俺は、ゲーリントンは処分する予定だつた。シンカ、お前がこの惑星に来ることを決めたときからな」

銃口の先で教授は一步下がった。

顔面は蒼白だ。

やりかねないのだ、レクトなら。レクトの何の感情も表さない表情は、嫌味なくらい端正で。ゲーリントンをぞくぞくさせた。

誰もが、身動きできずにレクトを見つめていた。

「いいか、シンカ。こいつは、かつて『デイラ』の研究所にいた。当時二十代前半だったが、赴任すると同時にこいつはお前のことをモルモット扱いし始めた。俺は馬鹿な研究者がお前を傷つけることを恐れて手を回した。こいつは栄転という名の移動で、ここ、セトアイラスに戻った。だが、こいつは俺を憎んでね」

「当たり前だ！ そ、うか、やつぱりあんたが手を回していたんだな！ なんだかんだと理由をつけて、あいまいなまま私をシンカから引き離した！ 私はこの研究を続けたかったのに！」

「ゲーリントン、お前は俺に仕返しするために皇帝に吹き込んだだろ？ シンカの細胞を手に入れれば、永遠に生きられるなどと。おかげで皇帝は後継者としてではなく、シンカを自らの材料として捕らえようとした。だから俺は『デイラ』を滅ぼした、シンカを守るために。すべての原因はゲーリントン、お前にあった！」

教授とレクトはこりみ合つた。

「ちょっと待てよ。……レクトさん、教授も。シンカは人間なんだぞ。レクトさん、あんた『デイラ』でシンカを守つたんだろう？ なのにゲーリントンへの復讐のために、利用したのか……？ それじゃ、まるで……」

しがみ付くように支えられているシンカに、視線を移して、シキは言葉を選んだ。

「それじゃ、教授と、なんら変わりない……」

「いいよ。シキ。分かつてるとよ……もう、いい

シンカの、青白い顔はむしろやさしげな表情を浮かべていた。

「もう、分かつてるから。仕方ないんだ、そうだろ？·そうやって、生まれてきたんだ。そういう、生き物なんだ」

静かに話していく中、シンカが掴むシキの腕には、かすかな震えが伝わる。傷つかないはずはないのだ。シキは唇をかんだ。自分自身も、マリアンヌのために想像しなかつたか。シンカが研究に力を貸してくれることを祈らなかつたか。

シンカは、すべてを受け入れようとしている。

「シンカ。俺はお前の肩書きを利用する。それがお前の仕事でもある。それをお前が不満に思つるのは自由だ。だが、ゲーリントンだけは許さない。もともと、取引などするつもりはないさ。俺が利用したのは、お前じゃない、ゲーリントンなんだ」

軍務官は、哀しそうでもある笑みを、皇帝に見せる。そして、ゲーリントンに冷酷な視線を向けた。

「俺は、ゲーリントン。お前を処分できるこの時を待つていた。お前が前皇帝をたきつけたために、デイラの運命も、そう、宇宙すべての歴史が変わつたんだ」

レクトの冷たい声が響いた。彼が自ら破壊した街、そして、その街と運命とともにした愛する女。

ロスタネスの顔が、軍務間の脳裏に浮かんでいるのだろう。シキはそう思えた。

「何を言つ！勝手に行動したのでしそう！リトード五世も、大公もあなたも！私は真実を報告したに過ぎない。私を処分する正当な理由などないはずだ」

「私が、許可したんだ」

カストロワが視線をそらすことができずに震えているシンカの額に手を当てながら言った。

「見込んでいたのだがな。私を裏切つただろう？迦葉をそなたが組織したとは気付けなかつた。私の支援は間接的に迦葉を支えていることになつた」

レクトがうなずいた。

「教授が、迦葉？」

教授に一番近い助手が、驚いて離れた。シンカも教授を見つめようと、そちらに顔を向けた。

軍務官は続ける。

「迦葉の拠点はすべて、制圧した。悪いな、ゲーリントン」

「何を言つてゐる？私とは関係ない！」

ゲーリントンの顔は青ざめ、皮肉げな口元は引きつるような笑みを浮べる。

「お前は惑星リュードから植物のコンイラを手に入れるために、迦葉を使つた。そこから足がついたんだ。迦葉がこの研究所のためだけに危険を冒してコンイラを密猟し、売りつける。いくら高価とはいえ麻薬のような利潤は望めない。普通はそんなビジネスはしないものだ」

「！」

「それに、迦葉が若者を引き込む手口が、まるで大公がコレクションにするような支援の形をとつてゐたのも以前から気になつていてんだ。ドクター・マクマスも、支援を受けて医者になつた。同じよ

うな支援の申し出を今回の研究生にもしているだろ？ケイナ・ドマネスがお前から支援の申し出を受けたと証言した。そして、この助手たちの中にも、見回したレクトの視線に、びくりと肩を振るわせる助手が二、三人いた。

同時に小さな地響きとともに、床が揺れた。警報が鳴り響く。

「なんだ？」

慌てた様子のゲーリントンに、レクトがにやりと淵みのある笑みを浮かべる。

「（）には、破壊する。迦葉からウンイラを購入していたために襲撃を受けた、そういうことになる。そして、ゲーリントン。お前はその犠牲になるわけだ。大公のコレクションが、迦葉を率いていたなどという、不名誉な事態は避けなければならないのではな」

「きさま！」

「コレクションであるお前を大公が手放す気になつてくれて助かったよ。さすがに、帝国情報部も大公のコレクションには手が出せなくてね。ゲーリントン、あきらめるんだな」

カストロワ大公が口元を緩ませる。

おびえる助手たちに向き直つて、レクトは続けた。

「さて、君たちの処遇は決めてある。ここで死んだことにして、ブルブルの研究所で別の人間として研究を続けるか、本当にここで死ぬか、だ」

「そんな！私たちはただ、教授に命じられたから、仕方なく！」

「人が不満げに叫んだ。

「仕方なく？」

睨み返す軍神の黒い瞳は、鬼気迫る表情を作る。

「皇帝の血液を採取した時点で、反逆罪、帝国憲法違反、傷害罪、医師法違反、数えればきりがないくらいの罪を犯しているんだ。曲がりなりにも、帝国医師免許を取得して白衣を着ているからにはその責任は重い。誰かの指示だらうと脅されようと、何の理由にもならん。しかも、皇帝の誘拐を帮助し自由を奪うことに協力している。この場で銃殺されても文句は言えんと思つが」レーザー銃が助手に向けられた。

「！」

「ただし、この場での出来事は公にはしない。だからこそ、お前たちにも生き残る選択肢を残してやつたんだ」

「……」

助手たちはうなだれた。

「もしや、デイラのあいつらも……」

教授が思い当たつたようにつぶやく。

「ああ。処分されたことにはなつてているがな」

「……私が、悪かった、私もそこで研究を続けさせてくれ！」

ゲーリントンは床に膝をついて頭をたれる。

「研究を続けられるならどこでもいい。どんな名前に変わろうとも

かまわん！私は、シンカの研究を続けたいのだ！」

そう言つてすがりつくようにレクトの足元にうずくまる。

「おいおい」

その卑屈な態度にシキは呆れ顔だ。

「お前だけは、許さん。一度とシンカに触れさせん。デイラでもそう言つたはずだ。近づくなと」

レクトの苦い表情。デイラで何があつたのかは、二人にしか分からぬ。ゲーリントンの不敵な笑みが、さらに軍務官を怒らせる。その手の銃が教授を狙う。

その時、不意にシンカの横たわるストレッチャーの電動装置が動いた。

顔を伏せたままにやりと笑う教授の白衣の胸元にそのリモコンがあ

る。寝台がゆっくり下がり、同時に背にした部分が立ち上がりはじめた。上半身を起すための装置だ。シンカは体制を保てずに落ちかかる。

「危ない！」

皆がそちらに気を取られた瞬間だった。

ゲーリントンがどこに隠し持っていたのか、身を起しそれまた手にした銃で、レクトを撃つた。

わき腹を押さえる軍務官にシキが助けようと駆け寄る。教授から引き離した。

その隙に教授は大公を押しのけて、横たわるシンカを引き摺り下ろす。

「教授、止めて下さい！」

止めようとした助手が一人撃たれた。

皆が同時に動きを止めた。

既に教授の銃は、シンカの額に当たっている。

シンカは苦しそうにうめいた。

後ろから首に腕を巻きつけられ、身動きできずに引きずられて行く。

「ゲーリントン、貴様！」

銃を構えるレクトに教授は勝ち誇ったように叫んだ。

「これは私のものだ！私が研究を続けるのだ！貴様らには渡さん！」わき腹を押さえ、栗毛の男が冷酷な瞳に怒りを宿しながら、教授に向かつて歩き出した。

「レクトさん！」

シキが止めようとする。

その腕を軽く払つて、軍務官は長いコートのすそをひらめかせながら、ゲーリントンを追い詰める。

ゲーリントンは、レクトを睨みつけた。

「来るな！シンカを殺すぞ！」

「お前にはできない。研究を続けたいんだろう？その研究材料は、お前にとつて何よりも大切だからな」

「・・お前に私の気持ちがわかるものか！軍人などに！」

「いいかげんに気づけよ。お前も同じなんだよ。あの助手たちと

部屋の隅に追い詰められて、教授は壁を背に留まる。シンカは力の入らない足を何とか引きずつて、倒れずにいる。

「ゲーリントン。お前の執着は、コーディンのそれとも似ている。自覚しろ」

「うるさい！私をあんな馬鹿女と一緒にするな！あの女は、シンカに手を出すな、などと私に、この私に説教するんだ！シンカを一番愛しているのは自分だなどと。許せなかつたよ。

シンカを最も必要としているのは私だ！その価値を知っているのも

「あの女はそれをくだらん愛情などと比べやがつた！・・だから、薬を打つてやつた。シンカ、お前の知っている薬じゃない、麻薬だ。致死量ぎりぎりでね、生かしておいてやつたんだ。」
教授は笑っていた。

「面白いくらいに簡単に、狂いやがつた！」

神経質な漆黒の瞳は、何を映しているのか。

「教授が、コーディンを！」

シンカの蒼い瞳が大きく見開かれる。全身を貫く痛み以上の何かが、はじける。

足に力を入れ、シンカは背後の男のわき腹に精一杯の力で肘を打ちつけた。

「ぐつ！お前

銃を持つ手でわき腹を押さえる男の腕を、シンカは崩れるようすにすり抜けた。

その後。

レクトの放つた白い一閃が、ゲーリントンの額を貫いた。助手たちが、息を呑むのが伝わる。

シキが駆け寄る。

シンカは背後で崩れるように横たわる教授を感じながら、痛みに動けずについた。

シキが座り込んだままのシンカを抱き上げた。

「ユージンは、俺を助けようとしたんだ。……あの夜喧嘩して、俺、ひどいことを言って彼女を拒絶したのに、なのに」

シキが微笑んだ。

「大丈夫。彼女は治るさ。まだ、研究生だけど、いずれ大物になるだろう、立派な医者が。な、ついてるんだろう？」

「シキ」

「私も協力を惜しまないよ。ブループールの専門の医療機関を手配しようつ」

シキの背後に立つカストロワ大公が、めずらしく微笑んだ。

「大公。ありがとうございます」

シンカは何か微笑んで見せた。

「ついでにマリアンヌもお前が診てやつたらどうだ？」

レクトがつまらなそうな顔で言い捨て、部下に指示を下すために携帯電話を取り出す。

「おいおい、ついでつてのはなんじゃないか？」

シキが慌てる。

「なんだよ、俺じや、いやなのか？」

痛みに息を切らせながらも拗ねてみせるシンカは真上にあるシキの顔を見つめる。

「マリアンヌが、お前にほれたら困るだらうが！」

一人に背を向けて部下に指示を下していたレクトが、小さく噴出す。

「なんだ、親ばかだ」

笑う若い皇帝をカストロワは目を細めて見つめていた。

この夜、セトアイラスは、この地にその名をつけられたとき以来、初めてといつていいほど、騒がしかつた。

市街地を走り回る緊急車両や、軍の飛行艇。この喧騒のさなかに、郊外の研究所の一つが爆発炎上した。その爆発も、コート・ロティ大学病院の事件も、多くの中の一つとして、片付けられた。

情報部が手を回す必要もなかつた。

何しろ、全宇宙の主要六惑星で同時に作戦が展開されたのだ。見事、としか言いようのない結末となつた。

迦葉を名乗るすべての組織が、この宇宙から消えた。

三日後。

研修は後一日といつとこりで、やつとシンカはコート・ロティに出勤することを許された。

事件のあつた日の翌日には痛みもほとんどなかつたのだが、事件の後片付けで病院側が拒否したのだ。

破壊された救急救命室と、怪我をした病院関係者、なにより、皇帝の存在を知つてしまつた彼らをどうするのかが学長の悩みだつた。さすがに大学の理事たちには隠しきれず、臨時の役員会で槍玉に擧げられた。結局は帝国の広報との話し合いで、皇帝がセトアイラスを去つた後に公表し、皇帝からの正式な感謝の表明と謝罪で病院の面子を保つということで落ち着いた。

カストロワ大公からの病院修復のための多大な寄付金もそれに寄与した。

どちらにしろ、今、各惑星のメディアは迦葉の事について争つて記

事にする」と忙しく、病院が襲われた理由などはまだ興味はないやうだ。

もつ、その必要がないといつて、シンカは本来の姿で病院に姿を現した。

受付のイランが彼の姿を見つけると、カウンターに肘を着いて書類を見ていた姿勢を慌てて正した。

シンカは笑つていつもどおり挨拶する。

「おはよう」「わこまや」

「あ、はー」

「・・・イラン、変だよ」

青年ににっこり笑われて、なぜか顔を真っ赤にするイランにクリフトが噴出す。

「ほんと、女つて奴は。おはよう。ルー」

いつもどおりの挨拶を返してくれるルーディネーターに微笑んで、ルーはロッカーに向かう。最終回。

「ルー兄ちゃん…今日は髪の毛ちがうなー」

そう言つて駆け寄る子供を、抱き上げる。

「おはよう。早起きだな」

「おう、俺はめんえきびょうとう子供軍団のリーダーだからなー」この前の事件から、朝は病院内を警備する決まりを作ったんだ…。七歳の男の子は細い腕をふりあげて威張つてみせる。

「ルーも入れてやるよ」

「そうか」

シンカは笑つて応える。

「だから研修終わつてもちゃんと来るんだぞー特別に入れてやるんだからなー！」

その小さな瞳にほんの少し寂しさを見て、シンカは嬉しくなつた。

「了解しました、リーダー」

そんな二人の後姿を看護師たちが見つめていた。

＊＊＊

ブループールの春は終わろうとしていた。

少し歩くと汗ばむくらいの日差しにシンカは目を細める。

帝国病院の庭を彼は歩いている。見舞いの帰りだ。

コージン・ロートシルトは無邪気な表情で彼を迎えた。知つていてはいけない機密情報とともに、たくさんのことを見失してしまった。ただ愛しい皇帝のことだけをつわごとのように繰り返し話す。話している相手が皇帝本人であることも分かつてはいなかつた。いつか思い出すのかもしれない。

シンカの金色の髪が傾きかけた午後の陽光を弾く。その大きな瞳はやさしく一つ瞬いた。

あどけなく幸せそうに微笑む彼女の表情を思い出していた。

傍らの白い犬は庭に咲く黄色い花に鼻を押し付けてふんふんとやっている。

「まつてよ、シンカ！」

こちらも黄色い花に寄り道して、小さい花束を胸に抱えたミンクがシンカに追いつく。銀色の髪がキラキラと揺れた。眩しく感じてシンカは目を細める。

ミンクはシンカの手を握つて、赤い大きな瞳が無邪気に見上げる。

「見てみて、かわいいでしょ」

「お前がな」

不意の言葉に真っ赤になるミンクを、シンカは抱きしめる。

地球に戻つてからミンクはコーディンについて何も聞かなかつた。それどころか、憧れの秘書官が病気になつてしまつたことを本氣で悲しんでいた。

今日もまるでシンカのことを恋人のように繰り返し話すコーディンに、いやな顔一つしなかつた。ただ哀しそうに見つめていた。

「ありがとう。信じてくれて」

シンカの甘い香りに包まれながらミンクは笑つた。

「だつて、コーディンの気持ちわかるもの。同じだから」

「ミンク」

赤い瞳がぐるりと瞬いた。

「シンカ、愛してる」

ミンクからその言葉を聞いたのは初めてだつた。

「今回のね、いろいろと騒がれたことで、ちゃんと言つてなかつたつて思い出したの。私はコーディンみたいに頑張つてない、だから、頑張る」 そうミンクは笑い。

頬を真っ赤に染めた。

シンカは腕の中の温かく優しい陽だまりを、もう一度強く抱きしめた。

「ミンク。ちゃんとしてなかつたの、俺も同じだ」

「え？」

シンカはレクトの言葉を思い出していた。ミンクは常に近づいてくる死期を感じているはずだ。それがどれほど恐ろしいことか、シンカにも想像できない。

だからこそ、一つでも悲しませる要因は、俺が取り除くべきなんだ。

「結婚しよう。皇妃になってくれ」

うなずいた少女の持つ黄色いブーケが、春風に揺れた。

了

10・変えられないもの、変わらざるべきもの (後書き)

「蒼い星」シリーズ。どれも長いものにお付き合いくださつてありが
とうござります！

皆さんの応援クリックのおかげで、「アルファ・ポリス」SF小説部
門で頑張っています

勢いに乗つて。

次回から、シリーズ完結編をお送りします！

シンカくんたちは、生まれた星へと帰ります。変えられない過去と
悲しい現実をしつかりと見極めるために。

これまで応援してくださった皆様にさきつと楽しんでいただけるは
ず！

お楽しみに！

2008.10.12 筆者拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9503e/>

蒼い星 3rd Story

2010年10月17日20時14分発行